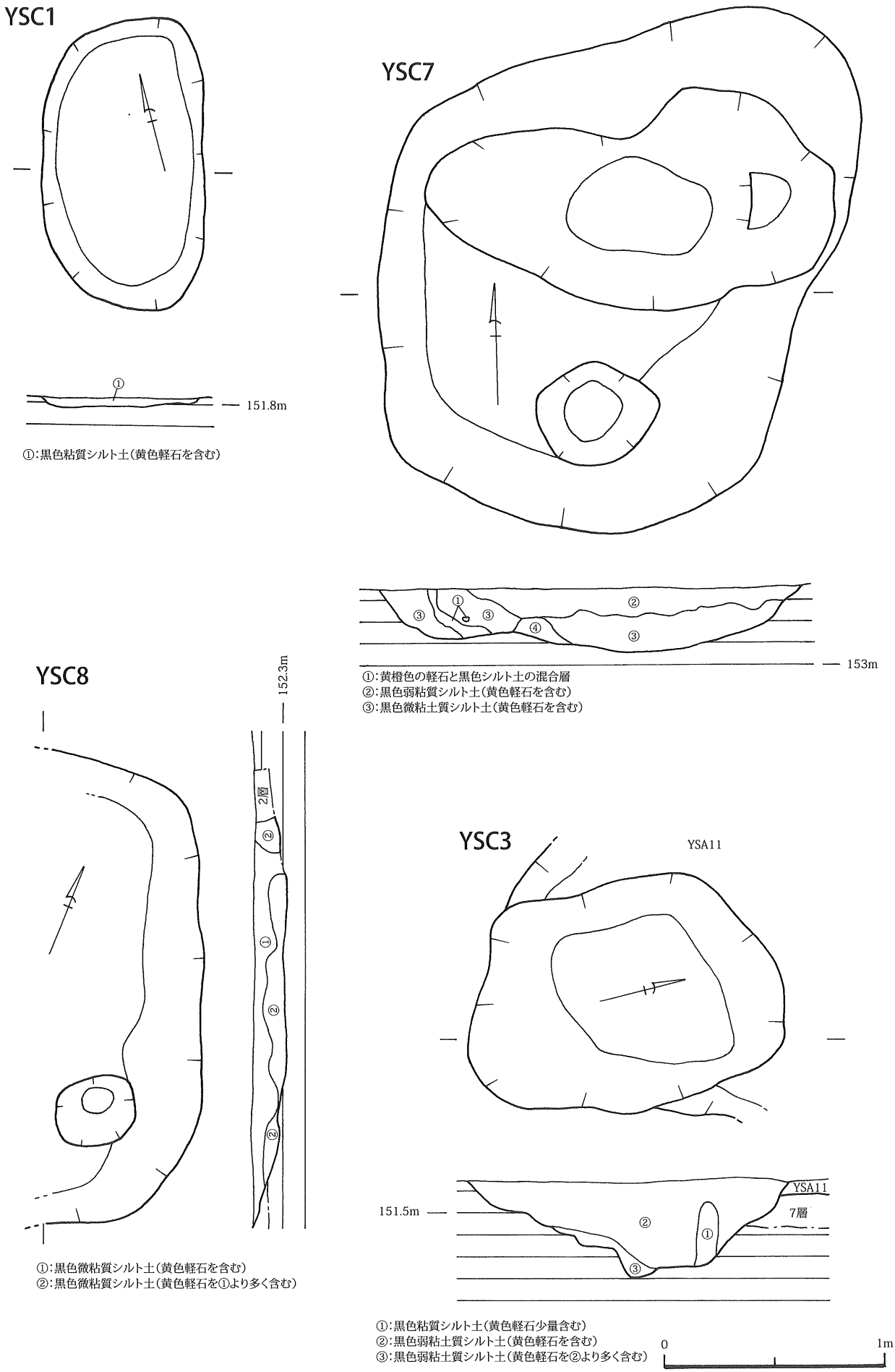



**図101　土坑 YSC1・3・7・8 実測図**

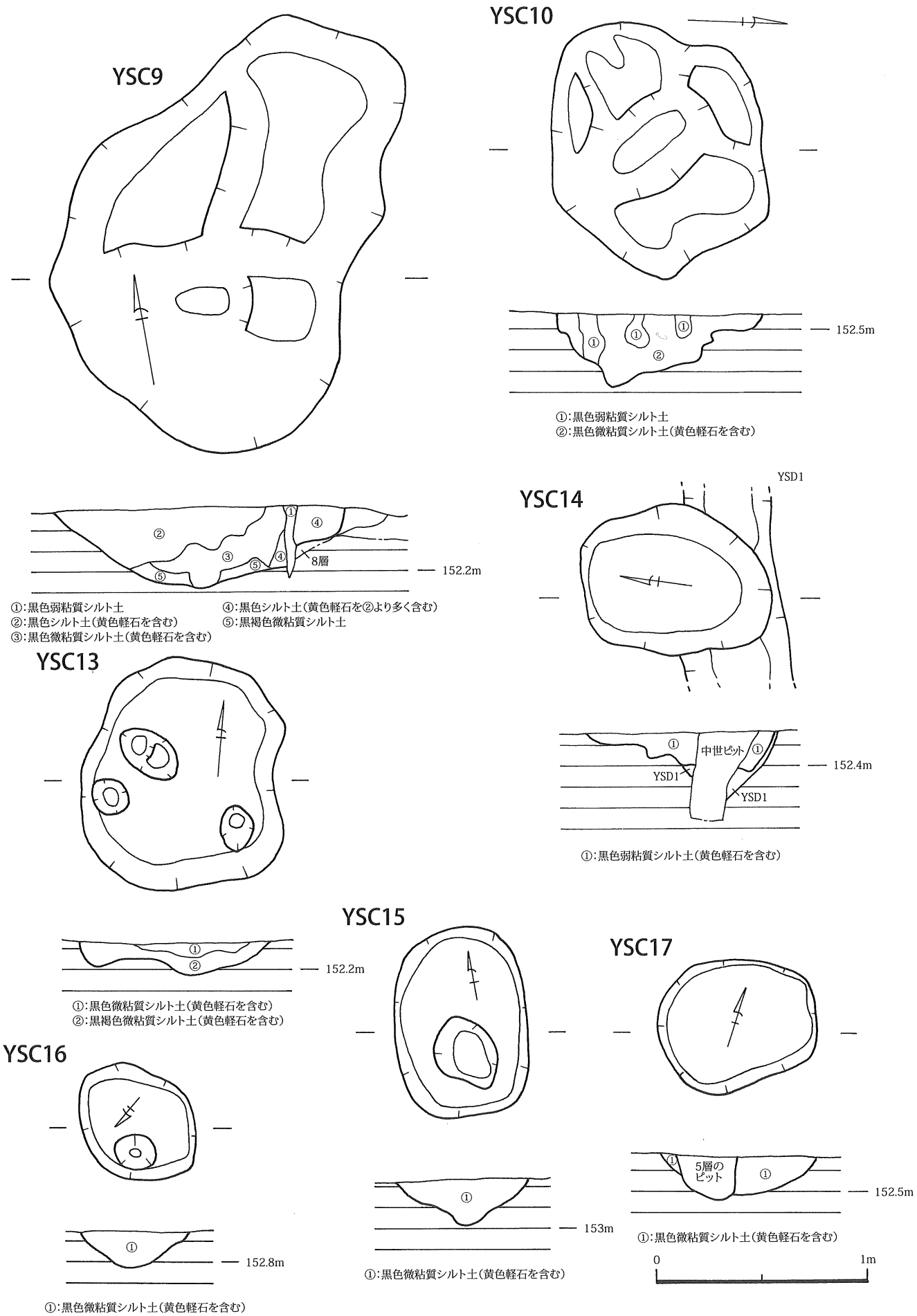



図102　土坑 YSC9・10・13・14・15・16・17 実測図

**土坑出土土器・土製品**

**YSC07 出土土器（図 104）**

**642** は二重口縁壷の口縁部である。端部が欠失している。**643** は甕の底部である。脚裾は開き、上げ底状をなす。

**YSC13 出土土器（図 104）**

**644** は甕の口縁～胴部である。復元口径は約 20cm でやや小型である。口縁部は外反して伸び、口唇は平坦につくる。胴部は緩やかに膨らむ。胴部外面には左上がりのタタキが施される。内面はナデである。**645** はミニチュア土器である。完形で外形は無頸壷のような形である。

**YSC22 出土土器・土製品（図 104）**

**646** は甕の口縁～胴部である。口縁部はゆるく外反し、口唇は丸く仕上げられる。胴部は膨らむものと思われる。外面にはハケメが残る。**647・648** は円盤状？の土製品の半分が折損したものと思われ、**649** も同じ製品の破片である。胎土には砂粒などの鉱物があまり含まれていないようである。

**YSC23 出土土器（図 104）**

**650** は壷の口縁部である。復元口径は約 18cm。口縁部は単純に外反し、先端は先細りとなる。**651** は鉢の口縁部である。復元口径は約 22cm を測る。外面には部分的に横位ミガキが残り、内面にはハケメが残る。**652** は鉢の底部である。底径は約 5cm。脚台状になっており、指頭オサエにより整形されている。

**YSC24 出土土器（図 104）**

**653** は鉢で口縁から底部まで揃う。復元口径は約 9cm、底径は約 4cm、器高は約 8cm を測る。底部はメンコ状の粘土板を貼付して整形している。

**YSC25 出土土器（図 104）**

**654** は壷の口縁部である。外面にハケメが残る。**656** は壷の底部で底面付近に 2 本の線刻が描かれている。

（文責：加覧淳一）

**土坑出土石器**

**YSC07（図 105）**

石器は磨製石鏃片 1 点と剥片 1 点が上層で出土している。**658** は先端部の欠損した磨製石鏃片で、表裏面ともに研磨により調整加工しており、基部に抉りを有する。残存長 2.0cm、幅 2.4cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.8g、凝灰質頁岩。**659** は石材・形状等から磨製石鏃へ調整加工する際に先端部を破損した未成品と思われる。残存長 1.4cm、幅 2.3cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.7g、凝灰質頁岩。

（文責：寺師雄二）

## 6. 包含層出土の弥生時代～古墳時代初頭の土器

### （1）弥生時代前期の土器（図 106）

**660** は壷の頸～胴部である。胴部は大きく膨らむものと考えられる。頸部に 3 本の沈線がめぐり、それよりも下位に貝殻復縁による重弧文が背文される。器面調整は外面に横位ミガキが施される。**661 ～ 669** は甕である。**661** は口縁部で口唇に刻目突帯が付される。器面調整は内・外面ともにミガキである。**662** は胴部で 1 条の刻目突帯が巡る。内・外面ともに横位ミガキである。**661、662** ともに同一の原体により刻目が付けられており、同一個体と考えられる。

**663・664** は甕の口縁部で口唇部に刻目突帯が巡る。いずれもヘラ状工具によって刻みが付けられる。**665** は甕の口縁～胴部である。外面にはススの付着が著しい。口唇には刻目突帯が付けられ、その下には「C」字形の突帯が付される。それよりも下には突帯が巡る。器面調整は内・外面ともに横位ミガキである。胎土中にはカクセン石が含まれる。**666** も口唇に刻目突帯が付されるが、棒状工具による刺突によって付される。**668** は胴部に逆「C」字形の突帯がつく。

（文責：加覧淳一）

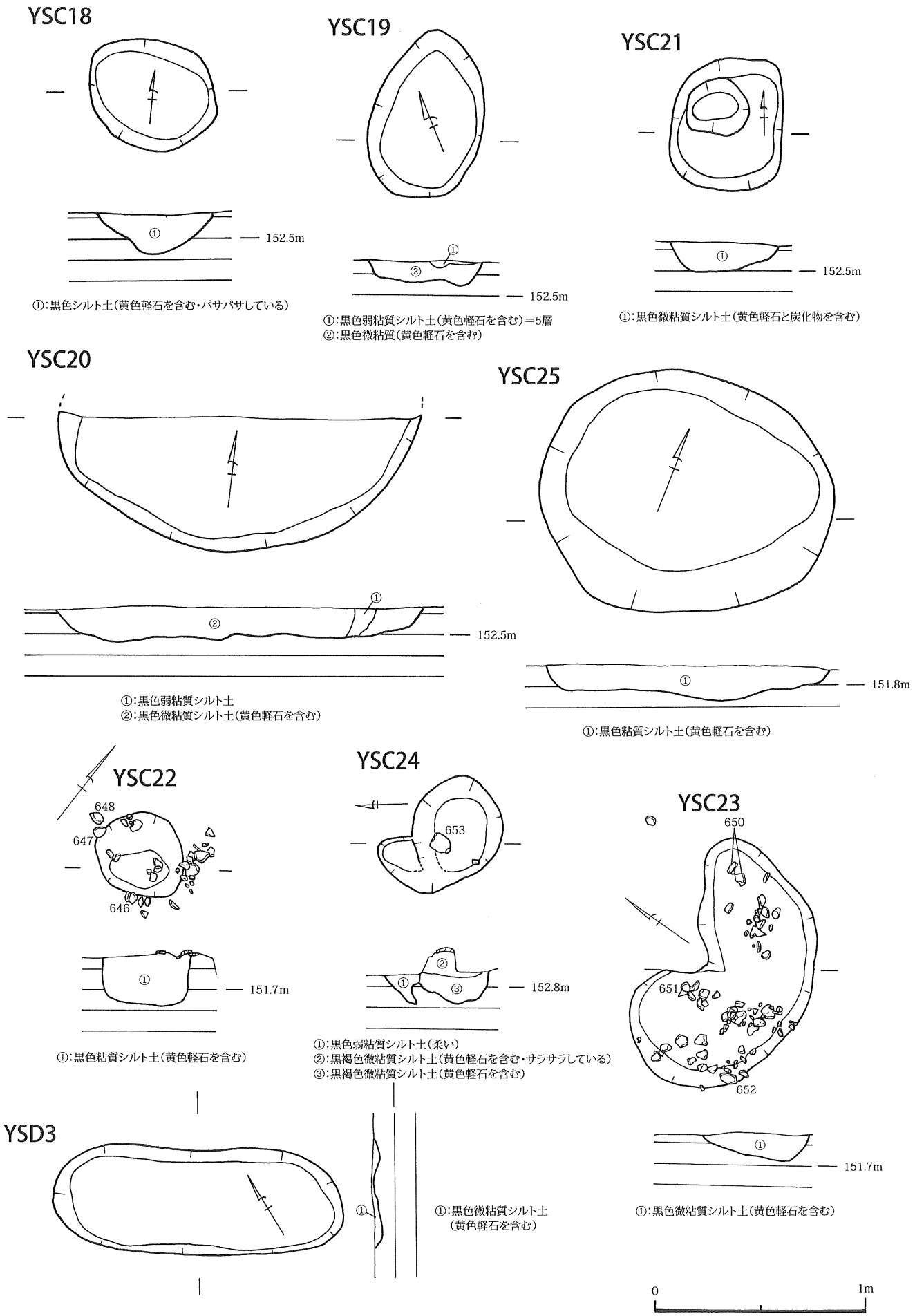



図103　土坑 YSC18・19・20・21・22・23・24・25　溝状遺構 YSD3 実測図

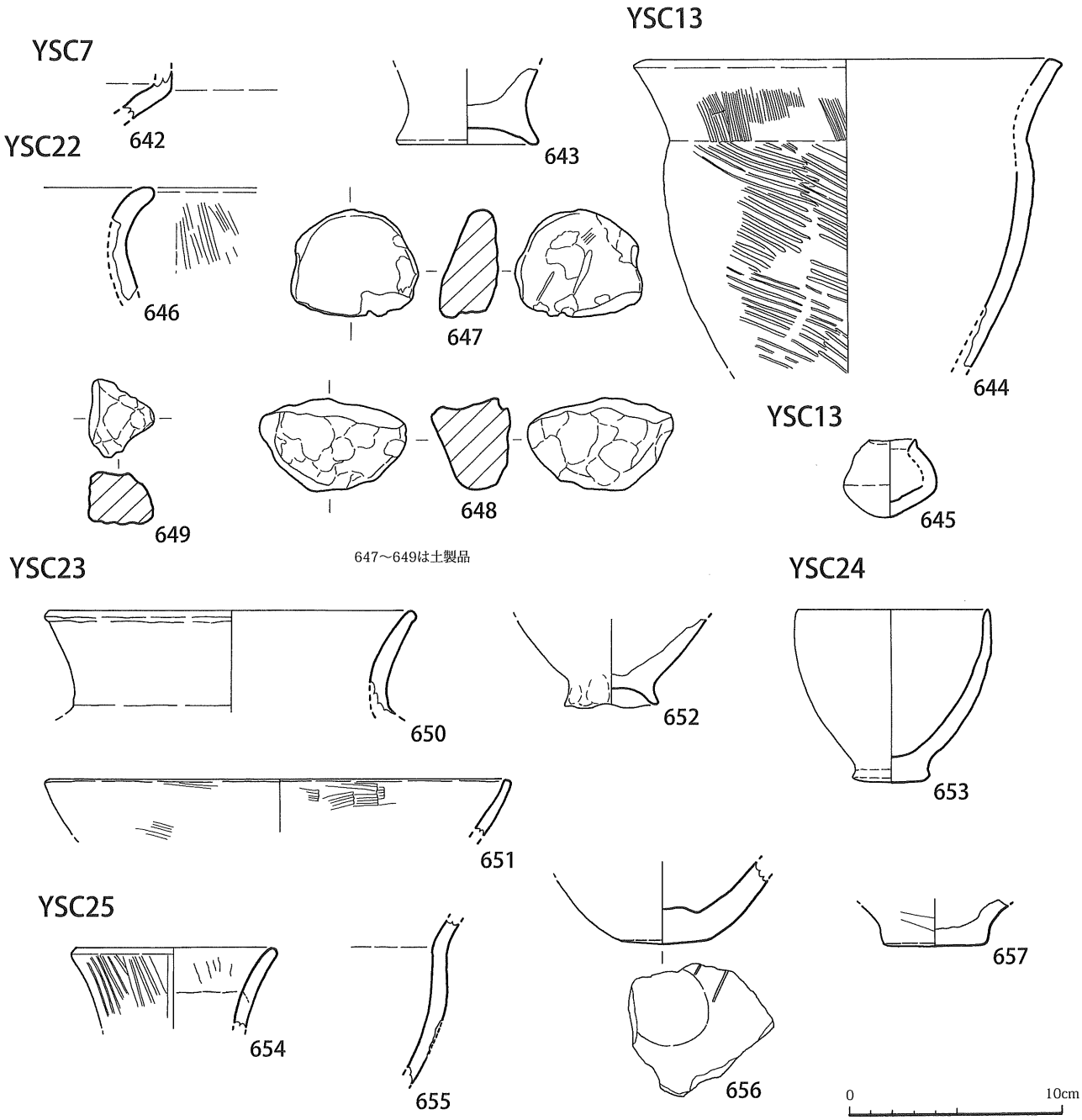



図104　土坑出土土器・土製品

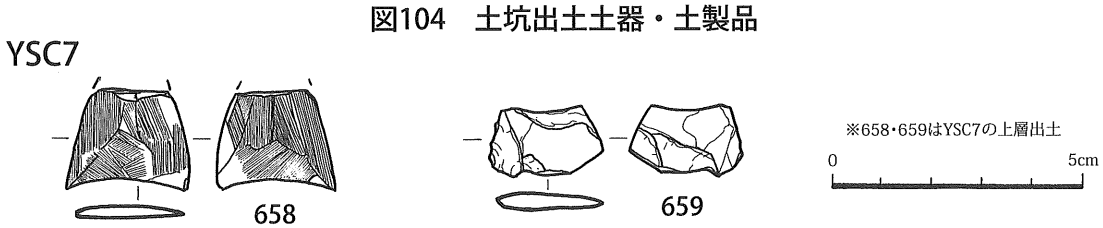



図105　土坑出土石器

## （2）弥生時代中期の土器（図 107 ～ 110）

**670～679** は壷である。**670** は壷の口縁～胴部である。口縁部は単純に開く。復元口径は約22cmである。口唇はヨコナデによりわずかにくぼませている。器面は荒れており、細かい調整は不明である。**671** は口縁部の内面が張り出し、稜を作る。復元口径は約 16cm であり、小型のものと考えられる。**672** の口縁部は貼付で下垂する。**673** は口縁の直下にタガ状の突帯が貼付される。頸部は伸びるものと思われる。**674** は **673** と同じく口縁下にタガ状の突帯が貼付され、下垂している。いわゆる「二叉状口縁」の壷である。

**675・676** は広口壷である。口縁部はラッパ状に大きく開く。**676** は復元口径が約 30cm を測る。丹塗で外面は放射状にミガキが施され、暗文状となる。**677** は胴部で 3 条の突帯が付される。外面

## 表23　土坑・溝状遺構出土土器・土製品観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 642 | YSC7・上層 | 壷 | にぶい橙 | 黒 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 643 | YSC7・上層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 644 | YSC13 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | タタキ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 645 | YSC13 | ミニチュア | にぶい褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 646 | YSC22・上層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 647 | YSC22 | 土製品 | 橙色 | 橙色 | ユビオサエ | ユビオサエ | 砂粒目立たない | |
| 648 | YSC22 | 土製品 | 橙色 | 橙色 | ユビオサエ | ユビオサエ | 砂粒目立たない | |
| 649 | YSC22 | 土製品 | 橙色 | 橙色 | ユビオサエ | ユビオサエ | 砂粒目立たない | |
| 650 | YSC23 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 651 | YSC23・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ハケ | 灰色・赤褐色 | |
| 652 | YSC23・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ・オサエ | — | 灰色・赤褐色 | |
| 653 | YSC24・上層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・灰色・赤褐色 | |
| 654 | YSC25 | 壷 | 橙 | 橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 655 | YSC25 | 甕 | 橙（スス付着） | 明黄褐 | ハケ→ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 656 | YSC25 | 壷 | 橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | 線刻 |
| 657 | YSC25 | 鉢？ | にぶい黄橙 | — | 工具ナデ | — | 灰色・赤褐色 | |

全体に横～斜位の細かいミガキが施される。**678** は底部で小型のものと考えられる。**679** は口縁部で断面形が鋤先状を呈すものである。口縁上面には５本単位の細沈線が「Ｖ」字状に施文される。

**680** は高坏の脚部である。坏部、脚部ともに欠失している。外面には１条のタガ状突帯が巡らされている。**681** は瀬戸内系のいわゆる「矢羽根透かし高坏」の脚部である。透かしは２ヶ所確認でき、鋭利な工具によって付けられている。透かし孔の下には浅めの凹線文が施されており、３本確認できる。脚底面もわずかであるが凹線状にくぼませている。内面はケズリで、接地面付近では稜を形成する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には白色の粒が混入する。瀬戸内地方のⅣ様式に位置づけられる資料である。

**682** 以降は甕である。**683 ～ 708** は口縁部を貼付するものである。**682** は口縁～胴部で復元口径は約 24cm を測る。口縁部は逆「Ｌ」字状に貼付され、口唇はヨコナデによりくぼませる。胴部外面には櫛描波状文が施文される。**684、686、688、690** はいずれも口縁部を逆「Ｌ」字状に貼付し、胴部には１条（＋α）の突帯が付される。**685** は復元口径が約 27cm を測る。外面にはススが付着する。**687** は口縁部を逆「Ｌ」字状に貼付し、口唇は丸く仕上げている。口縁内面がやや張り出す。復元口径は約 30cm。外面にはススが付着する。**689** も口縁部を逆「Ｌ」字状に貼付する。復元口径は約 33cm ある。器面調整は内・外面ともにハケである。**690** は口縁部を逆「Ｌ」字状に貼付し、胴部には１条（＋α）の突帯が巡る。

**691** は口縁部を貼付し、斜めに外反させる。口縁端は先細りとなる。胴部外面にはススの付着が著しい。**692** は外面にハケメが明瞭に残る。**693** は口縁部を貼付し、斜めに外反させる。口唇部はヨコナデにより平坦に仕上げられる。復元口径は約 27cm を測る。胴部には３条の突帯を巡らす。器面調整は胴部外面がハケ後ナデ、内面がハケである。胴部外面にはススの付着が認められる。胎土中にはキンウンモの混入が顕著である。**695** は口縁部を逆「Ｌ」字状に貼付するものであるが、口縁上面および頸部内面に指頭オサエの痕が顕著に残っている。**697、699** は貼付された口縁が斜めに立ち上がる。**698** は胴部に３条の突帯が貼付される。

**700 ～ 706** は甕の口縁～胴部である。貼付された口縁は先細りしながら斜めに立ち上がる。**702、703、705、706** は胎土中にキンウンモを含む。**707** は甕の口縁部で逆「Ｌ」字状に貼付された口縁

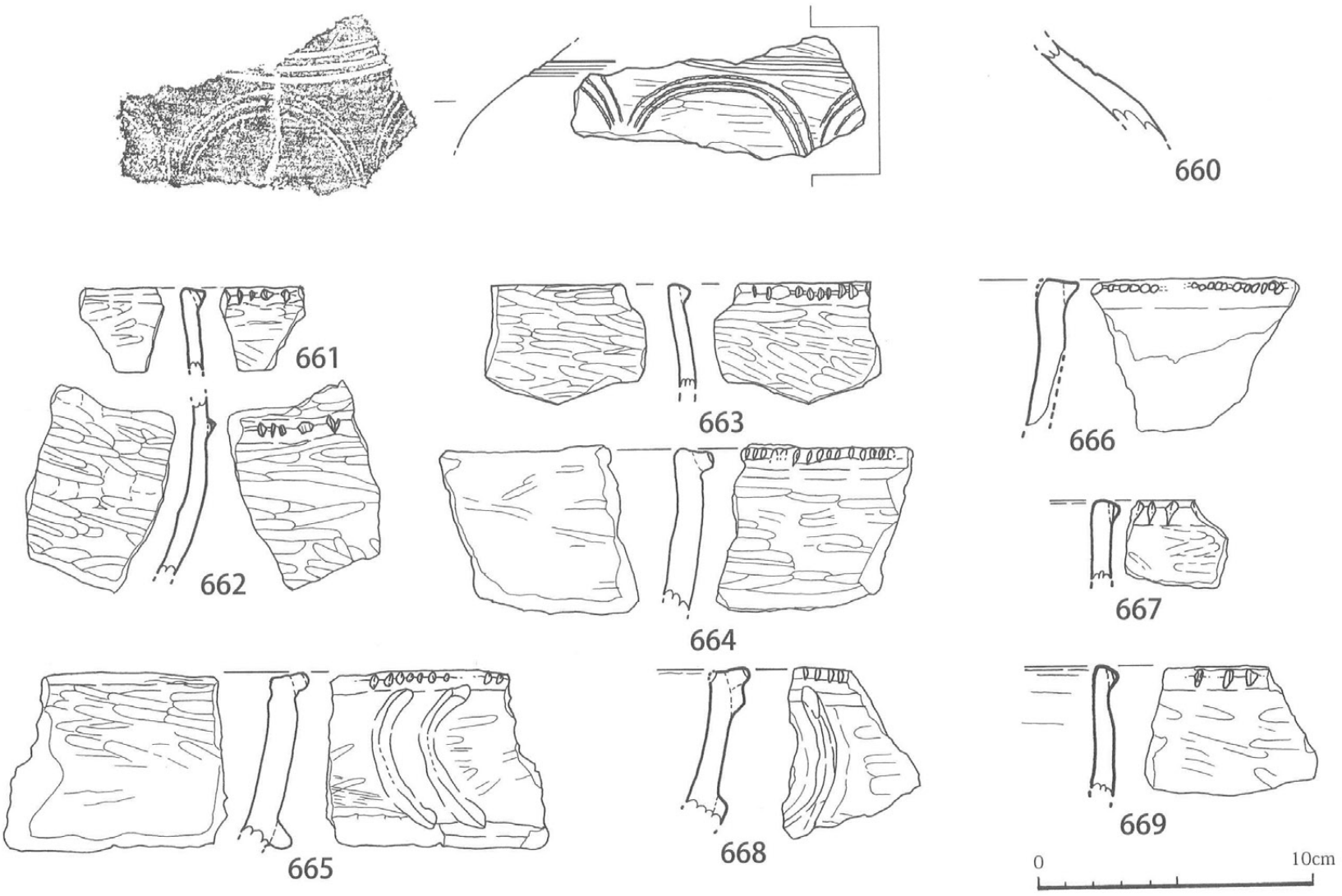



**図106　弥生時代前期の土器**

の直下には突帯が巡らされている。色調は橙色系に明るく発色し、焼成は軟質である。

**708、709** は小型甕の口縁～胴部である。口縁は短いものが貼付され、口縁内面には接合線が残る。胴部内外面にはハケメが残る。**710** は甕の口縁部である。外面には横位ミガキが施され、痕が顕著に残る。胎土は粗製でカクセン石が混入している。**711** は甕の口縁～胴部である。口縁部は肥厚させ、端部は丸く仕上げる。胴部には絡縄突帯（ミミズバレ状突帯）が巡り、その下に半円状の突帯が貼付される。器面が荒れており、調整は不明だが、外面には 710 同様ミガキが施されていたものと思われる。胎土中にはカクセン石が含まれる。**712** も 711 と同様、口縁部を肥厚させる。口縁上面には指爪によると思われる列点文が施される。外面には横位ミガキが施され、胎土中にはカクセン石を含む。

**713** はいわゆる「下城式」系甕である。直立した口縁の直下にやや太めの刻目突帯が貼付される。刻目はヘラ状工具によって付けられる。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色の砂粒が混入する。**714** も「下城式」系甕である。復元口径は約 22cm で小型品と考えられる。口縁下には突帯が巡らされるが、刻目はつかない。外面にはススが付着する。**715** はいわゆる「黒髪式」系甕の口縁部である。口縁部は斜めに立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。口縁内面が張り出し、稜を形成する。胎土中にはカクセン石が含まれる。**716** も「黒髪式」系の甕と思われる。復元口径は約 26cm。口縁部は斜めに外反する。口縁内面は張り出し、稜を形成する。胎土中にはカクセン石が含まれる。**717** は「須玖Ⅱ式」甕と思われる。復元口径は約 30cm を測り、胴部外面にはススが付着する。口縁部は断面形が鋤先状をなし、内面は鋭角ぎみに張り出し稜を作る。口縁下には断面「M」字状の突帯が貼付される。器面調整は内外面ともに磨耗しており、不明である。内面に微量であるが赤色顔料が付着しており、本来は全面に丹塗されていたものと思われる。胎土中には乳白色の粒が混入している。

**718 ～ 720** は甕の底部である。**718、720** は中実脚台である。**720** は外面に細かいハケメが残る。胎土中にはキンウンモが含まれる。**719** は平底で外面にはミガキが施される。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土にはカクセン石が含まれる。これらの特徴から **711** のような甕の底部と考えられる。

**721 ～ 725** は中溝式甕である。**721** は口縁～胴部で復元口径は約 27cm を測る。口縁部は外反させ、端部は平坦に仕上げた後、刻目が付けられる。胴部には 1 条の刻目突帯が巡る。刻目は棒状工具によって付けられ、刻目内には織物状の圧痕がわずかであるが観察できる。**722、723** は口縁部を短く折り

曲げる。胴部には刻目突帯をもち、刻目はいずれもヘラ状工具によって付けられる。**724** は口縁部が貼付によるものである。復元口径は約 26cm で胴部外面にはススが付着する。口縁部は斜めに立ち上がり、口唇は平坦ぎみに仕上げられる。刻目突帯の刻目は棒状工具による押圧刻みで刻目内には織物状の圧痕が観察できる。胎土中には赤褐色の砂粒が確認できる。**725** は胴部外面に細かいハケメが残る。刻目内には織物状の圧痕が残る。

**726** は口縁部が短く外反する。復元口径は約 30cm を測る。口縁直下にはタガ状の突帯が貼付され、丁寧にナデられている。胴部外面には横位ミガキが確認できる。**728** は無文甕で口縁部は外反させる。復元口径は約 28cm を測る。口唇は丸く仕上げる。器面調整は外面にハケメが残り、内面はハケ後ナデである。**732** も無文で口縁部を外反させる。口唇はヨコナデにより平坦に仕上げる。復元口径は約 27cm である。**735** は大甕の破片と考えられる。口縁部は貼付されたものが斜めに立ち上がる。胴部にはタガ状突帯が貼付される。**733** は口縁部をわずかに外反させる。口唇はヨコナデにより平坦に仕上げる。器面調整は内・外面ともにハケである。**734** は口縁部を逆「L」字状に外反させる。口唇は丸く仕上げられる。

**736** は小型甕である。復元口径は約 20cm である。口縁部は外反させ、口唇はヨコナデによりわずかにくぼませている。胴部外面にはススの付着が著しい。**737** も小型甕の口縁～胴部である。胴部外面にはススが付着する。**740 ～ 743** は無文甕の口縁～胴部である。**740** は焼成が良く、堅緻である。**743** は口唇部をヨコナデによりくぼませる。

**744 ～ 748** は甕の底部である。**744** は小型で外面にはオサエの痕も残されており、鉢底部の可能性もある。**745** は底部裾がわずかに広がり、脚台状の上げ底となっている。外面には細かいハケが施され、外面と底面には白色物質が付着している。胎土中にはカクセン石が混入している。**747** はわずかに上げ底ぎみとなっている。**748** は外面にハケメが残る。（文責：加覧淳一）

### （3）弥生時代後期～古墳時代初頭の土器（図 111 ～ 116）

**749** は壷の口縁部である。口縁部は外反し、口唇は丸めに仕上げられる。復元口径は約 11cm で小型である。**750、751** は同一個体である。復元口径は約 12cm、胴径は約 27cm、底径は約 11cm である。口縁部は短く外反し、口唇はヨコナデにより平坦に仕上げられる。頸部から胴部へは緩やかに膨らみ、胴部はあまり張らない。長胴である。底部は欠失している部分もあるが、平底と考えられる。器面調整は胴部外面に縦位ミガキ、頸部付近には横位ミガキが施される。外面は橙色に発色し、明るめの色調を呈す。胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。

**752** は二重口縁壷の口縁部である。外面には櫛描波状文が施文される。**753** は長頸壷である。胴部最大径は約 17cm、底径は約 5cm である。扁球形胴部に直立した口縁部が付くが、口縁端は欠失している。口縁部外面には縦位ミガキ、胴部には横位ミガキが認められる。内面は丁寧にナデられている。色調は外面が浅黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色の砂粒が目立つ。**754** は壷の口縁部で復元口径は約 12cm である。外面には部分的に剥離しているものの丹塗が確認できる。**755** は壷の口縁部である。復元口径は約 14cm、ラッパ状に開く。外面と内面の一部に細かいハケメが残る。**756** は壷の口縁～頸部である。復元口径は約 20cm でラッパ状に開く。口唇はヨコナデにより面取りされ、平坦に仕上げられる。頸部が大きく開くことから、胴部はかなり膨らむものと考えられる。頸部には 1 条の刻目突帯が巡らされる。刻目は棒状工具による押圧刻みで刻目内には織物状の圧痕が確認できる。

**757 ～ 758** は壷の底部である。**757** は全体的に器面が荒れており、調整等は不明である。**758** は外面に 2 本の線刻が認められる。底面は剥落しており、形態不明である。**759** は尖底ぎみの丸底である。器面が荒れており、調整等は不明である。

**760** からは甕である。**760** は口縁部を外反させるもので、口唇はヨコナデにより平坦に仕上げられる。復元口径は約 24cm である。**761** は口縁～胴部である。口縁部は外反させ、口唇部はヨコナデにより平坦に仕上げられる。頸部外面にはハケメが明瞭に残る。**762** は口縁部を外反させ、胴部は緩やかに膨らむ。復元口径は約 18cm である。調整は内・外面ともにナデられているが、頸部内面にはヘラ状工具によるものと思われる工具痕が残されている。

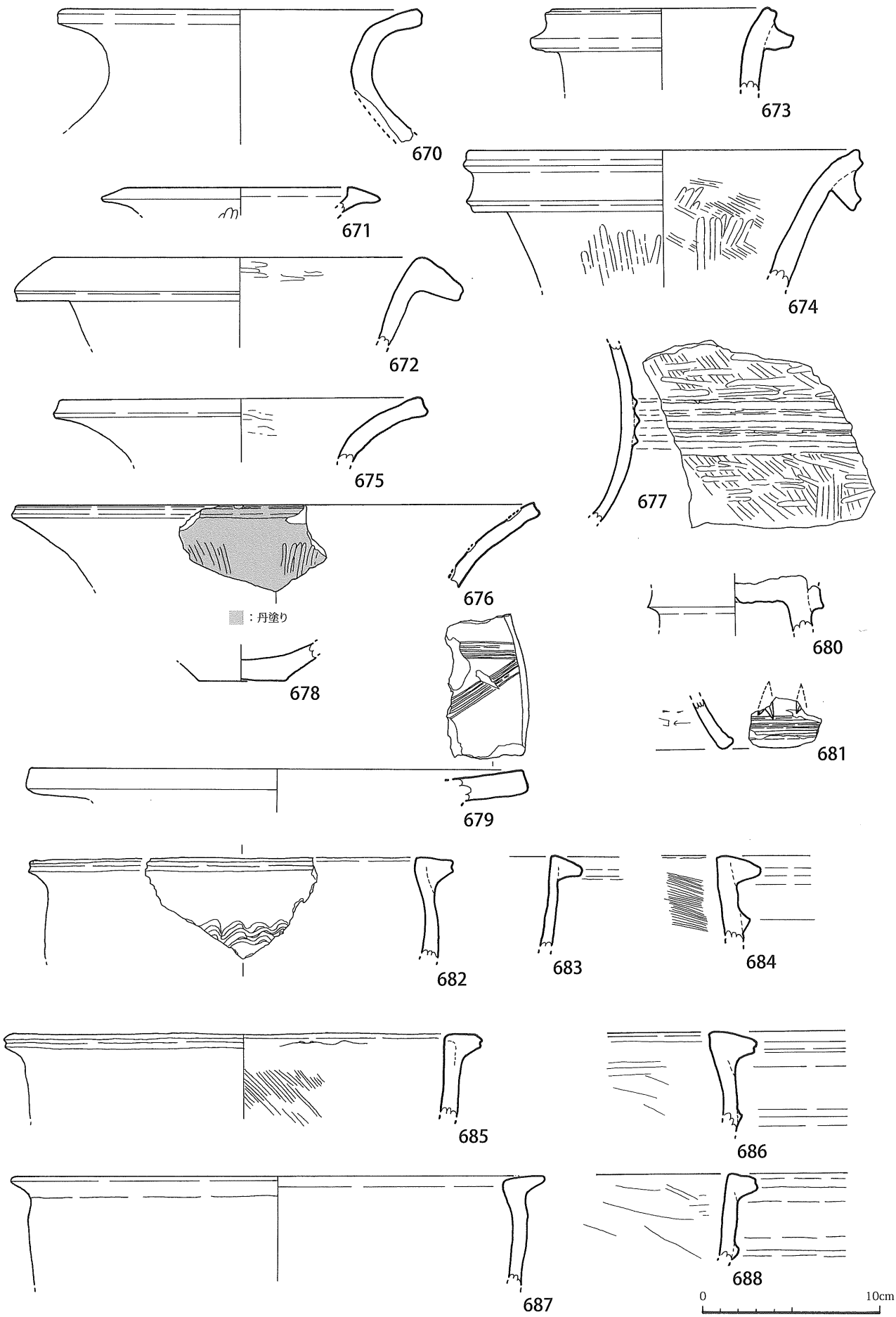



図107　弥生時代中期の土器

**763** は口縁部が「く」の字に外反し、胴部は大きく膨らむ。復元口径は約 18cm である。色調は橙色を呈し、胎土中には赤褐色・灰色の砂粒が多量に含まれる。**764** は口縁部を「く」の字に外反させる。口唇部は平坦に仕上げられる。復元口径は約 24cm である。胴部外面には部分的であるが横位ミガキが残る。胎土中には灰色の砂粒が目立つ。**765** は小型甕と思われる。口縁部は外反させ、胴部はあまり張らない。

**766** は口縁部～底部まで揃う。復元口径は約 25cm、底径は約 8cm、器高は約 28cm である。口縁部は外反させ、口唇にかけやや肥厚ぎみとなる。口唇は平坦に仕上げられる。胴部はあまり張らず、緩やかに屈曲する。底部は脚台状となり、底面はわずかに上げ底である。色調は橙色を呈し、胎土中には赤褐色・灰色の砂粒が目立つ。**767** は小型甕の口縁部で復元口径は約 19cm である。胎土中には赤褐色・灰色の砂粒が多く含まれる。**768** は小型甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 17cm、底径は 4cm、器高は 17cm を測る。口縁部は「く」の字に外反させ、口唇は丸く仕上げている。胴部は張らずにゆるやかに屈曲する。底部は指頭により整形され、いびつな脚台状となっている。器面は外面全体がナデで仕上げている。

**769** は口縁～胴部である。口縁部は短く外反させる。**770** は小型甕の口縁～胴部と思われる。復元口径は約 17cm である。口縁は「く」の字に外反し、口唇は丸く仕上げられている。口縁内・外面にはハケメが残る。胴部外面にはススの付着が著しい。**771** は口縁部で復元口径は約 26cm である。口縁外面には強いハケが施されている

**773** は口縁～胴部である。復元口径は約 20cm を測る。口縁部は外反し、胴部は膨らむため、断面形はゆるい「S」字状を呈す。胴部外面にはススの付着が認められる。**774** は 773 と同様の器形を呈す。全体的に摩滅している。**775** は小型甕で口縁～底部まで揃う。復元口径は約 24cm、底径は 6cm、器高は約 21cm を測る。口縁部は外反し、やや長めに伸びる。口唇は面取りされ、平坦に仕上げられる。胴部はあまり張りを持たない。底部は平底である。器面調整は胴部外面にタタキが施された後、ナデてタタキ目を消している。内面にはハケメが残る。

**776** は口縁～胴部である。復元口径は約 22cm を測る。外面にはタタキが口縁部まで施されている。**777** は口縁～胴部で復元口径は約 23cm を測る。口縁部は短くわずかに外反させる。外面には横～斜位のタタキ（左上がり）が施される。タタキの単位は不明であるが、溝幅が 1mm 程度で狭い。内面にはハケメが残る。**778** も外面にタタキ（左上がり）を施しており、口縁部まで及んでいる。復元口径は約 17cm であり、小型である。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色、灰色砂粒の混入が目立つ。**779** は復元口径が約 19cm である。胴部外面には右上がりのタタキが施され、口縁部はヨコナデにより仕上げられる。タタキの溝幅は 1 mm程度である。**780** は小型甕と考えられるもので口縁～底部まで揃う。復元口径は約 11cm、底径が 6cm、器高は 13cm を測る。口縁部は頸部でくびれた後真っ直ぐに立ち上がる。口唇は丸めに仕上げられる。底部は脚台が付いており、底面はわずかに上げ底となっている。器面は内外面ともにナデられている。

**781** は口縁～胴部で復元口径は約 30cm である。口縁部は外反し、口唇は丸く仕上げられる。頸部には 1 条の刻目突帯が巡っており、刻目は棒状工具の押圧刻みによって付けられる。刻目内には織物状の圧痕が確認できる。器面には内外ともに細かいハケメが残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土中には赤褐色、灰色砂の混入が目立つ。**782** は口縁～胴部で復元口径は約 35cm を測る。口縁部は湾曲しながら外反する。口唇は平坦に仕上げられる。胴部外面にはススの付着が著しい。**783・784** は底部でいずれも脚台状をなす。

**785** は口縁部で復元口径は約 34cm を測る。口唇部は丸くおさめられている。**786** は小型甕と考えられる個体である。鉢としても分類可能であろうが甕に含めている。口唇が欠失しているが、口縁部は上方へ立ち上がる。頸部付近には段がつけられ、稜が形成される。口縁部外面には櫛描波状文が施文される。底部には脚台が付く。内面には細かいハケメが残り、工具痕も残されている。**787** は胴部である。頸部には刻目突帯が付されている。刻目は棒状工具による押圧刻みで、刻目内には織物状の圧痕が残されている。外面には「タタキ」風の調整がなされる。よく観察すると、タタキと断定するには溝幅が極端に狭く、砂粒も右上がりに移動している。このことから、ハケ工具とは別の原体で掻きなでるようにして整形されたものと推察できる。内面にはハケメが残る。胴部外面にはススの付着が著しい。

**788 ～ 795** は底部である。**788、789、790** は脚台状をなす。**790** は底面がわずかにくぼんでいる。

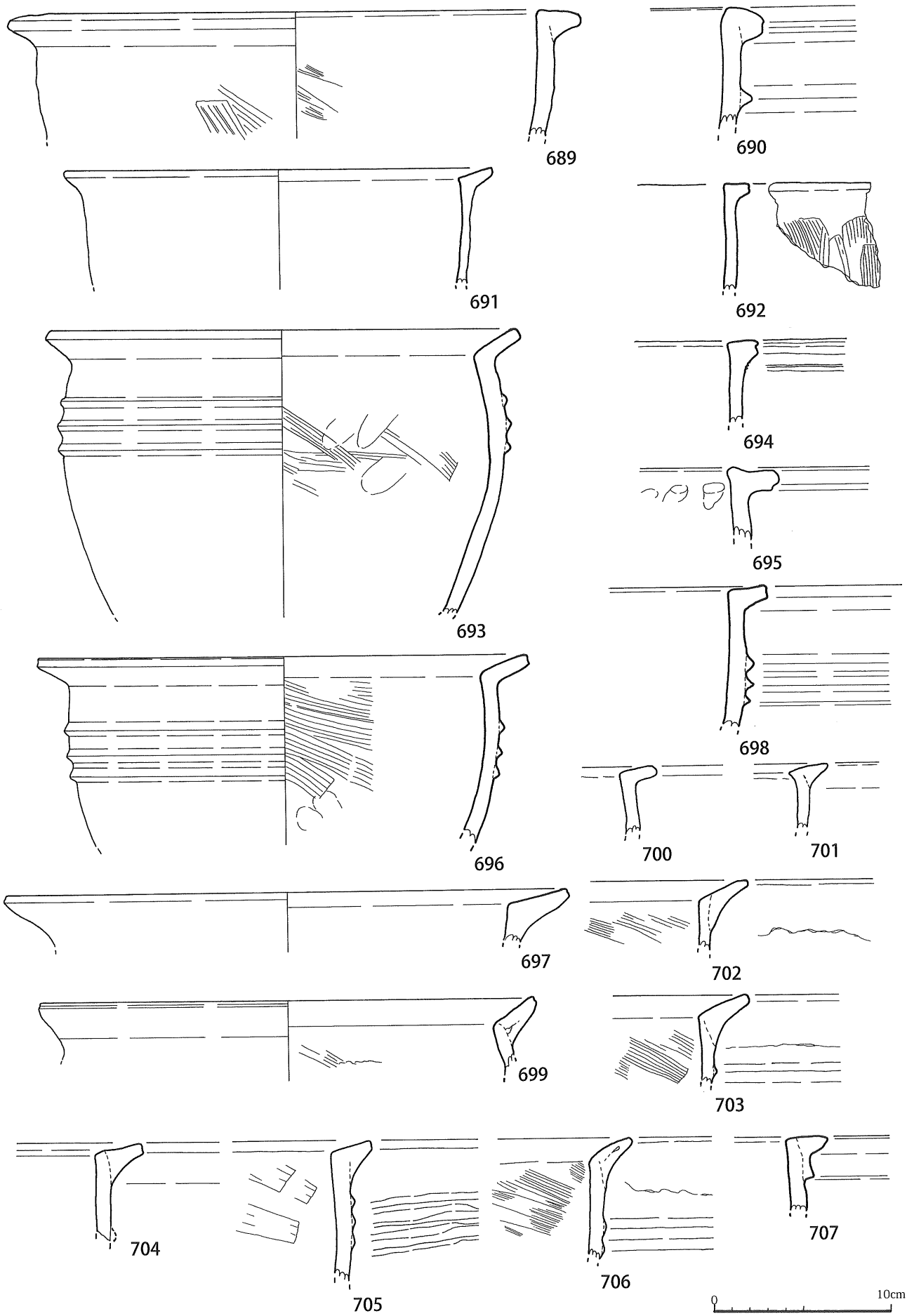



図108　弥生時代中期の土器

外面には **787** と同じ「タタキ」風の調整が施される。**792** は脚台をもち、胴部外面にはタタキが施されているが、その後ナデられており、タタキ目は部分的に残る。**793 ～ 795** は平底である。

**796 ～ 803** は高坏である。**796** は坏部で復元口径は約 35cm である。口縁は「く」の字に開き、内面で稜をつくる。摩滅しているものの、内・外面ともに縦位ミガキが残る。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は混入物も少なく精良である。**797** は坏部で、復元口径は約 11cm と小型である。口縁は単純に開く。内面は工具によりナデられている。**798** は脚部で脚裾付近は欠失している。外面には細かいミガキが観察でき、円形透かしが施されている。**799** も脚部である。脚裾付近が欠失しているが、裾は大きく開くものと考えられる。外面には細かいミガキが施される。胎土は精良なものが用いられている。**800** は脚部で外方へ大きく開く。外面には細かいハケメが残る。**801** も脚部である。脚裾は欠失しているが、外方へ大きく開くものがつくものと思われる。全体的に摩滅しており、調整等は不明である。**802** は脚部で小型のものと考えられる。外面にはミガキが施され、円形の透かし孔が確認できる。胎土は精良である。**803** は脚裾で径は約 23cm である。端部は面取りされ、平坦に仕上げられる。外面には縦位ミガキが確認できる。

**804 ～ 822** は鉢と考えられる土器である。**804** は口縁部が付き、外反する。**805** は碗形の形状を呈す。**807** は口縁部がいわゆる「カキアゲ」状に仕上げられており、頸部で段を作っている。**809** は口縁端に竹管文がスタンプされる。スタンプの径は 2mm 程である。**810** は口縁部が外方へと開く。**813** は底面が剥離している。**815** は底部が平底をなし、そこから大きく外へ開くものと思われる。外面にはハケが認められ、底部付近にはオサエに近い指頭ナデが加えられる。**816** は鉢の胴部である。**819** は底部で外面には細かいハケメが残る。

**823 ～ 854** は手づくね土器である。サイズ、形態ともヴァリエーションに富むがいずれもオサエによって整形される。**823** はこれらの一群の中ではサイズが一番大きい。**824**、**825** は口縁端を短く内側へと曲げている。**828** は皿状の形態である。**840** は底部が尖底ぎみとなっている。**846** は外面にわずかにハケが残る。

**850** は外面が棒状工具のようなものでオサエられている。　（文責：加覧淳一）

## 7. 包含層出土の縄文時代～古墳時代初頭の石器

ここでは、包含層出土の石器の中で、縄文時代から弥生時代と思われるものをとりあげて解説する。7 a 層から出土したものは、同層から出土した縄文時代後期～晩期の土器に共伴する可能性があるため、地区・土層を明記した。また、同様に 6 層から出土したものは弥生時代の石器と認定できる可能性がある。しかしながら、縄文時代と弥生時代の石器の峻別が困難であったことと、本来、縄文時代や弥生時代に所属すると思われる石器が上層の 5 層や 3・2 層でも見つかっており、その後の撹乱による移動が想定されるケースも少なからずあったこと、そして反対に、5 層より上層から出土した石器の中には、平安時代～中世のものでないという確証を得ることが難しいケースもあったこと（例えば、砂岩礫などを利用した砥石など、その石器だけでは時期の判定に苦慮した。）などを考慮した結果、7a 層と 6 層から出土したものを一応の基準として、より上位の層で出土したものは、それらとの照らし合わせによって判断した。以下、縄文時代～弥生時代という時期幅でとらえられるものについて器種ごとに解説する。

### （1）打製石斧（石製土掘り具）（図 117 ～ 121）

**855** は横長の剥片を利用し、縁辺全体に調整加工し整形している。刃部には刃縁と直行する擦痕が明瞭で磨耗している。長さ 17.8cm、幅 7.6cm、厚さ 1.7cm、重さ 149g、頁岩源ホルンフェルス。**856** は縦長の剥片を左右非対称のまま調整加工している。刃縁も調整加工されたままで使用痕は見られない。長さ 13.0cm、幅 11.0cm、厚さ 2.0cm、重さ 272g、両輝石安山岩 a。**857** は両側の抉りの部分が表裏面から調整加工されている。刃縁部には使用痕と思われる線状痕が確認され、かなり磨耗している。長さ 16.4cm、幅 9.3cm、厚さ 1.7cm、重さ 238g、両輝石安山岩 a。**858** は縦長剥片を利用した石斧で、ほぼ全体の縁辺部に調整加工している。また、調整を加えていない部分は平滑で研磨されており、剥離前の研磨と研磨後の剥離とが観察される。長さ 14.8cm、幅 5.8cm、厚さ 1.0cm、重さ 157g、両輝石安山岩 a。

**859 ～ 868** は打製石斧の刃部片と思われる石器である。**859** は縄文時代後期の竪穴状の土坑（JSC1）

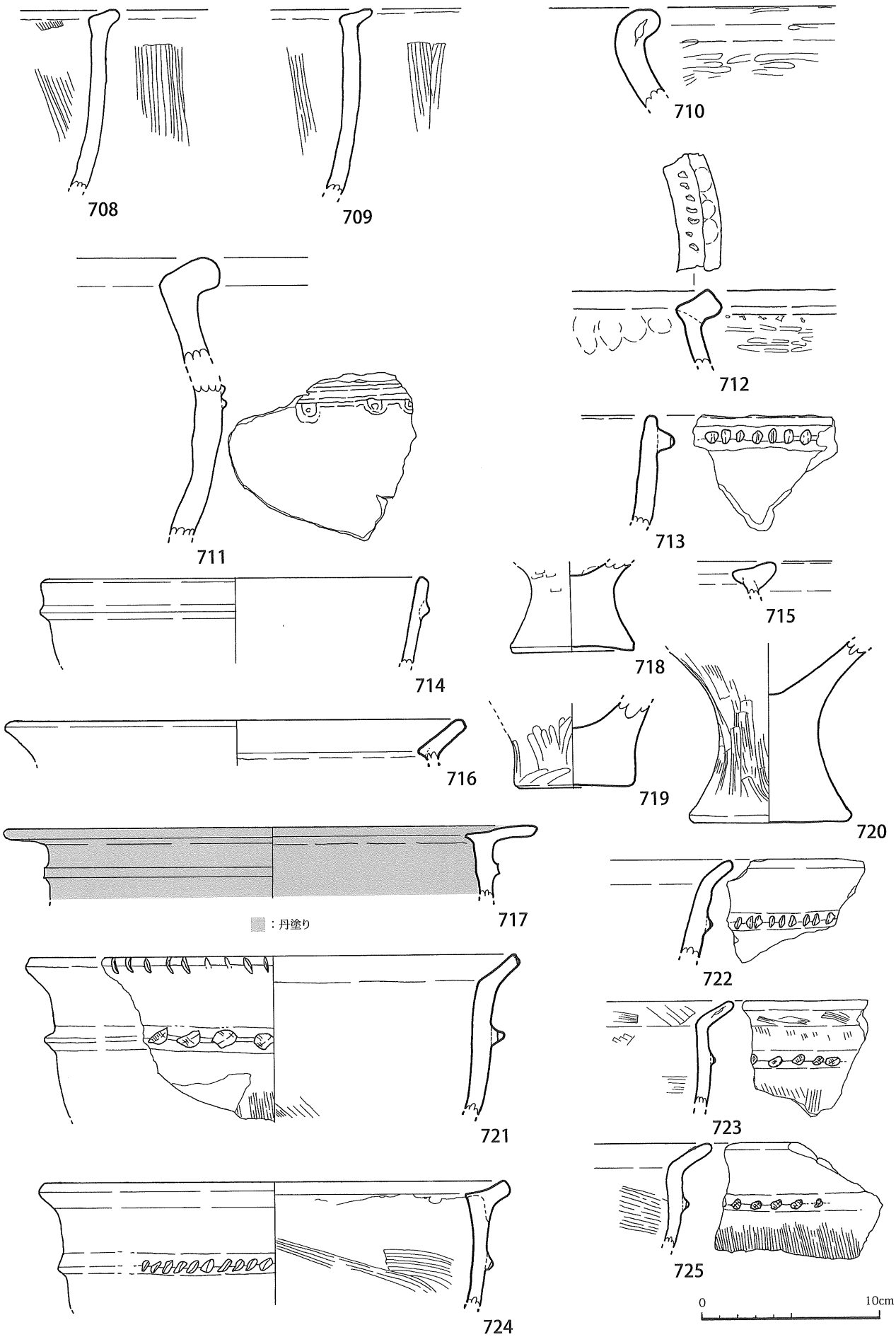



図109　弥生時代中期の土器

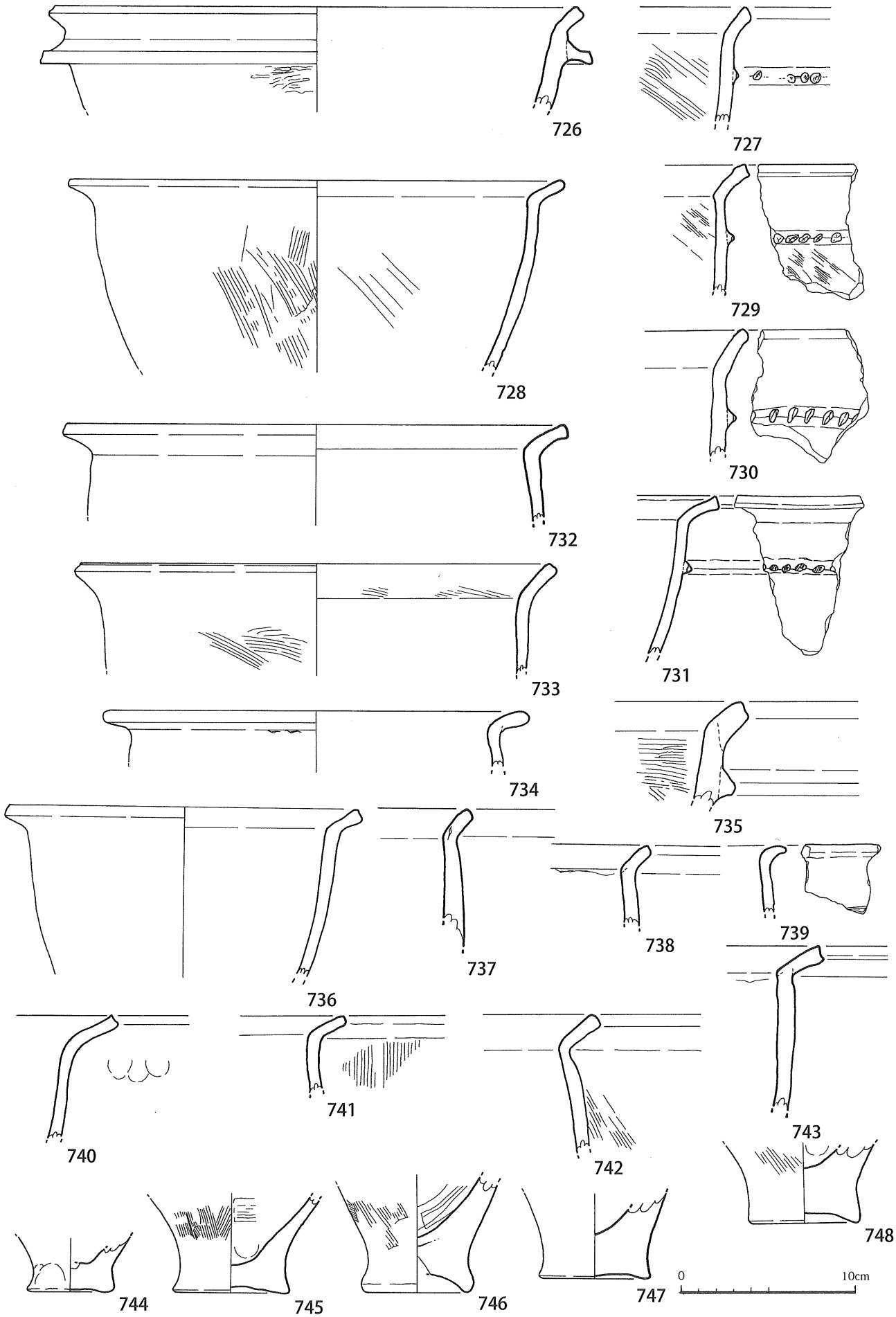



図110　弥生時代中期の土器

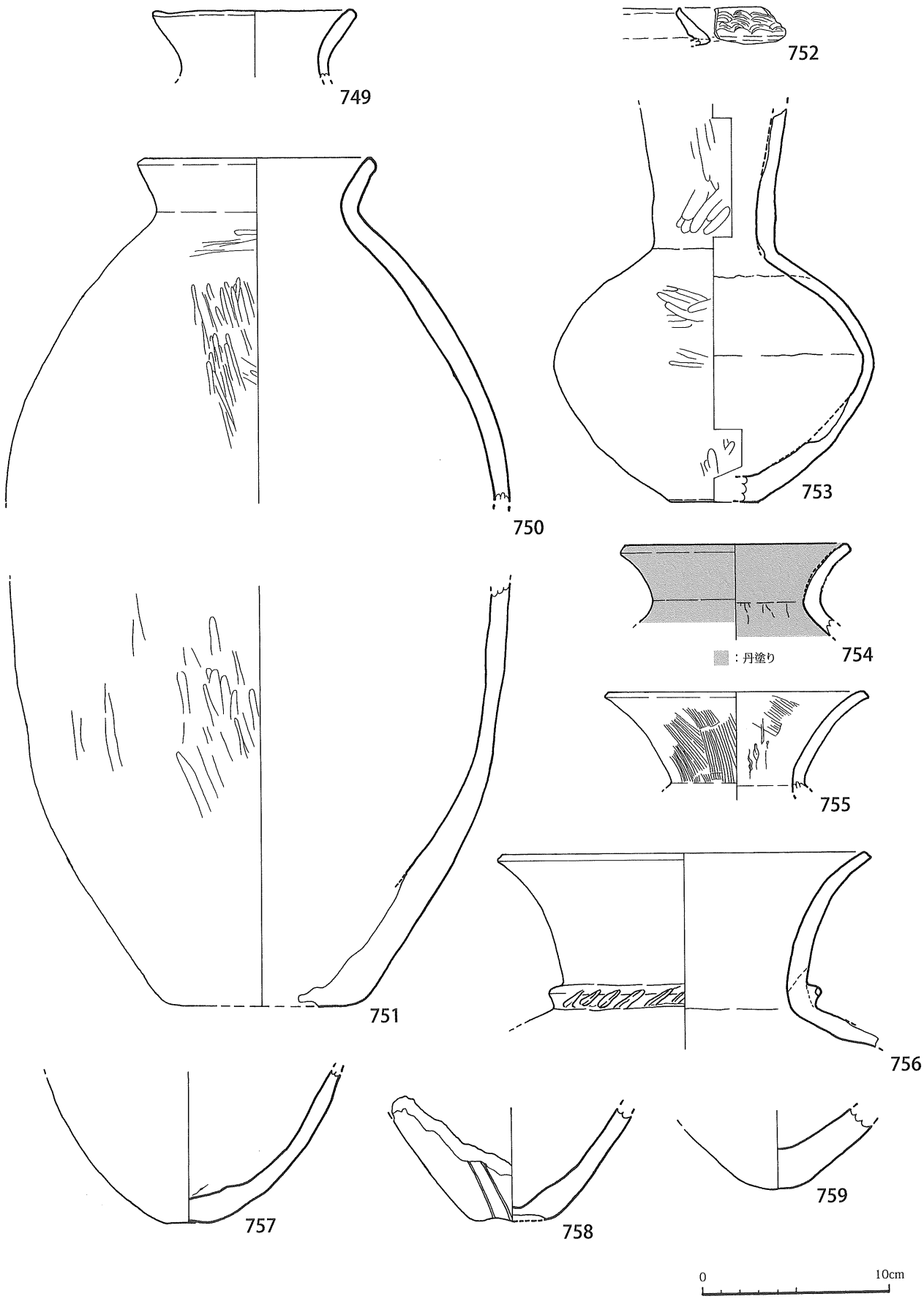



図111　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

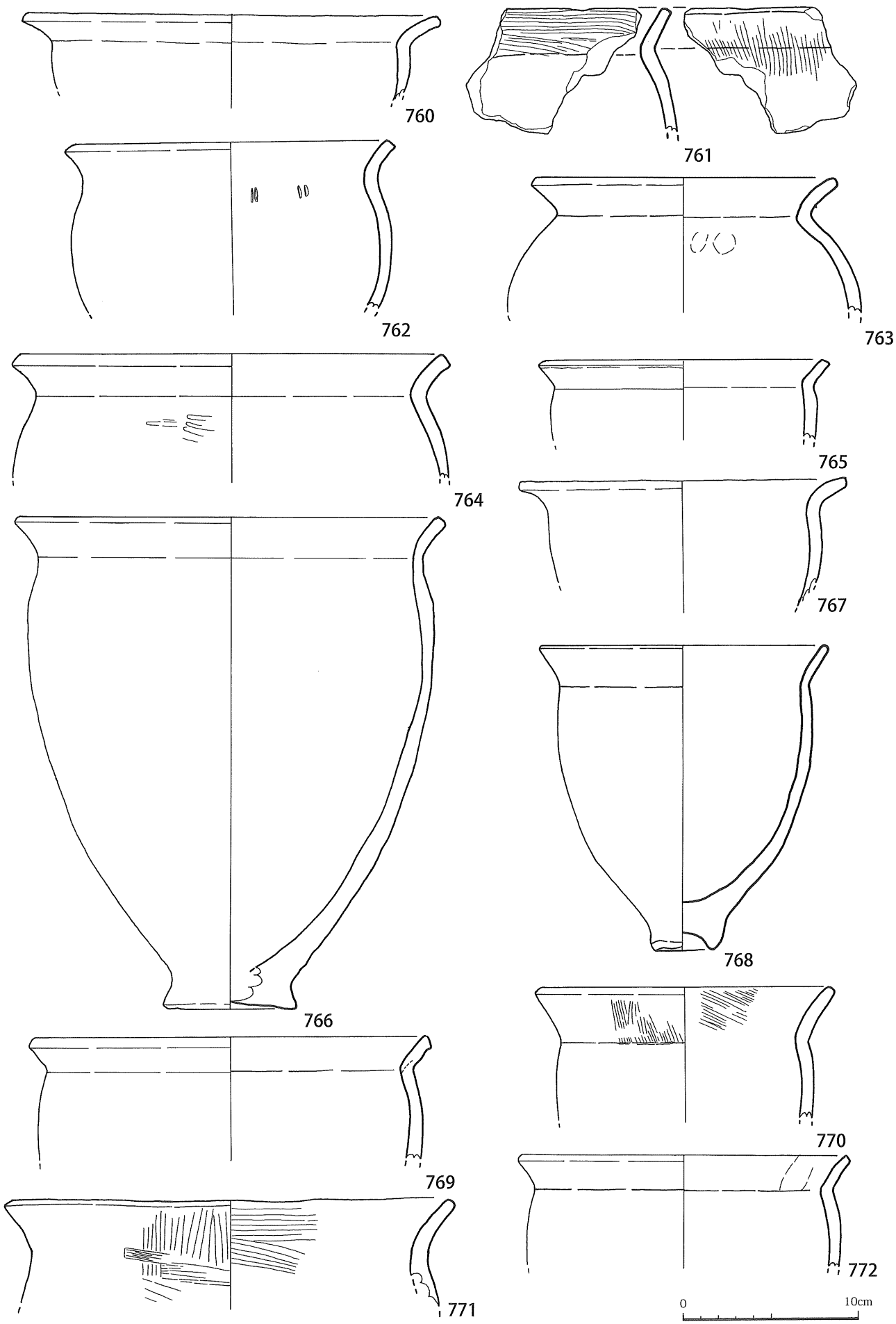



図112　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

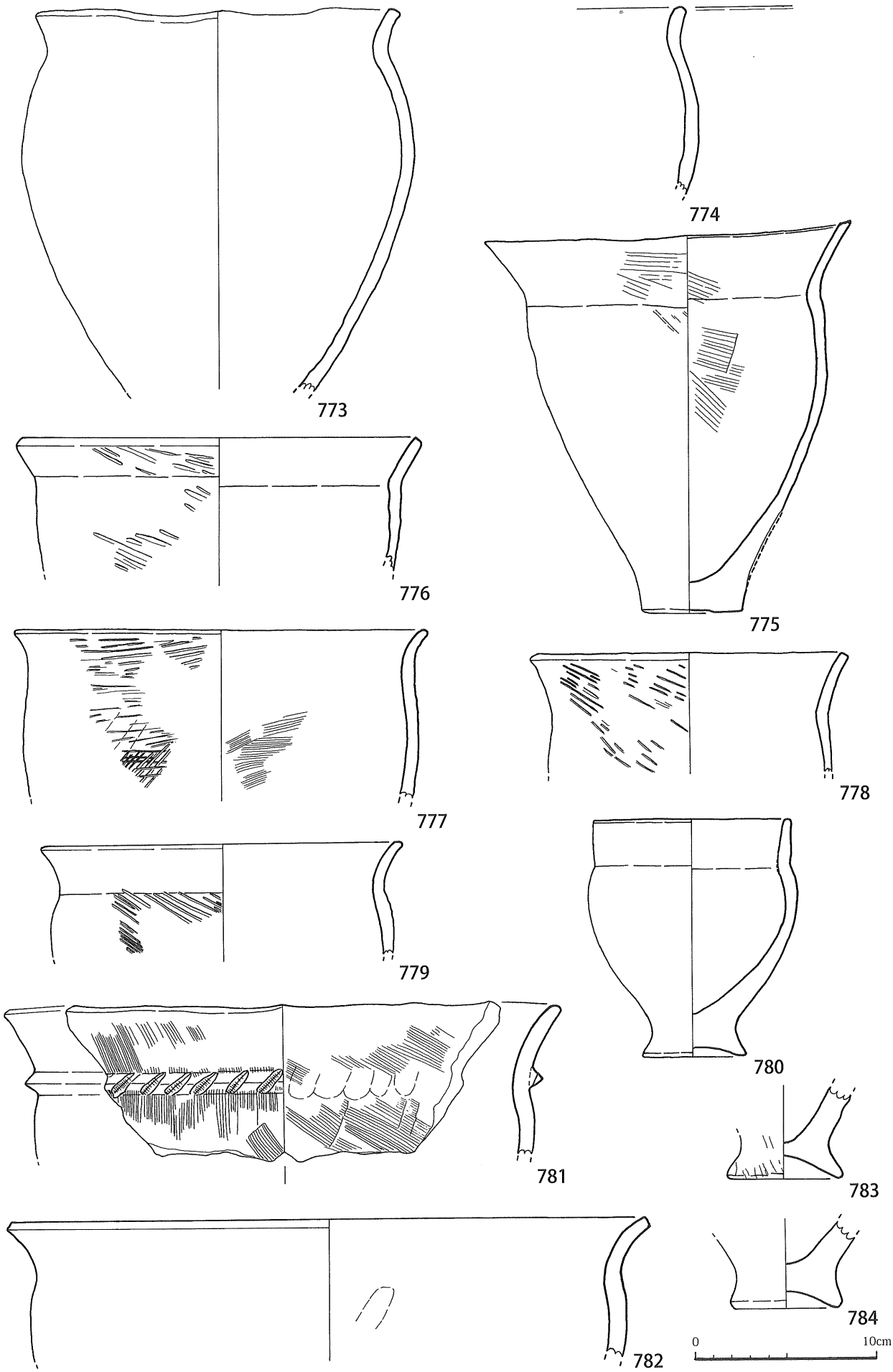



図113　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

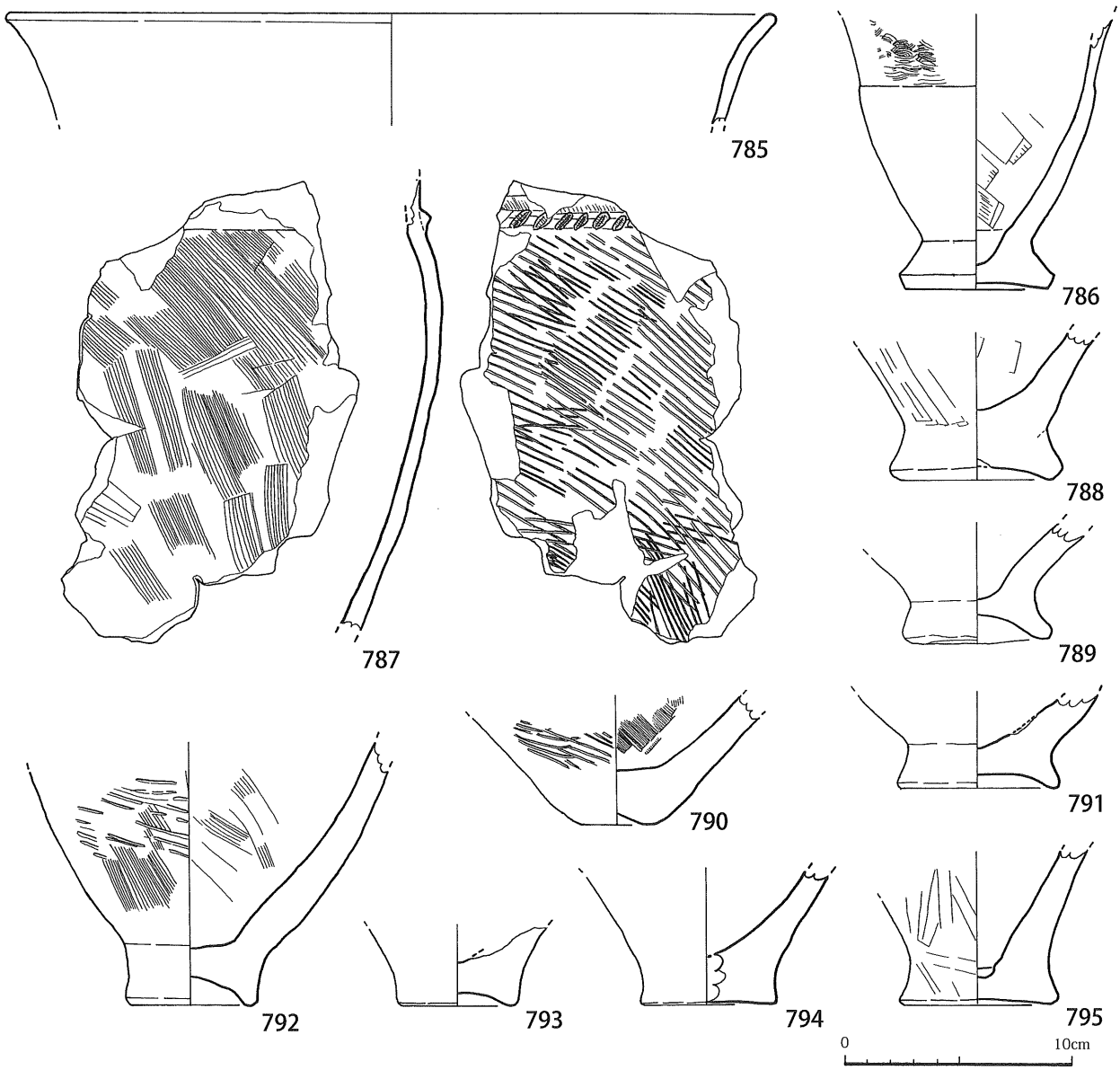



**図114　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器**

付近で出土したもので、ほぼ同じ地点で縄文時代後期の土器が出土している。縁辺部は表の面から全体的に調整加工による整形が行われ、刃縁のみ裏面からも調整加工されている。また、刃縁の一部には磨耗痕が明瞭で、土堀具として使用した痕跡が残る。残存長 9.2cm、幅 11.1cm、厚さ 1.0cm、重さ 150g、両輝石安山岩 a。**860** は刃縁が磨耗しており、刃縁に斜行する線状痕が見られる。残存長 6.9cm、幅 8.3cm、厚さ 0.8cm、重さ 59g、両輝石安山岩 a。**861** は縦長剥片を利用し、表の面の側縁部は両側とも調整加工し整形している。また、裏面の先端部には磨耗痕が顕著であり、線状痕が確認される。残存長 9.8cm、幅 8.7cm、厚さ 1.4cm、重さ 154g、両輝石安山岩 a。**862** は実測図下部に磨耗痕が顕著で線状痕も見られる。残存長 6.2cm、幅 7.8cm、厚さ 1.1cm、重さ 80g、両輝石安山岩 a。**863** は側縁の片方のみ調整加工しているもので、上下の両縁部に使用によると思われる磨耗痕が見られる。長さ 10.6cm、幅 8.1cm、厚さ 1.0cm、重さ 161g、両輝石安山岩 a。**864** も石斧片と思われる剥片であるが、使用痕等は見られない。残存長 3.5cm、幅 7.1cm、厚さ 1.1cm、重さ 30g、頁岩源ホルンフェルス。**865** は残存長 7.8cm、幅 4.5cm、厚さ 1.2cm、重さ 53g、両輝石安山岩 a。**866** は側縁の一部が潰れている。残存長 8.6cm、幅 5.6cm、厚さ 1.2cm、重さ 82g、両輝石安山岩 a。**867** は小型のもので、横長の剥片を利用している。基部は一部欠損したものか。刃部には使用による磨耗痕が見られる。長さ 7.6cm、幅 4.1cm、厚さ 1.7cm、重さ 65g、頁岩源ホルンフェルス。**868** は縦長の剥片を利用しており、風化しているが刃縁の一部には斜行

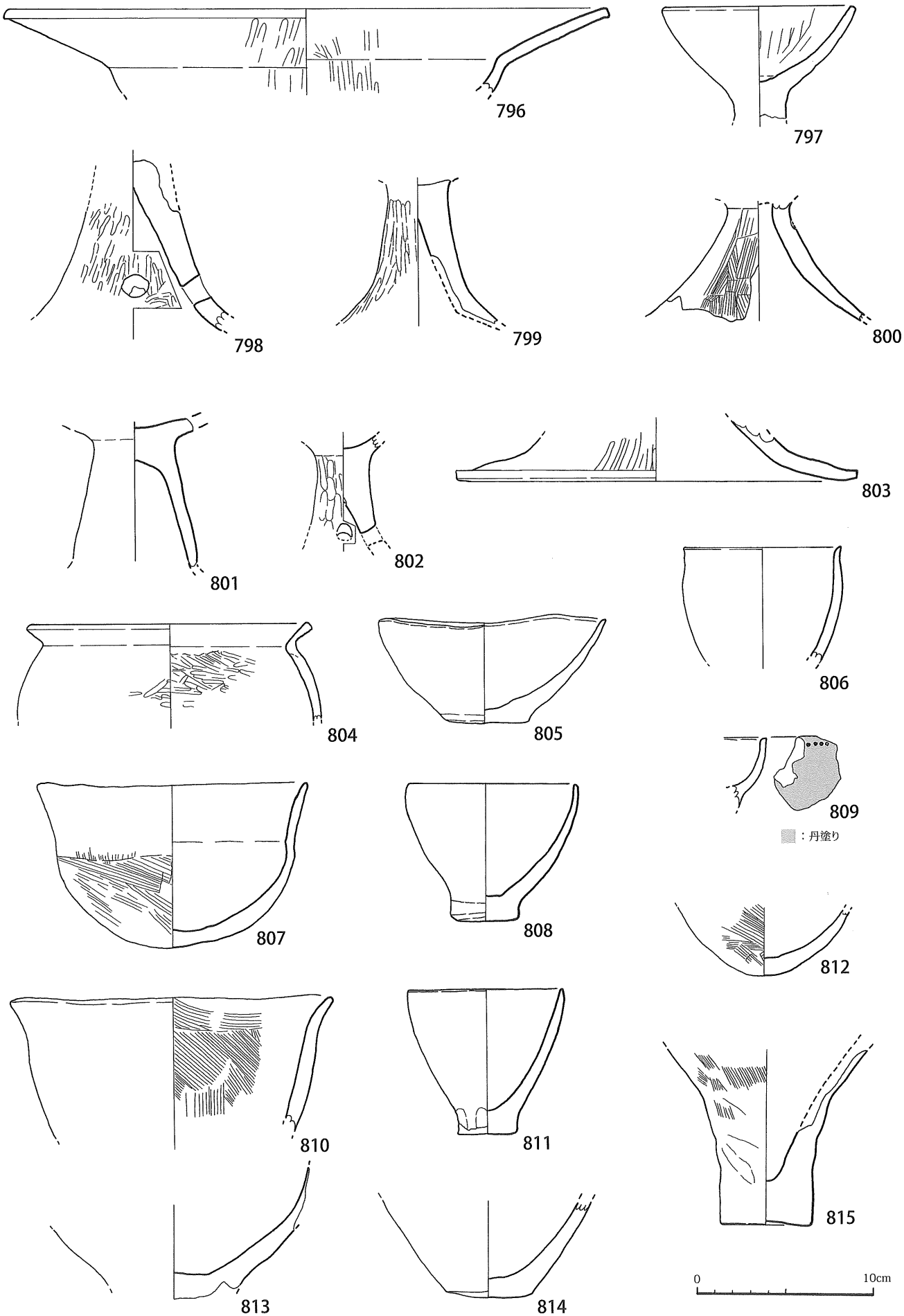



図115　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

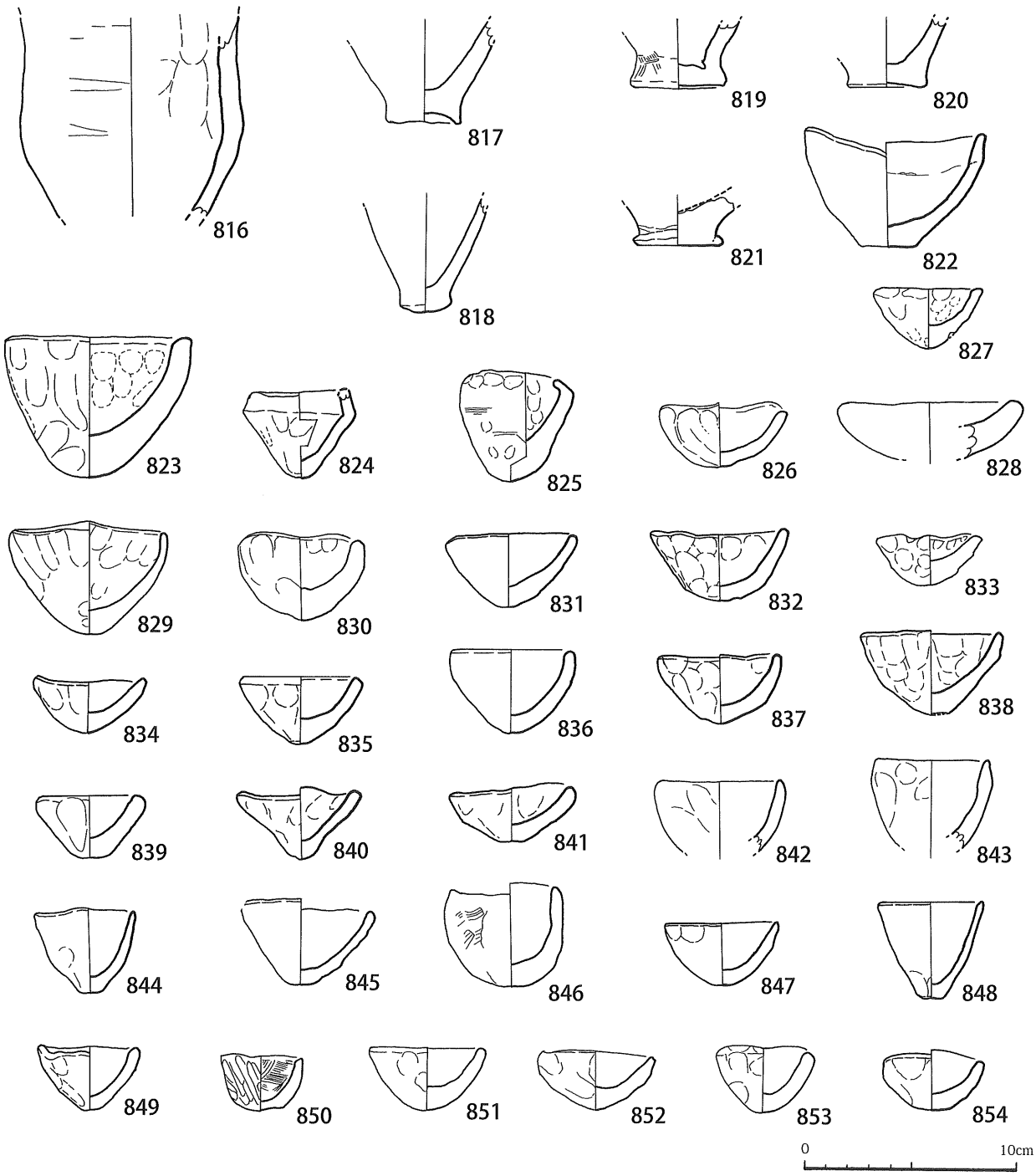



**図116　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器**

する線状痕が見られる。残存長 6.1cm、幅 5.9cm、厚さ 0.7cm、重さ 34g、頁岩源ホルンフェルス。

**869 ～ 871** は打製石斧の基部と思われる石器である。**869** は表裏面から調整加工し、方形の基部に整形している。残存長 6.3cm、幅 6.3cm、厚さ 1.1cm、重さ 71g、両輝石安山岩 a。**870** は縦長剥片を利用した打製石斧の基部と思われ、全体的に風化が進んでいる。残存長 4.8cm、幅 5.3cm、厚さ 0.9cm、重さ 38g、頁岩源ホルンフェルス。**871** は横長の剥片を利用し、先端から側縁まで細かな調整加工を加えて整形している。残存長 8.7cm、幅 8.4cm、厚さ 2.1cm、重さ 215g、両輝石安山岩 a。

### （2）打製石鏃（図 122）

**872** は 7 層で出土した打製石鏃で、表裏面ともに調整加工され上部がやや張り出し抉りを有する。縄文時代のものか。長さ 2.4cm、幅 1.2cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.6g、無斑晶安山岩。

## 表24　包含層出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 660 | M-3 区 | 壷 | 浅黄橙 | 暗灰黄 | ミガキ | ナデ | 白色・褐色 | 沈線文・重弧文 |
| 661 | M-3 区・5 層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい黄橙 | ミガキ | ミガキ | 白色 | 刻目突帯 |
| 662 | M-3 区・5 層 | 甕 | 褐 | 灰褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・褐色 | 刻目突帯 |
| 663 | YSA23・上層 | 甕 | にぶい黄褐 | 暗褐 | ミガキ | ミガキ | 白色 | 刻目突帯 |
| 664 | U-7 区・5 層 | 甕 | 褐 | 褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 665 | U-7 区・5 層 | 甕 | 黒色（スス付着） | 褐 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色・カクセン石 | 刻目突帯・突帯 |
| 666 | N-4 区・6 層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 667 | N-2 区・SC | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ナデ | 白色 | 刻目突帯 |
| 668 | U-7 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい赤褐 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯・突帯 |
| 669 | M-3 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐 | 褐 | ミガキ | ナデ | 白色 | 刻目突帯 |
| 670 | O-3 区・6 層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 671 | P-9 区・6 層 | 壷 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 黒色・赤褐色 | |
| 672 | M-6 区・5 層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ミガキ | ミガキ | 黒色 | |
| 673 | M-7 区・6 層 | 壷 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・黒色 | 突帯 |
| 674 | M-4 区・6 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ミガキ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 675 | N-2 区・6 層 | 壷 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ミガキ | 白色・赤褐色 | |
| 676 | N-6 区・5 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ（暗文） | — | 半透明・白色 | 丹塗 |
| 677 | O-6 区・5 層 | 壷 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ミガキ | 透明・褐色・黒色 | 突帯 |
| 678 | N-4 区・6 層 | 壷 | にぶい褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | |
| 679 | N-6 区・6 層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 沈線文 |
| 680 | M-6 区・5 層 | 高坏 | 浅黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 681 | K-3 区・2 層 | 高坏 | にぶい黄橙 | にぶい黄褐 | ナデ | ケズリ | 白色 | 矢羽根透かし・凹線 |
| 682 | M-4 区・6 層 | 甕 | 黄灰 | にぶい黄褐 | ハケ | ナデ | 半透明・白色 | 櫛描波状文 |
| 683 | P-6 区・5 層 | 甕 | 橙 | 明赤褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 684 | M-6 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ナデ | ハケ | 白色 | 突帯 |
| 685 | N-6 区・6 層 | 甕 | 褐灰（スス付着） | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 半透明・赤褐色 | |
| 686 | K-3 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 突帯 |
| 687 | M-9 区・5 層 | 甕 | 灰黄褐（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・黒色 | |
| 688 | N-6 区・5 層 | 甕 | にぶい褐 | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 突帯 |
| 689 | N-4 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | 橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 690 | S-13 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 突帯 |
| 691 | M-9 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | |
| 692 | N-3 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒（スス付着） | ハケ | ナデ | 半透明・白色 | |
| 693 | M-7 区・6 層 | 甕 | 灰黄（スス付着） | 黄褐 | ナデ | ハケ | 透明・白色・キンウンモ | 突帯 |
| 694 | O-3 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | キンウンモ | |
| 695 | R-7 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ・オサエ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 696 | M-7 区・5 層ピット | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 突帯 |
| 697 | J-6 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・黒色 | |
| 698 | K-4 区・6 層 | 甕 | 黒褐（スス付着） | にぶい褐 | ナデ | ナデ | 白色・キンウンモ | 突帯 |
| 699 | P-7 区・5 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 黒色 | |
| 700 | M-4 区・6 層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色 | |
| 701 | M-5 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 黒色・赤褐色 | |
| 702 | M-7 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | |
| 703 | N-7 区・5 層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい褐 | ナデ | ハケ | 白色・キンウンモ | |
| 704 | J-5 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・黒色 | |
| 705 | J-5 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・キンウンモ | 突帯 |
| 706 | P-5 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 半透明・白色・キンウンモ | 突帯 |

## 表25　包含層出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 707 | J-4 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・褐色 | |
| 708 | J-6 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 709 | J-5 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 710 | M-5 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | — | 白色・カクセン石 | |
| 711 | N-11 区・5<br>M-3 区・6 層 | 甕 | にぶい赤褐 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 半透明・白色・カクセン石 | 突帯 |
| 712 | N-4 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | オサエ・ナデ | 白色・赤褐色・カクセン石 | 刺突 |
| 713 | M-7 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・黒色 | 刻目突帯・下城式系 |
| 714 | N-3 区・6 層 | 甕 | にぶい橙<br>(スス付着) | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 突帯・下城式系 |
| 715 | N-6 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・カクセン石 | 黒髪式系 |
| 716 | J-5 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 透明・赤褐色・カクセン石 | 黒髪式系 |
| 717 | H-5 区・2 層 | 甕 | 橙<br>(スス付着) | 橙 | ナデ | — | 白色・褐色 | 丹塗わずかに残る・突帯・須玖Ⅱ式 |
| 718 | M-7 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 中実脚台 |
| 719 | N-7 区・5 層 | 甕 | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色・カクセン石 | |
| 720 | J-6 区・6 層 | 甕 | 黄褐 | 黒褐<br>(スス付着) | ハケ | ナデ | 白色・キンウンモ | 中実脚台 |
| 721 | J-5 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 白色 | 刻目突帯 |
| 722 | J-6 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 723 | J-6 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | 刻目突帯 |
| 724 | O-6 区・5 層 | 甕 | にぶい褐<br>(スス付着) | 橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 725 | N-7 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | 刻目突帯 |
| 726 | J-5 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ミガキ | — | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 727 | P-4 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙<br>(スス付着) | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 赤褐色 | 刻目突帯 |
| 728 | I-5 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ハケ→ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 729 | M-7 区・6 層 | 甕 | 明黄褐 | 橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 730 | J-6 区・6 層 | 甕 | にぶい橙<br>(スス付着) | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 刻目突帯 |
| 731 | N-6・5 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 灰色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 732 | M-7 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 733 | J-5 区・6a 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色 | |
| 734 | M-4 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 735 | M-4 区・5 層 | 大甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色 | 突帯 |
| 736 | L-5 区・1 層 | 甕 | 黒褐<br>(スス付着) | にぶい橙～<br>黒褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 737 | R-6 区・5 層 | 甕 | 橙<br>(スス付着) | 橙～<br>にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 半透明・赤褐色 | |
| 738 | I-5 区・6a 層 | 甕 | 暗褐 | 暗褐 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 739 | N-8 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐<br>(スス付着) | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 740 | R-9 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 741 | I-5 区・6a 層 | 甕 | 明黄褐 | 灰白 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 742 | M-4 区・6 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ハケ | ナデ | 白色・褐色・赤褐色 | |
| 743 | M-5 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐<br>(スス付着) | 橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 744 | N-9 区・6 層 | 甕 | 明褐 | 黒褐 | オサエ | — | 白色・赤褐色 | |
| 745 | N-2 区・6 層 | 甕 | にぶい黄褐 | 黒褐 | ハケ | ハケ | 白色・褐色・カクセン石 | 外面に白色物質付着 |
| 746 | M-9 区・7 層 | 甕 | 橙 | 褐 | ハケ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 747 | J-5 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 748 | M-4 区・6 層 | 甕 | 灰黄褐 | 黒褐 | ハケ | オサエ・ナデ | 透明・白色 | |
| 749 | R-11 区・6 層 | 壷 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 750 | S-10 区・5 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ミガキ | 赤褐色・黒色 | 751 と同一個体 |
| 751 | S-10 区・5 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・黒色 | 750 と同一個体 |

## 表26　包含層出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 752 | R-15 区・6a 層 | 壷 | にぶい橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | 櫛描波状文 |
| 753 | S-10 区・5 層 | 壷 | 浅黄橙 | 暗灰 | ミガキ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 754 | N-9 区・6 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | 丹塗 |
| 755 | M-9 区・6 層 | 壷 | 橙 | 橙 | ハケ | ハケ→ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 756 | R-14 区・5 層 | 壷 | 橙 | 浅黄橙 | — | — | 灰色・赤褐色 | 刻目突帯 |
| 757 | R-14 区・5 層 | 壷 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | — | — | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 758 | S-7 区・6 層 | 壷 | にぶい橙 | 褐灰 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | 線刻 |
| 759 | S-7 区・5 層 | 壷 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 760 | S-10 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰白 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 761 | S-8 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色 | |
| 762 | O-14 区・5 層 | 甕 | 橙 | 橙 | — | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 763 | S-10 区・5 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 764 | M-4 区・6 層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 765 | S-8 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 766 | S-10 区・5 層 | 甕 | 橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 767 | S-10 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 768 | R-14 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ→ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 769 | K -7 区・5 層 | 甕 | 灰黄 | にぶい黄 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 770 | M-10 区・6 層 | 甕 | 橙（スス付着） | 橙 | ハケ | ハケ | 赤褐色・灰色 | |
| 771 | S-10 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ（カキアゲ） | ハケ | 赤褐色・灰色 | |
| 772 | H-16 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 773 | Q-4 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 774 | S-8 区・6 層 | 甕 | 橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 775 | R-14 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | タタキ→ナデ | ハケ | 赤褐色 | |
| 776 | O-10 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | タタキ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 777 | P-13、P-14、O-13 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | タタキ | ハケ | 赤褐色・黒色 | |
| 778 | P-9 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | タタキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 779 | M-10 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙（スス付着） | にぶい黄橙 | タタキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 780 | M-10 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 781 | N-10 区・5 層 | 甕 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ハケ | ハケ | 白色・赤褐色・灰色 | 刻目突帯 |
| 782 | R-7 区・6 層 | 甕 | 橙（スス付着） | 橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 783 | O-8 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 黄灰 | ナデ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 784 | T-7 区・5 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | — | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 785 | P-9 区・5 層 | 甕 | 橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 786 | P-13 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | 浅黄 | ナデ | ハケ | 赤褐色・黒色 | 櫛描波状文 |
| 787 | M-10 区・6 層 | 甕 | にぶい橙 | にぶい橙 | 「タタキ」風の調整 | ハケ | 赤褐色・灰色 | 刻目突帯 |
| 788 | R-9 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 工具ナデ | 工具ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 789 | P-8 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰白 | ナデ | ナデ | 白色・カクセン石 | |
| 790 | Q-14 区・5 層 | 甕 | にぶい橙 | 浅黄 | 「タタキ」風の調整 | ハケ | 赤褐色・灰色 | |
| 791 | S-8 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 灰白 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 792 | O-10 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 橙 | タタキ | ハケ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 793 | H-16 区・5 層 | 甕 | にぶい黄橙 | — | ナデ | — | 白色・赤褐色 | |
| 794 | S-8 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 795 | R-8 区・6 層 | 甕 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 796 | R-14 区・5 層 | 高坏 | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ミガキ | 黒色 | |
| 797 | P-12 区・5 層 | 高坏 | 橙 | 橙 | ナデ | ハケ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 798 | M-7 区・5 層 | 高坏 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | 円形透かし |
| 799 | N-11 区・5 層 | 高坏 | にぶい橙 | 橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色 | |
| 800 | R-11 区・6 層 | 高坏 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ハケ | ナデ | 黒色 | |

## 表27　包含層出土土器観察表

| 番号 | 出土区・層 | 器種 | 色調 | | 器面調整 | | 胎土含有鉱物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 801 | O-15 区・5 下層 | 高坏 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ー | ナデ | 赤褐色 | |
| 802 | P-12 区・5 層 | 高坏 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色 | 円形透かし |
| 803 | L-8 区・6 層 | 高坏 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ミガキ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 804 | M-11 区・5 層 | 鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ミガキ | ミガキ | 赤褐色・灰色 | |
| 805 | N-10 区・5 層 | 鉢 | 黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 806 | P-9 区・6 層 | 鉢 | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 807 | Q-10 区・6 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 808 | N-11 区・6 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 809 | J-5 区・6 層 | 鉢 | にぶい黄橙～橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 灰色 | 竹管文・丹塗？ |
| 810 | M-7 区・5 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ハケ | 赤褐色・灰色 | |
| 811 | L-9 区・5 層 | 鉢 | 浅黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 812 | M-9 区・5 層 | 鉢（壷？） | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 813 | S-10 区・5 層 | 鉢（甕？） | 灰白 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 814 | S-10 区・5 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 815 | N-10 区・5 層 | 鉢？ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 褐色 | |
| 816 | R-14 区・5 層 | 鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 817 | Q-14 区・5 層 | 鉢 | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 818 | D-12 区・5 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 819 | M-7 区・5 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 820 | J-5 区・6 層 | 鉢 | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 821 | N-11 区・6 層 | 鉢 | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 822 | N-11 区・6 層 | 鉢 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 823 | R-10 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | オサエ | 赤褐色・灰色 | |
| 824 | N-11 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | ナデ | 白色 | |
| 825 | O-8 区・6 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | オサエ | 赤褐色 | |
| 826 | O-13 区・5 層 | 手づくね | 橙 | 橙 | オサエ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 827 | D-8 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | オサエ | 白色 | |
| 828 | S-12 区・6 層 | 手づくね | にぶい橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 白色 | |
| 829 | N-10 区・6 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | オサエ | 赤褐色・灰色 | |
| 830 | Q-12 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | オサエ | 赤褐色・灰色 | |
| 831 | N-11 区・5 層 | 手づくね | 浅黄橙 | にぶい橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 832 | R-14 区・5 層 | 手づくね | にぶい橙 | にぶい橙 | オサエ | オサエ | 白色・赤褐色 | |
| 833 | P-9 区・5 層 | 手づくね | 灰黄褐 | 暗灰黄 | オサエ | オサエ | 白色 | |
| 834 | Q-13 区・5 層 | 手づくね | 灰 | 灰 | オサエ | ナデ | 白色 | |
| 835 | S-11 区・6 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 836 | R-11 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 837 | R-14 区・5 層 | 手づくね | 褐灰 | 黒褐 | オサエ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 838 | R-14 区・5 層 | 手づくね | 褐灰 | 褐灰 | オサエ | オサエ | 白色・灰色 | |
| 839 | P-12 区・5 層 | 手づくね | 褐灰 | 褐灰 | オサエ | ナデ | 白色 | |
| 840 | R-11 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | オサエ | 赤褐色・灰色 | |
| 841 | S-11 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | オサエ | 黒色 | |
| 842 | P-12 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | ナデ | 白色 | |
| 843 | P-12 区・5 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | ナデ | 白色 | |
| 844 | M-9 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | ナデ | 白色・灰色 | |
| 845 | O-9 区・5 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 白色・赤褐色・灰色 | |
| 846 | O-12 区・5 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ハケ | ナデ | 赤褐色・灰色 | |
| 847 | L-11 区・5 層 | 手づくね | 浅黄橙 | 浅黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 848 | N-11 区・6 層 | 手づくね | 浅黄橙 | にぶい黄橙 | ナデ | ナデ | 赤褐色 | |
| 849 | S-11 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | ナデ | 赤褐色 | |
| 850 | Q-9 区・5 層 | 手づくね | 黒褐 | 黒褐 | オサエ（工具） | ナデ | 白色 | |
| 851 | Q-13 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | オサエ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 852 | Q-13 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 橙 | オサエ | ナデ | 赤褐色 | |
| 853 | Q-12 区・5 層 | 手づくね | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | オサエ | ナデ | 白色・赤褐色 | |
| 854 | O-13 区・5 層 | 手づくね | 橙 | 橙 | オサエ | ナデ | 赤褐色 | |

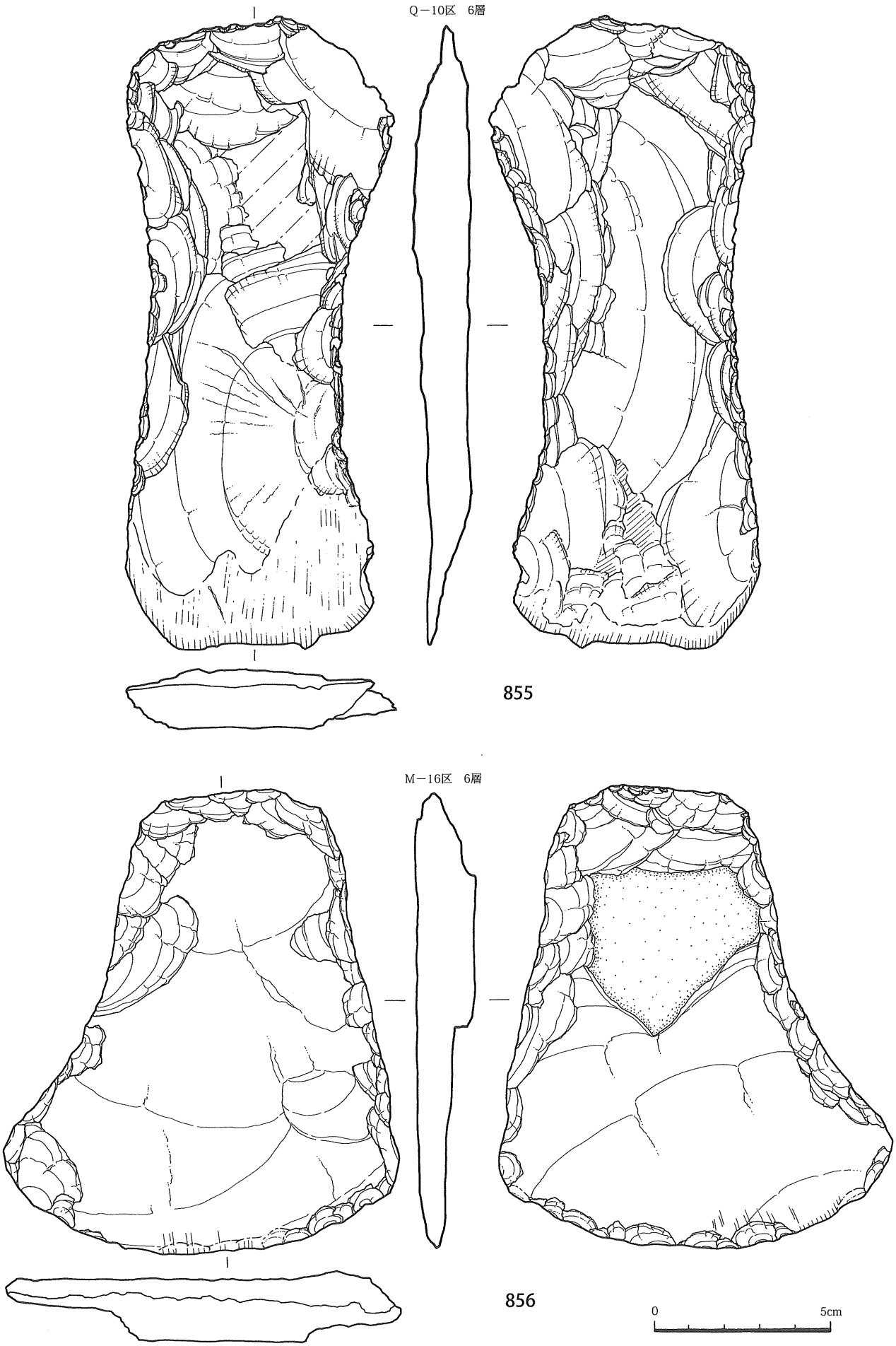
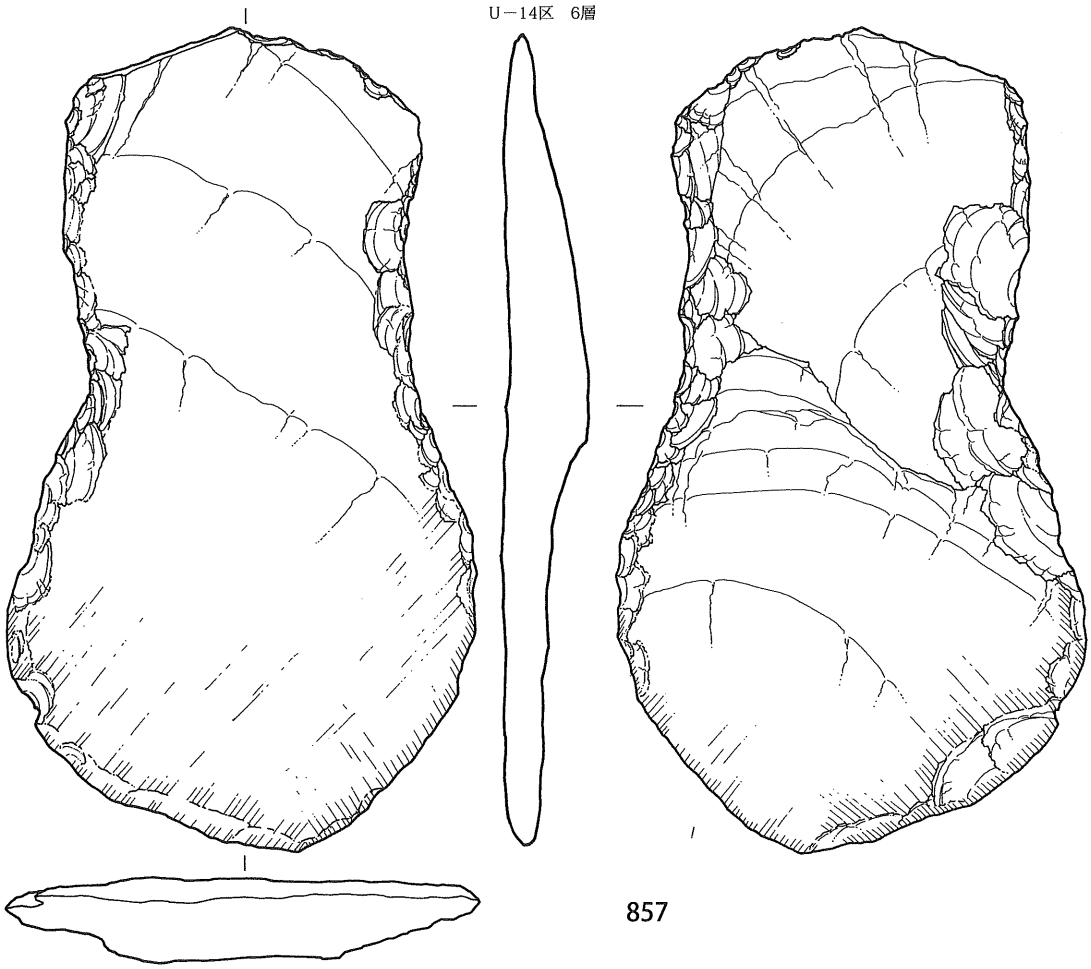



図117　包含層出土石器



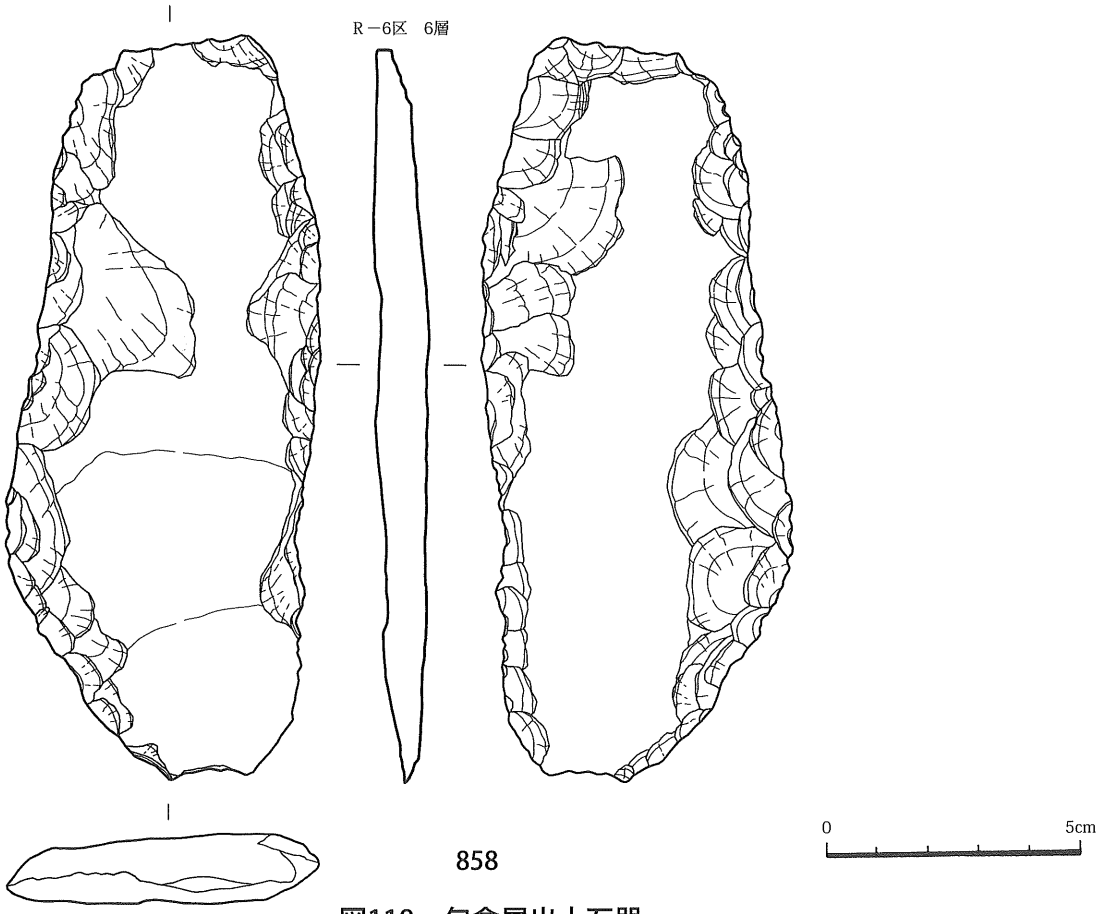




図118　包含層出土石器

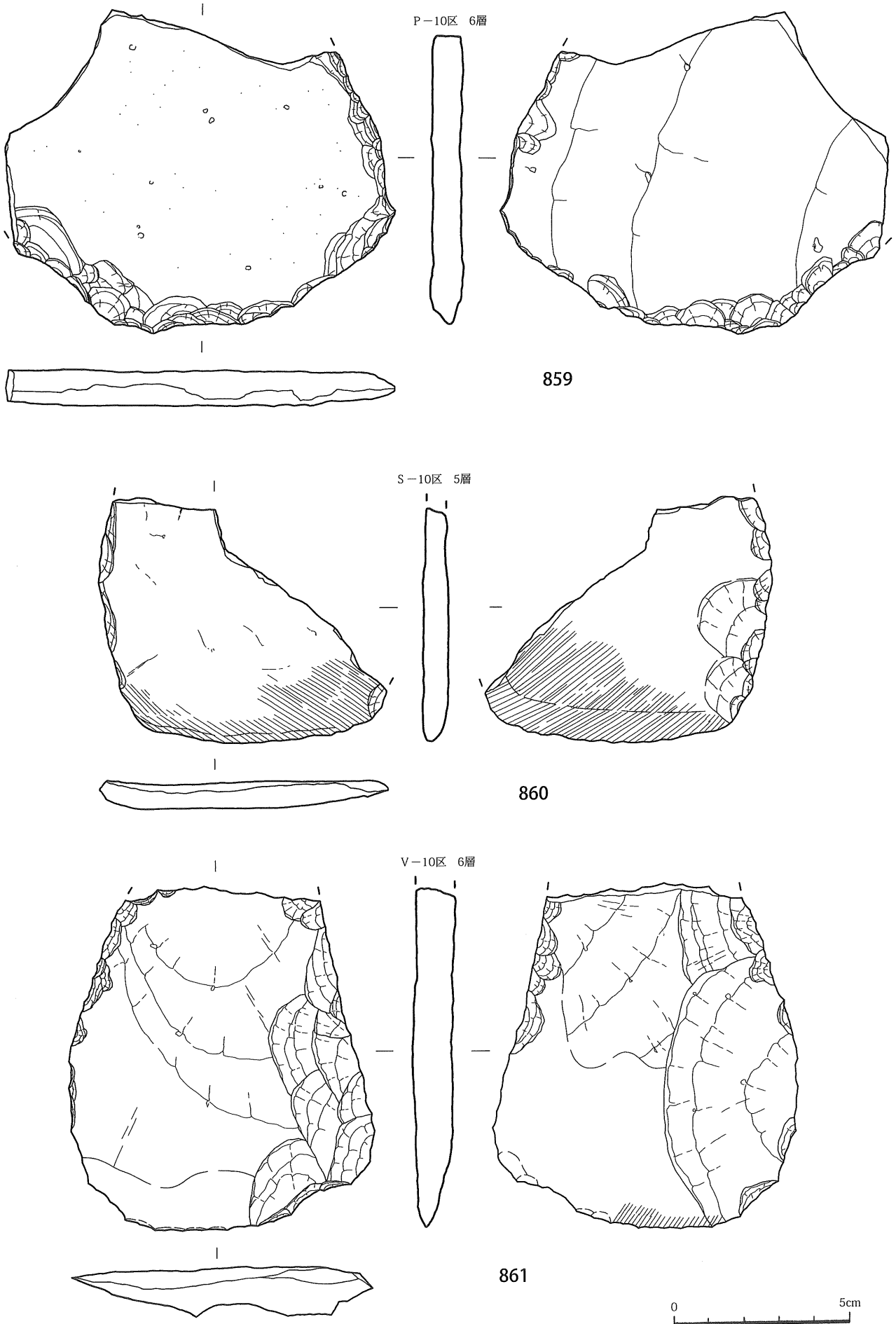



図119　包含層出土石器

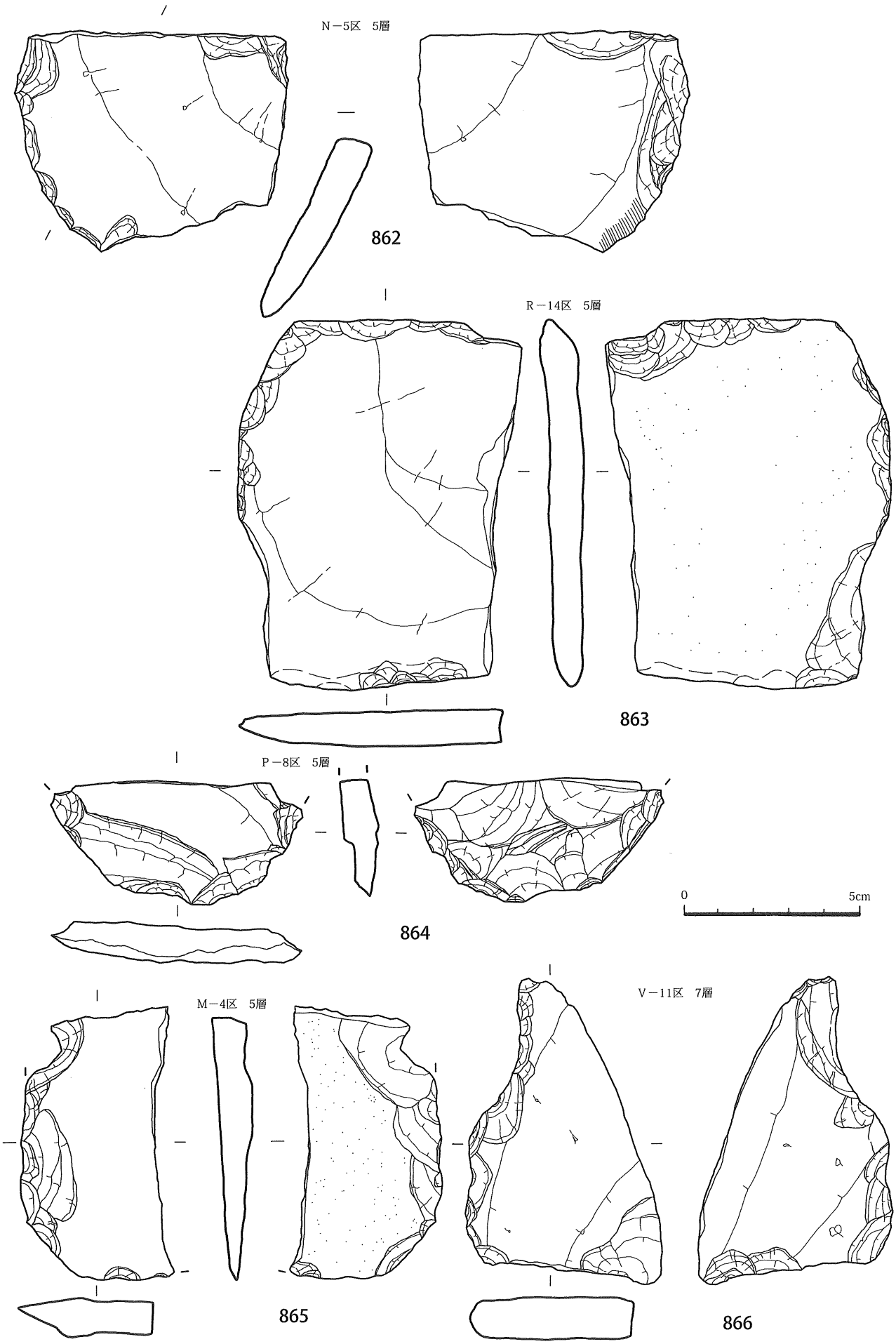



図120　包含層出土石器

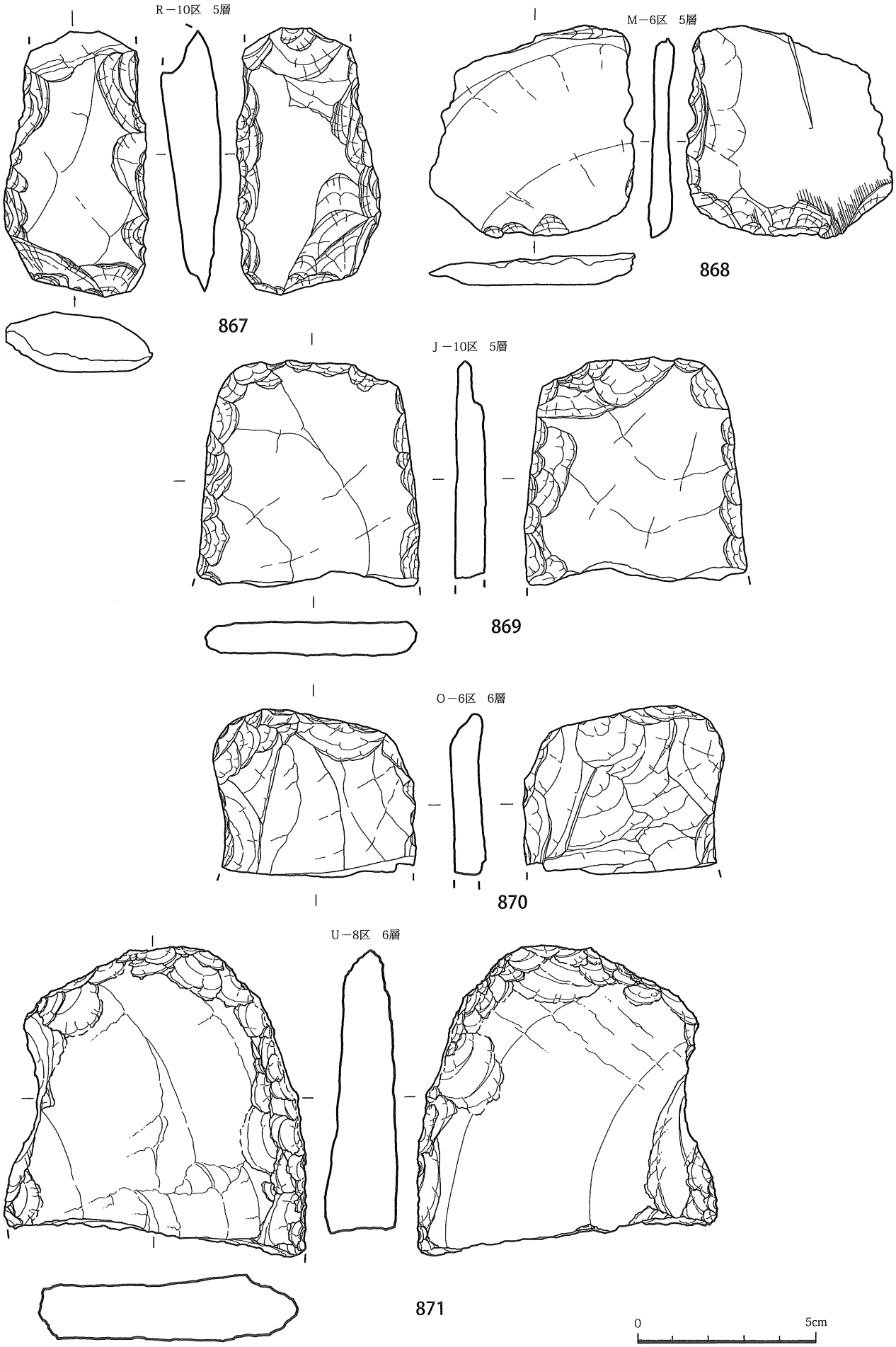



図121　包含層出土石器

### （3）剥片石器（図 122 ～ 124）

ここで取り扱う剥片石器には、打製石斧以外の粗製剥片石器や使用痕のある剥片を含んでいる。

**873** は裏面に節理面の残る剥片石器で、実測図下部の刃縁に使用痕が見られるが、全体的に風化している。長さ 3.7cm、幅 4.5cm、厚さ 1.9cm、重さ 26g、チャート。**874** は四角形の剥片の一辺に表裏面から調整加工し、厚手の刃部を作っている粗製剥片石器である。長さ 3.0cm、幅 4.3cm、厚さ 0.6cm、重さ 12g、両輝石安山岩 a。**875** は四角形状の一辺に厚手の刃部を有するもので、8 層から出土している。裏面には自然面が残る。長さ 4.2cm、幅 4.7cm、厚さ 1.2cm、重さ 36g、両輝石安山岩 a。**876** も 1 辺に刃部のあるものである。長さ 6.1cm、幅 4.4cm、厚さ 1.6cm、重さ 80g、両輝石安山岩 a。**877** も片面に自然面が残り、両面から調整加工した刃部を有する粗製剥片石器である。長さ 4.1cm、幅 8.7cm、厚さ 1.2cm、重さ 56g、両輝石安山岩 a。**878** は隣接するグリッドの剥片が接合したもので、2 箇所に表裏面から調整加工した刃部を 2 箇所有する。裏面には自然面が残る。長さ 6.8cm、幅 10.0cm、厚さ 1.1cm、重さ 111g、両輝石安山岩 a。**879** は平面形が三角形で、一部に調整加工している。実測図の下辺端部全体が磨耗しており、一部に線状痕がみられることから打製石斧の破片とも考えられる。長さ 7.0cm、幅 7.2cm、厚さ 1.2cm、重さ 61g、両輝石安山岩 a。**880** は大まかな調整のみの剥片であるが、実測図の下部の縁辺に使用痕と思われる微細な剥離が見られる。長さ 4.5cm、幅 5.8cm、厚さ 0.8cm、重さ 18g、両輝石安山岩 a。**881** は不定形の剥片であるが、一部の縁辺に片面からの調整加工による刃部を有している。長さ 5.5cm、幅 6.0cm、厚さ 1.3cm、重さ 64g、両輝石安山岩 a。**882** は縦長の剥片で、実測図下部の縁辺に細かな調整加工を加えている。また、表面の一部に研磨痕が見られることから、磨製石鏃等の素材とも考えられる。長さ 6.1cm、幅 7.9cm、厚さ 0.9cm、重さ 59g、黒色頁岩。**883** も上下に調整加工による整形がされている剥片で、表裏面ともに研磨されていることから磨製石鏃等の素材と思われる。長さ 4.8cm、幅 7.3cm、厚さ 1.0cm、重さ 32g、黒色頁岩。**884** は調整加工による刃部はないが、一部に使用痕のある剥片石器で、自然面も残る。長さ 5.2cm、幅 12.5cm、厚さ 3.3cm、重さ 142g、両輝石安山岩 a。

**885** と **886** は石器の素材となる剥片を剥ぎ取った後の残核と思われる。ともに本遺跡の弥生時代の石器素材として使用されている石材である。**885** は長さ 5.7cm、幅 6.3cm、厚さ 8.7cm、重さ 280g、両輝石安山岩 a。**886** は長さ 7.7cm、幅 9.0cm、厚さ 4.4cm、重さ 373g、両輝石安山岩 a。

### （4）磨製石包丁（図 125）

**887** は表裏面ともに研磨され、一部に剥離面が残る。両端部が欠損しており、穿孔を 2 箇所有する。残存長 4.1cm、幅 8.4cm、厚さ 0.5cm、重さ 27g、黒色頁岩。**888** は片方の端部が欠損しており、中央上部に 2 箇所の穿孔がある。刃縁には使用痕とみられる細かな剥離痕が見られる。残存長 5.3cm、幅 10.3cm、厚さ 0.7cm、重さ 51g、黒色頁岩。**889** は磨製石包丁片で、中央部のみ残存したものである。表裏面ともに研磨され、2 箇所の穿孔を有する。やや大型のもので、弥生前期のものか。残存長 5.6cm、幅 4.7cm、厚さ 0.7cm、重さ 28g、頁岩源ホルンフェルス。**890** は磨製石包丁の端部と思われる剥片である。表裏面ともに研磨され、刃部も砥ぎ出しているが、表の面は研磨が不完全で調整痕も残っている。残存長 2.6cm、幅 2.6cm、厚さ 0.7cm、重さ 8g、黒色頁岩。

### （5）磨製石鏃（図 125・126）

**891** はやや大きめの磨製石鏃で、表裏面ともに中央部から下部にかけて浅い窪みを有する。長さ 4.9cm、幅 2.9cm、厚さ 0.3cm、重さ 5.9g、凝灰質頁岩。**892** も表裏面ともに研磨され、刃縁先端部には刃こぼれかと思われる細かな欠損が見られる。長さ 3.7cm、幅 2.5 cm、厚さ 0.3cm、重さ 3.4g、凝灰質頁岩。**893** は表面を 3 面に砥ぎ出しており、抉りを有する。裏面の一部が剥離している。長さ 2.2cm、幅 1.8cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.9g、凝灰質頁岩。**894** は表裏面ともに研磨されており、基部の一部が欠損している。長さ 2.6cm、幅 1.7cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.2g、黒色頁岩。**895** と **896** は基部の欠損した磨製石鏃片である。**895** は残存長 1.4cm、幅 0.1cm、厚さ 0.1cm、重さ 0.3g、黒色頁岩。**896** は残存長 2.4cm、幅 1.3cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.6g、凝灰質頁岩。**897 ～ 900** は先端部の欠損

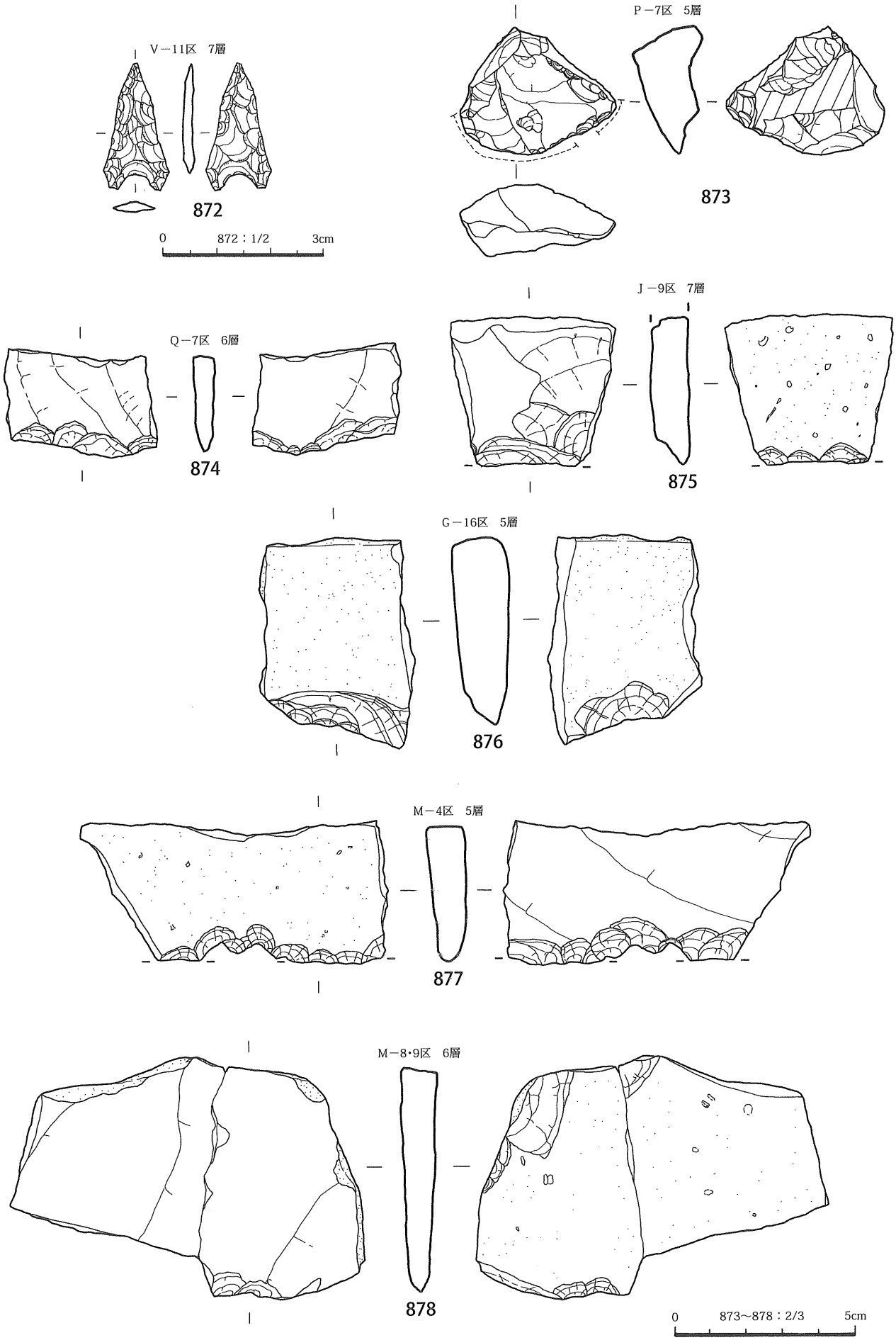



図122　包含層出土石器

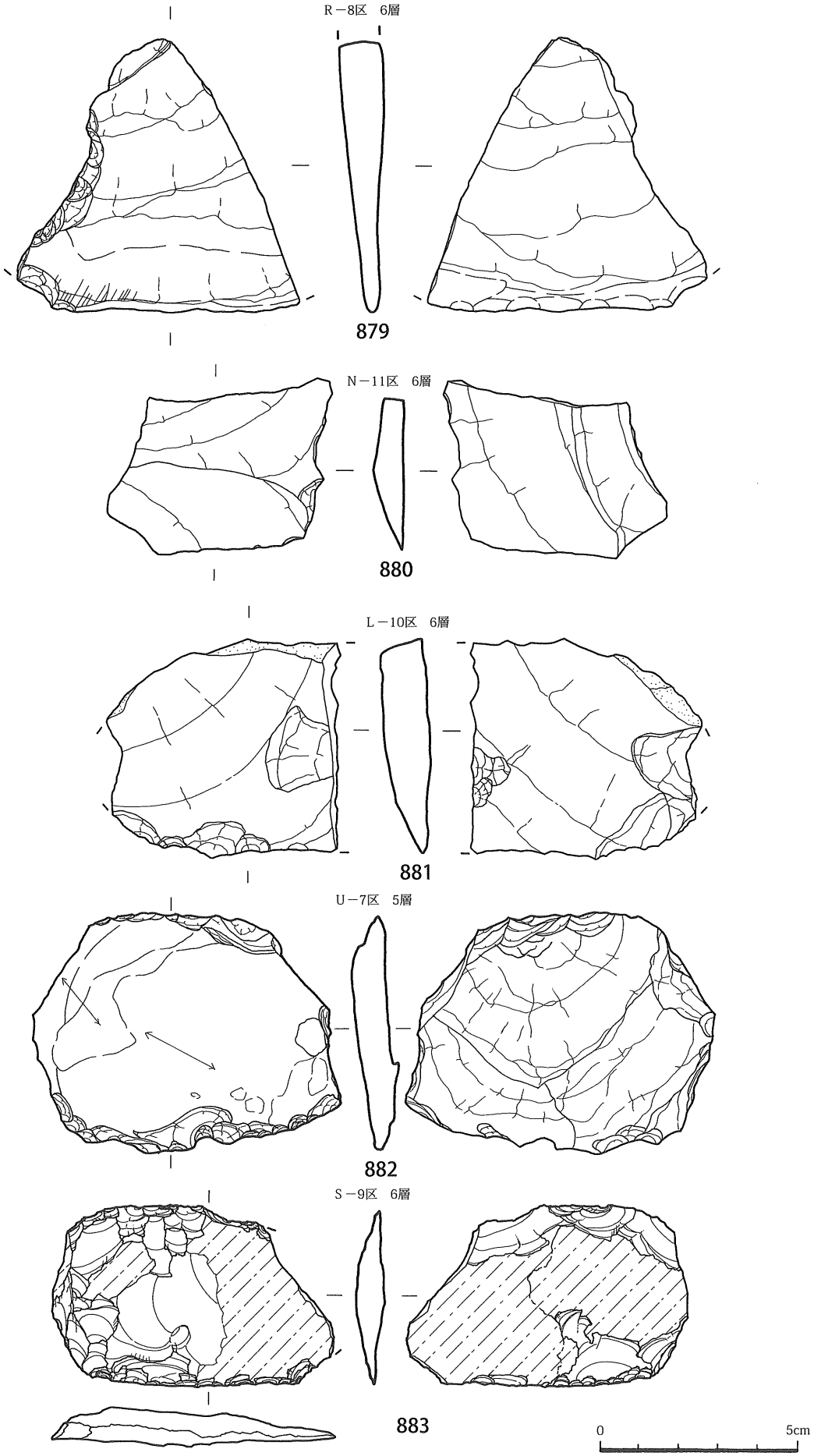



図123　包含層出土石器

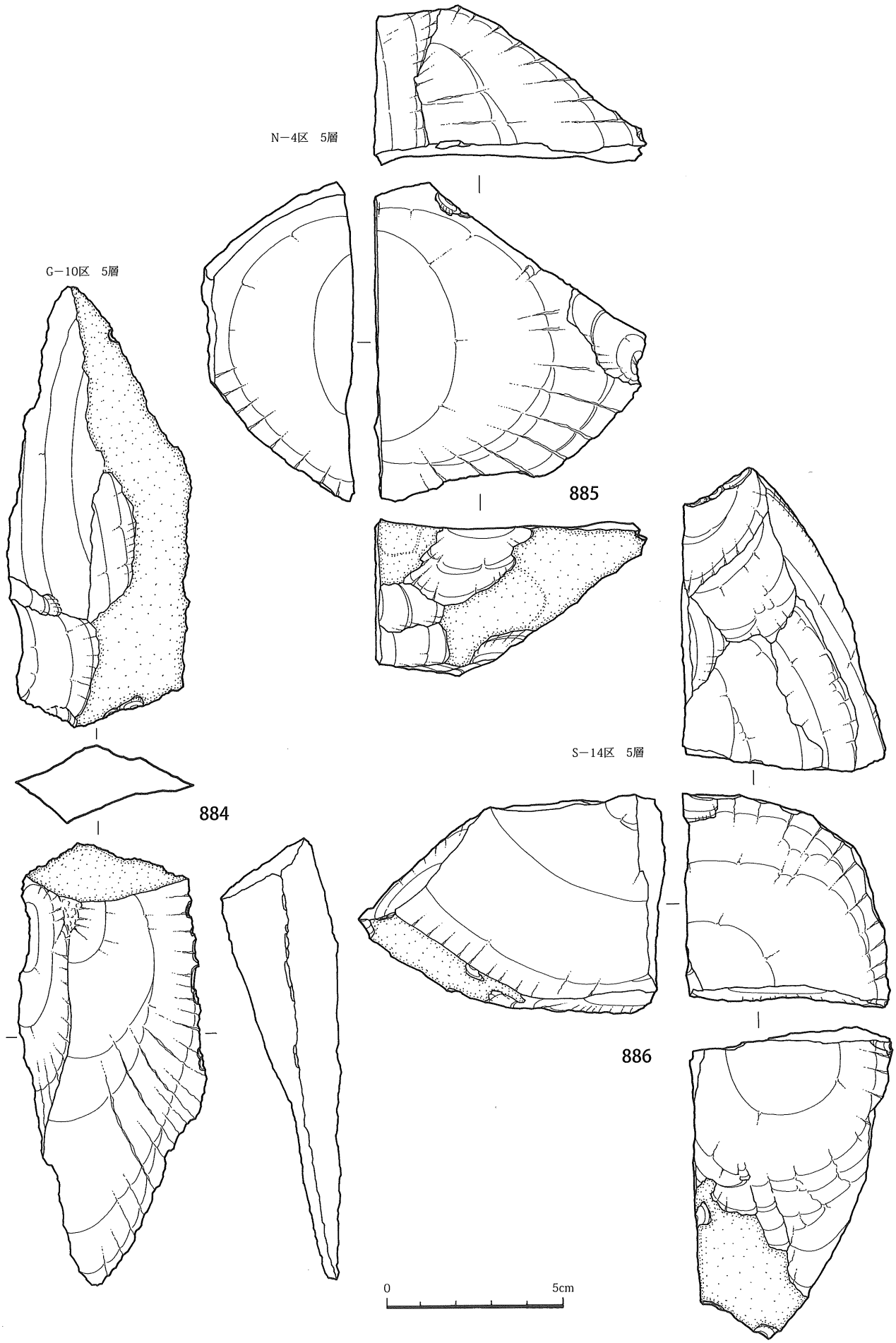



図124　包含層出土石器

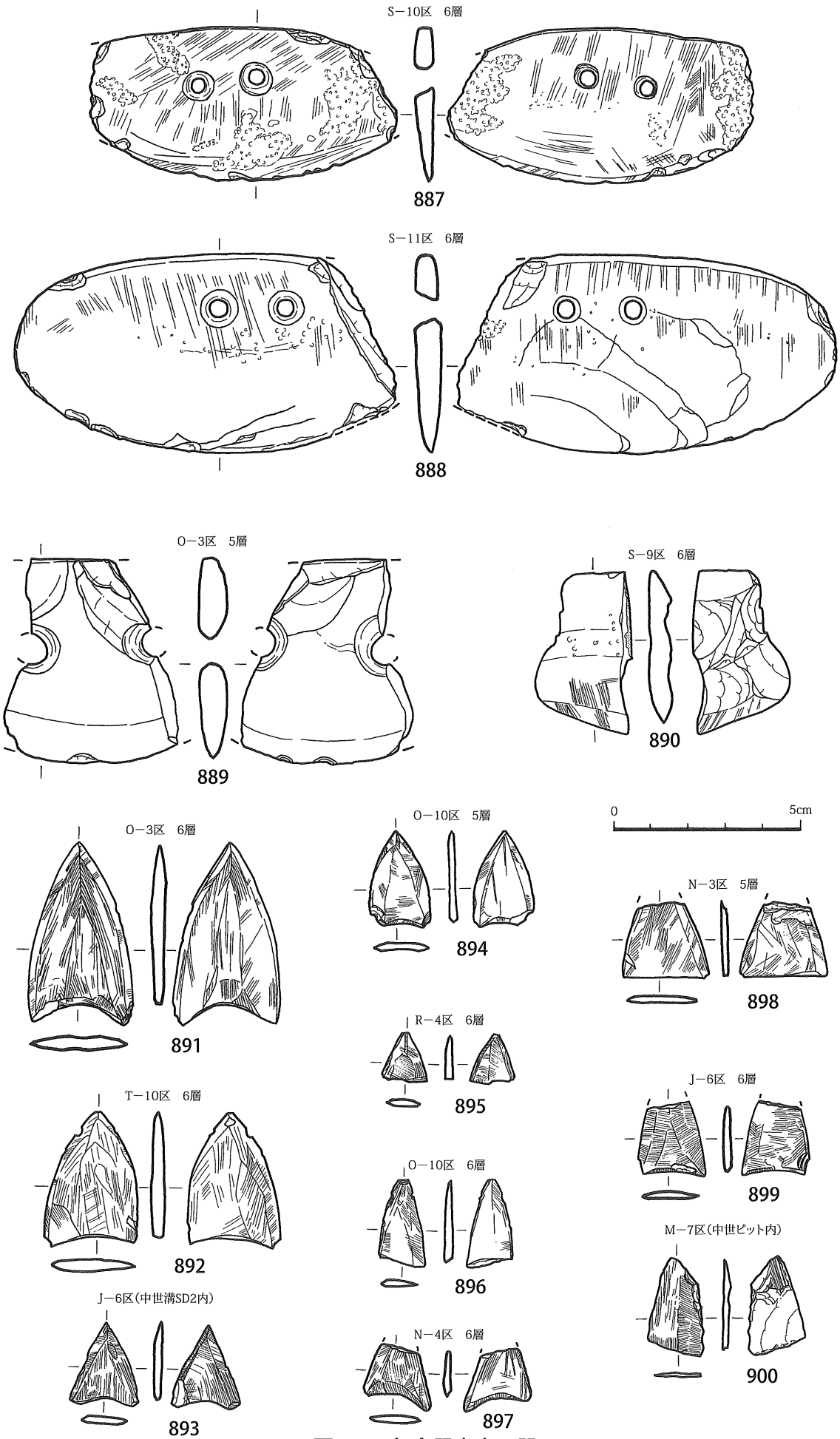



図125　包含層出土石器

した磨製石鏃片である。**897** は残存長 1.5cm、幅 1.9cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.8g、灰色頁岩。**898** は基部に抉りのないもので、残存長 2.1cm、幅 2.3cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.3g、凝灰質頁岩。**899** は残存長 2.0cm、幅 1.8cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.9g、凝灰質頁岩。**900** は表面が研磨され、裏面には剥離面を残す。整形途中のものか。長さ 2.4cm、幅 1.6cm、厚さ 0.2cm、重さ 0.8g、凝灰質頁岩。

**901 ～ 903** は石材・形状等から磨製石鏃の素材と思われる剥片である。**901** は横長の剥片を利用しており、表面には自然面が残る。先端部と基部に荒い調整加工痕があり、ほぼ三角形に整形している。長さ 5.7cm、幅 4.1cm、厚さ 0.6cm、重さ 15.3g、灰色頁岩。**902** は表面に節理のある自然面を残す大き目の剥片で、表面の先端部刃縁には研磨痕があり、裏面には調整加工痕が残る。荒い調整を行い、先端を折り取って再加工するものか。また、研磨痕があることから、砥石の破片の再利用とも考えられる。長さ 9.0cm、幅 4.0cm、厚さ 0.8cm、重さ 31.4g、灰色頁岩。**903** は横長の剥片の縁辺部に細かな調整を加えて整形している。長さ 2.7cm、幅 2.2cm、厚さ 0.3cm、重さ 2.5g、凝灰質頁岩。

### （6）砥石（図 126 ～ 128）

**904** は楕円形の自然礫を利用している。表裏面ともに砥石として使用しているが、側面も滑らかであり使用したものと思われる。また、長軸方向の先端部には殴打痕もみられ、敲石としても使用している。一部が欠損しており、側面の一部にはススの付着も見られる。残存長 14.7cm、幅 8.9cm、厚さ 4.4cm、重さ 860g、細粒砂岩。**905** は手のひら大の楕円形の扁平な円礫を利用している。両面ともに研磨され、一部は打ち欠かれている。表面と側面の湾曲部に V 字状断面の溝があり、磨製石鏃等の刃部の研ぎ出しに使用したものか。長さ 16.3cm、幅 10.0cm、厚さ 2.6cm、重さ 660g、細粒砂岩。**906** は小型で扁平なもので、片方の端部が欠損している。ほぼ前面を砥面として使用している。残存長 4.4cm、幅 2.5cm、厚さ 1.5cm、重さ 23g、細粒砂岩。**907** は断面が三角形で、3 面ともに平滑で使用しているが、片方の端部が欠損している。残存長 11.4cm、幅 6.4cm、厚さ 3.0cm、重さ 310g、細粒砂岩。**908** も扁平なタイプで表裏 2 面を砥面として使用している。半分は欠損しており、先端部には敲打痕が見られる。残存長 6.1cm、幅 8.0cm、厚さ 2.8cm、重さ 182g、細粒砂岩。**909** は断面三角形の柱状のもので、3 面ともに使用している。両端部には敲打痕が見られ、敲石としても使用している。一部には黒いスス状のものが付着している。長さ 19.7cm、幅 6.3cm、厚さ 5.2cm、重さ 860g、細粒砂岩。**910** は平面形が楕円形の扁平な形状で、表裏面の 2 面を砥面として使用している。また、両端部の側面に敲打痕があり、敲石としても使用している。長さ 8.8cm、幅 5.3cm、厚さ 2.5cm、重さ 171g、細粒砂岩。**911** は断面が丸みを帯びた長方形で、両端部が欠損している。主に表面が砥面として使用されているが、側面も平滑である。残存長 13.2cm、幅 5.8cm、厚さ 1.8cm、重さ 230g、黒色頁岩。**912** も板状のもので片端部が欠損している。主に表裏 2 面を砥面として使用しているが側面も平滑である。残存長 9.4cm、幅 6.1cm、厚さ 1.7cm、重さ 190g、細粒砂岩。**913** は断面がほぼ四角形で 4 面ともに砥面として使用している。残存長 8.6cm、幅 8.5cm、厚さ 4.4cm、重さ 600g、細粒砂岩。**914** も断面四角形で 3 面を砥面としている。被熱のため赤みを帯びている。残存長 9.8cm、幅 9.0cm、厚さ 3.6cm、重さ 490g、細粒砂岩。**915** は角柱状の大き目の砥石で、片端部が欠損している。主要な砥面は 1 面で使用により窪んでいるが、他の 3 面も平滑で砥面として使用している。長さ 21.3cm、幅 8.9cm、厚さ 5.6cm、重さ 1,960g、細粒砂岩。**916** は断面が不定形であるが、砥面として平坦部を 5 面使用している。残存長 9.2cm、幅 8.3cm、厚さ 6.3cm、重さ 680g、細粒砂岩。**917** は先端部の破片で、表裏 2 面を使用している。残存長 9.3cm、幅 9.3cm、厚さ 4.6cm、重さ 540g、細粒砂岩。**918** も断面が不定形の角柱状で、砥面は 7 面である。被熱のため赤みを帯びている。残存長 8.0cm、幅 10.9cm、厚さ 4.8cm、重さ 580g、細粒砂岩。**919** は厚手の破片で、主に表面を使用しているが裏面も平滑である。残存長 9.5cm、幅 11.5cm、厚さ 6.3cm、重さ 925g、細粒砂岩。**920** は表裏 2 面を砥面としている。長さ 6.7cm、幅 5.3cm、厚さ 0.9cm、重さ 55g、細粒砂岩。**921** は表裏面の一部を使用している。一部にスス状の物質が付着している。長さ 7.8cm、幅 5.6cm、厚さ 2.4cm、重さ 133g、細粒砂岩。**922** は表面 1 面を砥面として使用している。長さ 5.8cm、幅 4.0cm、厚さ 1.2cm、重さ 32g、細粒砂岩。**923** は表裏 2 面が使用のため窪んでいるほか側面の一部にも使用痕が見られる。長さ 8.0cm、幅 6.1cm、厚さ 1.4cm、重さ 82g、灰色頁岩。**924** は表裏 2 面が砥面である。

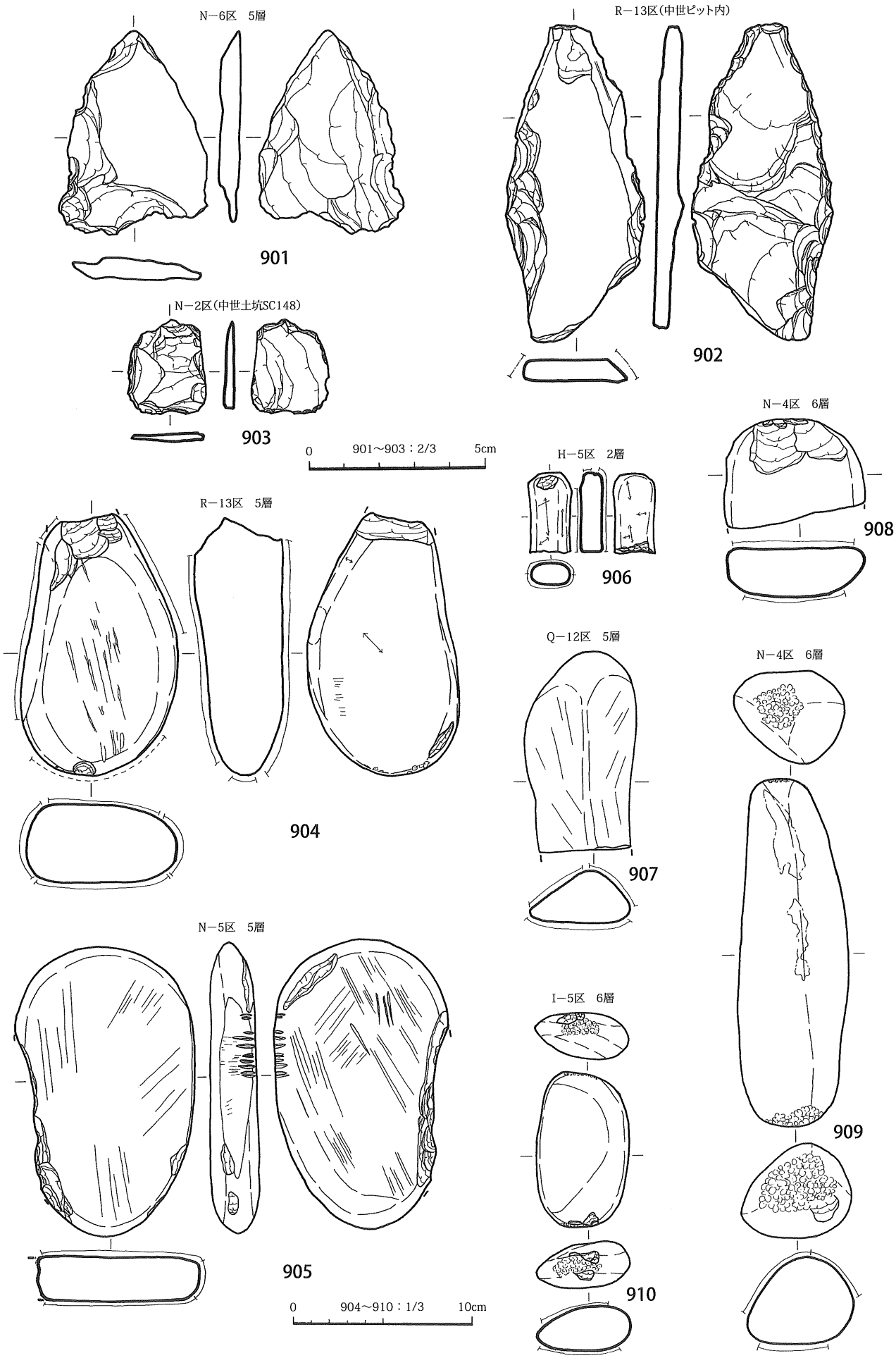



図126　包含層出土石器

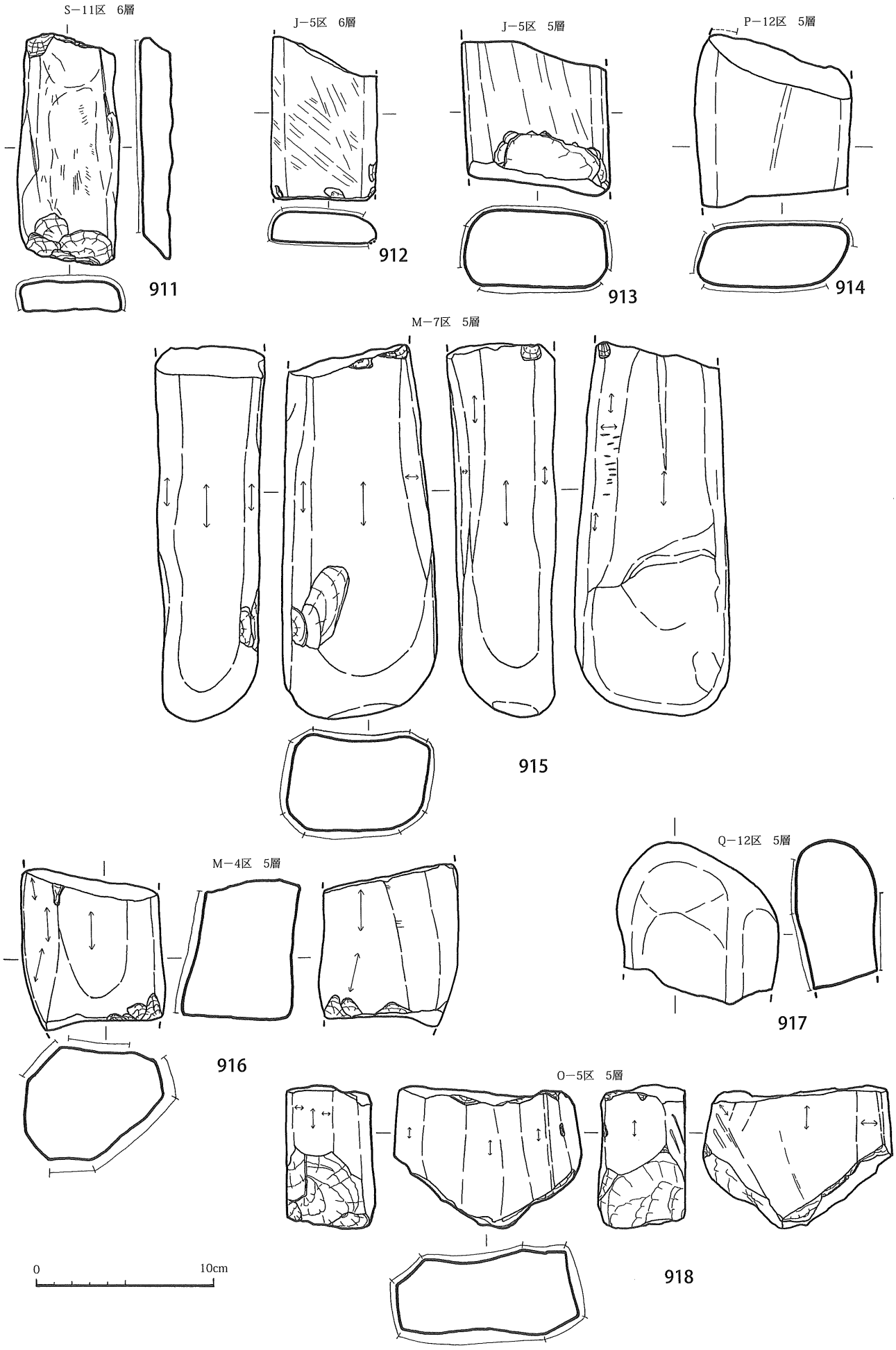



図127　包含層出土石器

長さ 6.8cm、幅 6.3cm、厚さ 2.0cm、重さ 105g、中粒砂岩。**925** は表面を砥面として使用している。長さ 7.8cm、幅 4.9cm、厚さ 1.5cm、重さ 43g、黒色頁岩。**926** は小型で表面のみ使用している。一部に鉄分が付着している。長さ 3.9cm、幅 3.1cm、厚さ 0.9cm、重さ 12g、細粒砂岩。

### （7）石皿（図 128）

**927** は石皿片と思われ、側面が調整加工され底面も平滑に研磨されている。残存長 14.3cm、幅 7.1cm、厚さ 7.7cm、重さ 950g、細粒砂岩。**928** は被熱して赤みを帯びている。外面も研磨され平滑である。残存長 15.7cm、幅 8.7cm、厚さ 8.6cm、重さ 1,500g、細粒砂岩。**929** はほぼ半分が欠損した石皿である。外縁から内面へ緩やかに弧状に傾斜し、中心部は平坦である。外面も底面・側面ともに整形のために研磨されている。残存長 17.8cm、幅 18.9cm、厚さ 9.5cm、重さ 2,140g、両輝石安山岩 a。

### （8）磨石・敲石（図 129）

**930** は平面形が卵形の形状をしている。表裏面ともに研磨され、側面部位のほとんどに殴打痕が見られる。長さ 7.9cm、幅 5.6cm、厚さ 3.3cm、重さ 198g、中粒砂岩。**931** は扁平な小型のものである。表裏面ともに研磨され、側面の大部分に殴打痕が残る。長さ 6.8cm、幅 5.8cm、厚さ 2.3cm、重さ 139g、中粒砂岩。**932** は側面の一部に敲打痕が見られる。長さ 9.6cm、幅 7.9cm、厚さ 3.6cm、重さ 340g、細粒砂岩。**933** は多孔質の石材で、側面全体に敲打痕が見られる。長さ 13.2cm、幅 9.3cm、厚さ 6.2cm、重さ 830g、両輝石安山岩 b（霧島新期熔岩類）。**934** は側縁の一部と表裏面の中央に敲打痕が見られる。多孔質の石材である。長さ 13.6cm、幅 10.3cm、厚さ 8.3cm、重さ 1,370g、両輝石安山岩 b（霧島新期熔岩類）。**935** は側面のほぼ全体と表面の中央部に敲打痕が見られる。一部被熱して赤みを帯びている。長 11.6cm、幅 9.0cm、厚さ 6.6cm、重さ 940g、中粒砂岩。**936 ～ 939** はほぼ半裁したもので、いずれもほぼ全体が研磨された磨石である。**936** は側面のほぼ全体を敲石として使用している。長さ 6.0cm、幅 10.0cm、厚さ 4.6cm、重さ 330g、細粒砂岩。**937** は側面と先端部に敲打痕が見られる。残存長は 7.6cm、幅 9.8cm、厚さ 4.7cm、重さ 340g、両輝石安山岩 b（霧島新期熔岩類）。**938** も同様に側面全体に敲打痕が残る。長さ 5.5cm、幅 10.1cm、厚さ 3.7cm、重さ 250g、中粒砂岩。**939** は側面の先端部を敲石として使用している。長さ 6.1cm、幅 10.7cm、厚さ 6.6cm、重さ 600g、細粒砂岩。**940 ～ 942** は小型で球状のもので、ほぼ全面が平滑に研磨され、一部に敲打痕が見られる。投弾の可能性もある。**940** は長さ 5.5cm、幅 5.0cm、厚さ 4.2cm、重さ 120g、両輝石安山岩 a。**941** は長さ 5.5cm、幅 5.0cm、厚さ 4.2cm、重さ 84g、両輝石安山岩 a。**942** は長さ 4.8cm、幅 3.9cm、厚さ 3.6cm、重さ 141g、両輝石安山岩 a。**943** と **944** は小型で棒状の磨石・敲石である。**943** は断面が楕円形で、全体が平滑に研磨されている。被熱のためやや赤みを帯びており、先端にはタール状の黒い物質が付着している。残存長 6.3cm、幅 4.0cm、厚さ 3.0cm、重さ 102g、細粒砂岩。**944** は両端部が欠損した棒状のもので、ほぼ平坦な 2 面が平滑に研磨されている。また平坦面の 2 箇所に敲打痕があり、敲石として使用している。残存長 7.3cm、幅 3.9cm、厚さ 3.1cm、重さ 186g、細粒砂岩。

### （9）軽石加工品（図 130）

軽石加工品は、5 点出土している。**945** はやや扁平で平面形は楕円形である。一部欠損しているが、全体が研磨されており平面図の中央上位に穿孔がある。穿孔は片面側からのみのものとみられ、欠落は穿孔時に生じた可能性もある。残存長 7.9cm、幅 6.4cm、厚さ 3.6cm、重さ 58g。**946** も欠損部の見られる扁平な製品で、表裏面、側面ともに研磨され整形されている。一部には被熱により赤褐色、黒色に変色した部分が見られる。表面の中央部に幅 1.2 ～ 1.5cm 深さ 0.1cm の浅い U 字条の溝状の窪みがあり、先端の丸いものを砥ぐのに使用したものか。残存長 9.3cm、幅 5.7cm、厚さ 2.1cm、重さ 360g。**947** と **948** は平面形が円形で扁平なもので似た形状である。表裏面、側面ともに研磨され整形されている。**947** は長さ 5.7cm、幅 5.5cm、厚さ 3.4cm、重さ 38g。**948** は長さ 5.7cm、幅 5.5cm、厚さ 3.1cm、重さ 34g。**949** は平面形が楕円形で、厚みの薄いものである。長さ 7.4cm、幅 5.5cm、厚さ 1.1cm、重さ 26g。

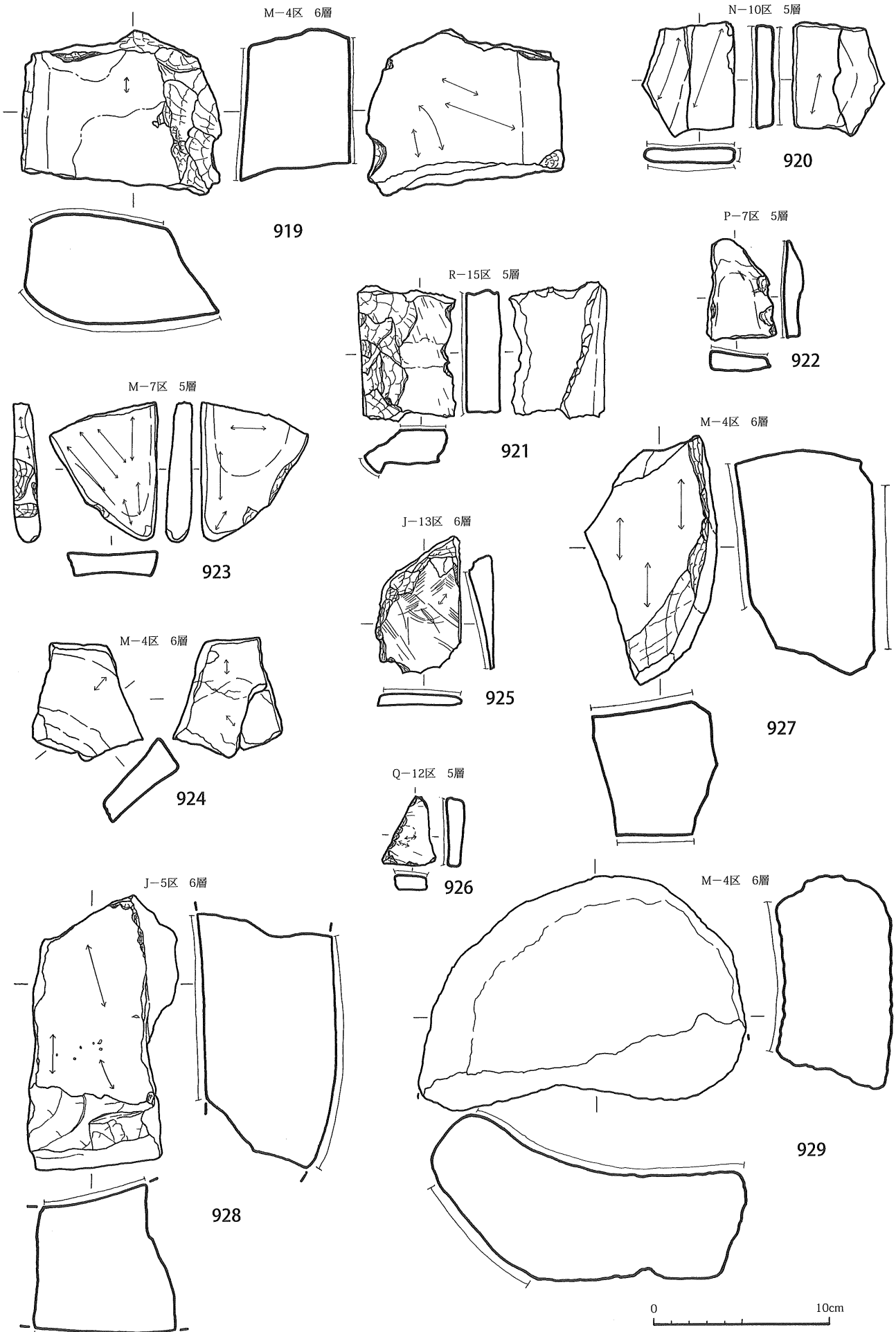



図128　包含層出土石器

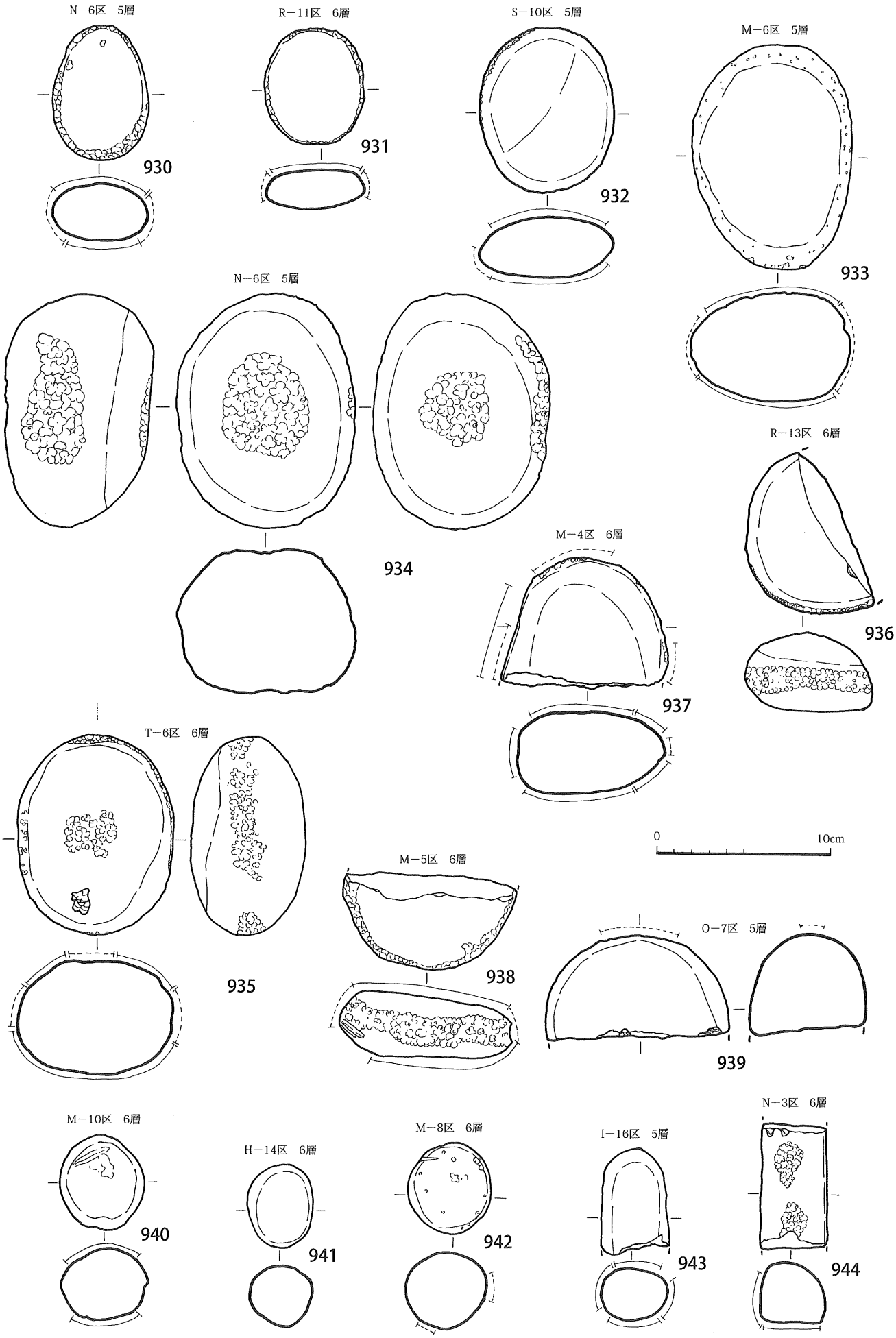



図129　包含層出土石器

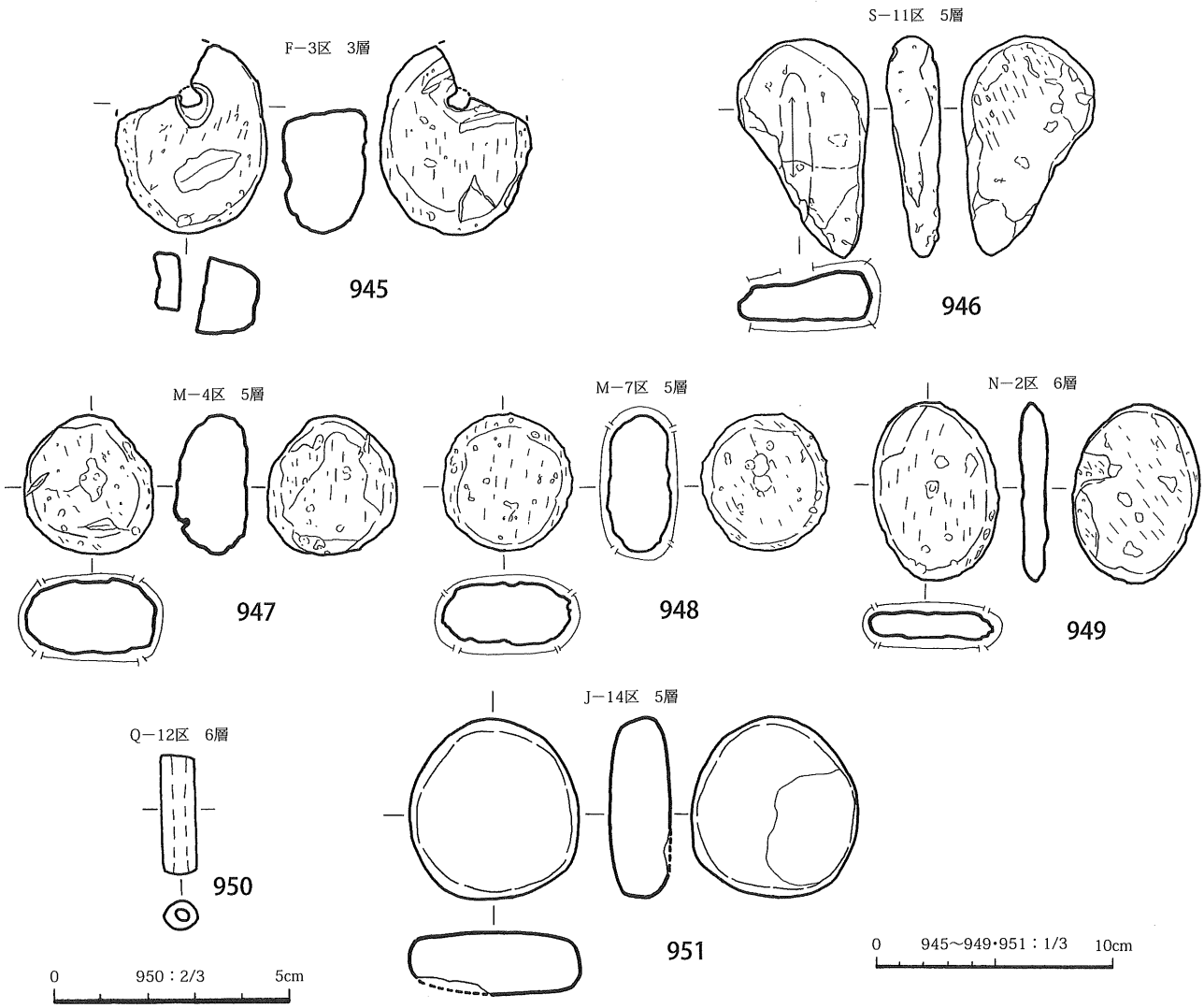



**図130 包含層出土軽石加工品・管玉・土製品**

## (10) その他の石製品（管玉など）・土製品（図 130）

**950** は管玉で表面、両端ともに平滑に研磨されている。長さ 2.5cm、直径 0.7cm、内径は 0.3cm、重さ 2.0g、蛇紋岩か。**951** は土製品で、平面形は円形で中央部にやや厚みがある。砂粒も見られず、精製された粘土を用い、裏両面、側面ともに指頭によって丁寧に整形し焼成した製品である。表裏両面の大部分が赤褐色で、一部にスス状の物質が付着している。また、裏面には焼成中に生じたと思われる剥落がみられる。長さ 7.1cm、幅 7.2cm、厚さ 2.6cm、重さ 123g。

**No.893、894、900、902、903、915** の遺物については、包含層上位の中世の遺構の調査の中で、ピット、土坑、溝状遺構、掘立柱建物の柱穴から出土したものである。（文責：寺師雄二）

**【参考文献】**

1996 年　町田勝則「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法①―」（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集 I

2002 年　都城市教育委員会「横市遺跡群―江内谷遺跡・坂元 B 遺跡・加治屋 B 遺跡（第 1 次調査）―」 都城市文化財報告書第 58 集

2004 年　田中英司「石器実測法―情報を描く技術―」（株）雄山閣

## 第４節　縄文時代～弥生時代の成果のまとめ

### １．縄文時代

縄文時代早期の文化層を把握した調査区域北東部は、遺跡の地形環境の項において述べたように、低位段丘１面（調査区下段）と同２面（調査区上段）の両方の地形面にまたがっている。調査区下段の北東隅（Ｂ－16区）に設けた深掘りトレンチの断面観察によると、低位段丘１面は桜島薩摩テフラ（約11000年前）降下直前まで河川の氾濫の影響を受けやすい場所であったと考えられ、同テフラ降下後に離水したと考えられる。一方、低位段丘２面は桜島薩摩テフラの下位にローム層が堆積し、さらにその下に段丘礫層が堆積していた。ちなみに低位段丘１面よりもさらに一段低い面である沖積段丘２面は、調査区域北方に設けた北トレンチにおいて、霧島御池軽石（約4200年前）よりも下位に堆積する鬼界アカホヤ火山灰（約6300年前）が、侵食を受けたとみられる段丘崖を確認し、鬼界アカホヤ火山灰直下にシルト質の洪水堆積物を確認している。

縄文時代早期の集石遺構・土坑などの遺構は、比較的早い段階で離水した低位段丘２面（調査区上段）に営まれていたが、縄文時代早期の土器や石器及び焼礫は上段と下段の両方の平坦面から出土した。縄文時代早期の土器の中で、最もまとまって出土したのは３類とした「辻タイプ」と呼ばれている土器群と４類とした桑ノ丸式土器に類似する土器群であり、押型文土器（６類）と縄文施文土器（７類）がこの２者に次いでいる。３類と４類はいわゆる南九州貝殻文円筒形土器群の後半期に位置付けられるものであり、縄文時代早期前葉の所産と考えられる１類とした前平・吉田式系土器や２類とした別府原式土器と思われる土器群より新しく位置付けられる。調査面積が限られていることもあり、今回のデータだけからは断定的なことはいえないが、これらの縄文時代早期中葉に位置付けられる土器群の分布状況に関して注目すべき所見が得られたので紹介しておく。辻タイプ（３類）は調査区上段から出土し、桑ノ丸式類似土器（４類）の分布範囲の西側に重なっている。桑ノ丸式類似土器（４類）は大半が調査区上段から出土し、おそらくそこから下方へ落下したと思われる２点の破片が調査区下段の西側から出土した。一方、押型文土器は、６ｂ類とした横方向施文の端整な楕円押型文土器の平底破片１点のみが上段から出土したが、それ以外の６ａ類とした不規則走行施文の数珠状楕円押型文土器は下段の東側からまとまって出土した。６ａ類の胎土は辻タイプ（３類）や桑ノ丸式土器類似土器（４類）と同じようにいわゆるキンウンモを含んでいるものの、肉眼観察では、その他の鉱物の含み具合に違いが認められる。外面に施された楕円文は斜めや縦方向の不規則なもので、楕円文はいわゆる数珠状に連なっている部分もある。器内面にはケズリによる調整痕が観察される。このような器面調整技法は貝殻文円筒形土器の最終形態である桑ノ丸式土器の器内面のミガキ調整前に施された１次調整技法に類似している。このタイプの押型文土器は比較的多くの破片が出土しているものの、口縁部や底部といった型式同定や時期判別の決め手となる特徴をもった破片は出土しておらず、全形を復元することはできない。６ａ類は当地域において貝殻文円筒形土器の製作技法にのっとって在地化した押型文土器の可能性がある。調査区上段から出土した辻タイプ（３類）と桑ノ丸式類似土器（４類）は、口縁部に貝殻腹縁部による刺突文の文様帯を有しているという文様構成の点において類似している。また、辻タイプ（３類）と桑ノ丸式類似土器（４類）と端整な楕円押型文土器（６ｂ類）、縄文施文土器（７類）の多くは、胎土の共通性と出土分布の重なり具合から、時間的に近い関係にあると推定される。これらと調査区下段から出土した数珠状楕円押型文土器（６ａ類）とは時期差が想定され、６ａ類は、おそらく３類や４類よりも新しく位置付けられる可能性がある。

霧島御池軽石（８層）上位の黒色土（６ｂ～７層）からは、比較的低い密度ではあるが、縄文時代後～晩期の遺物が出土した。また、調査区域のほぼ中央部では、きわめて浅い竪穴状遺構を２基（**JSC1・4**）検出した。そのうちの１基（**JSC1**）の埋土中から後期後葉に属する土器が出土し、周辺からは同時期の土器片とともに両輝石安山岩ａの剥片石器（打製石斧？）も見つかった。これらの遺構はピットを伴っていないため、明確な竪穴住居跡と断定することはできなかったが、当該地における何らかの営みを示すものと思われる。

（文責：桒畑光博）

## 2．弥生時代～古墳時代初頭

### （1）土器について

加治屋Ｂ遺跡からは弥生時代に該当する住居跡が合計 45 軒検出され、多量の弥生土器が検出された。大半は中期～後期該当の資料群であり、とりわけ中期土器が大きなウェイトを占めている。従来に見られなかった知見も得られており、ここで簡単ではあるがまとめておきたい。

**弥生時代前期の土器**

弥生時代前期の土器は甕・壷が検出されている。壷（**660**）はヘラ描き沈線、貝殻復縁刺突による重弧文が施文される。貝殻復縁で重弧文を施文するタイプは高橋貝塚、鹿児島大学構内遺跡、中町馬場遺跡等の鹿児島県西部において散見されるが、宮崎県内では初出かと思われる。甕は刻目突帯文を付すものが多く、胴部にも突帯、半円状突帯をもつものが見られる。またほとんどの甕が調整にミガキを施しているのも特徴である。これらの土器群は板付Ⅱ式併行でおさまるものであろう。同時期と思われる資料は、加治屋Ｂ遺跡より南西へ 200 ～ 300m 離れた坂元Ａ遺跡や坂元Ｂ遺跡（桒畑（編）2006）でも検出されている。

**弥生時代中期の土器**

住居跡出土資料のうち大半は中期に該当するものである。甕の形態を見れば、中園編年の入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式に該当する資料が多く見られる。また日向地方の在地甕である中溝式甕も検出されている(注1)。

中期の土器群は大きく２時期に分けることができる。一つは入来Ⅱ式を主体としたもの、もう一つは中溝式、山ノ口Ⅱ式を主体としたものである。現行編年に対照させたならば、前者を中期前半、後者を中期後半として時間幅を与える事ができよう。

入来Ⅱ式自体は宮崎平野部まで存在する広範な土器様式（中園 1997）として知られており、本遺跡では甕が多く検出された。壺の検出は少なく、住居跡検出のものは **YSA3** のみで、包含層からは少量検出された程度である。その他の器種は検出されていない。

**YSA16** では入来Ⅱ式とともに絡縄突帯をもつ粗製甕（**257**）が共伴している。このタイプは加久藤盆地や小林地域などでよく見られるもので、今回入来Ⅱ式甕との共伴が確認できたことは、この時間的位置について一つの定点を得たことになる。また、同じ都城盆地にある大岩田村ノ前遺跡（重永（編）1991）では竪穴状遺構内で黒髪式甕と共伴している。実際、えびのや小林地域においては包含層中で入来式系土器、黒髪式系土器と共伴する傾向が多い（東 1998）。また、後の時期には系譜を追える資料も見当たらない為、これ以降は断絶する可能性が考えられる。

同じ都城盆地内で上記の段階と同時期と思われる遺跡としては高田遺跡（米澤 2005）、大岩田村ノ前遺跡等が挙げられる。

中溝式、山ノ口Ⅱ式甕は **YSA10、YSA12、YSA15、YSA23** 等で検出されている。両者の同時性はすでに指摘、認識されているとおりで、北部九州系土器や瀬戸内系土器との共伴関係から弥生中期後半～後期初頭の時期幅に位置づけられる（中園 1993・1997）。また、これらの甕と多く共伴しているのが無文甕であり、住居跡、包含層から多数検出されている(注2)。この時期の甕には少なくとも中溝式、山ノ口Ⅱ式、無文の３者が同時に使用されていたようである。この無文甕の口縁部形態にはヴァリエーションが認められ、口唇をヨコナデするもの、丸く収めるもの、やや跳ね上げぎみに仕上げるもの等がある。

中溝式甕の中にも口縁部形態に山ノ口Ⅱ式のような貼付のもの（**269、407**）も認められ、折衷タイプとして認識できる。類似資料は大浦遺跡（米澤 1997）にもあり、両者が混交する当地域の特徴を表しているといえる。各住居跡出土甕の割合を見てみると中溝式甕、無文甕がほぼ同程度の割合で出土し、山ノ口Ⅱ式甕はやや客体的な在り方を示している。土器胎土も褐色系に発色し、キンウンモを含有するものが多く、大隈半島における該期の土器の特徴をもつ。

甕、壺以外には器種が乏しく、わずかに小形の鉢（**215**）、高坏（**680**）が見られる程度である。

上記以外にも興味深いのは、中溝式甕の出土している住居のうち、**YSA10** において、中九州地方（熊本県）の黒髪式系甕と共伴していることである。両者の併行関係を探る上で貴重な事例として評価で

きる。ちなみに都城盆地では他の弥生中期遺跡においても黒髪式もしくはその系統と考えられる土器が散見され、客体的な在り方ではあるものの、一定量存在している。

**YSA12** からは瀬戸内系の壷（**163**）と中溝式甕の共伴が認められた。本資料には明瞭な凹線は施文されず、器形も瀬戸内地方のものとは異なる部分が目立つ。胎土も在地系であり、この資料は在地製作の可能性が高い。他に、**YSA23** からは矢羽根文様をもつ甕（**378**）、包含層からはⅣ様式と思われる矢羽根透かし高坏片（**681**）が検出されている。

上記の時期は総じて中溝式甕・無文甕が多くのウェイトを占めるが、山ノ口Ⅱ式甕も一定量存在する。また、少量ではあるが黒髪式、下城式、須玖Ⅱ式も見られた。系統を異にする甕が量の多寡はあるものの共存していたことが本遺跡資料からは理解でき、この期の都城盆地における実態であるといえよう。ちなみに都城盆地における同時期遺跡としては、池ノ友遺跡（桒畑 2000）、向原第 1 遺跡（桒畑 1990）、本池遺跡（東 1996）、等がある。

**弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器**

包含層からは後期前葉～中葉段階の資料も混在しながら検出されているが、住居跡出土資料（**YSA2、24、25、38、41、44**）は弥生時代終末～古墳時代初頭の時間幅に収めることができる。甕以外には壷、高坏、小型高坏、鉢、手づくね土器等が検出されている。**YSA32** で検出された小型壷（**588**）は胴部に線刻が施される。このような壷への線刻は後期後半段階に盛行するもので、上述の資料群よりも古い段階として捉えておきたい。

**594、605** のようなタタキを施す甕や **781、787** のように頸部に刻目突帯が巡る個体は同じ都城盆地内では向原第 2 遺跡（桒畑 1990）、牟田ノ上遺跡（桒畑 1991）等で検出されており、同時期と思われる。全体の土器相も本遺跡資料と似通っている。注目されるのは、**787** のような甕で、胴部外面の調整が一見タタキを施しているように見える。しかし、詳細に観察すると沈線状の工具痕になっている。原体は不明だがハケ様の施し方でタタキ風に仕上げている。

向原第 2 遺跡等で検出されている小型精製器種のうち直口壷は本遺跡からは検出されていない。甕へのタタキ導入と小型精製器種の成立に時期差を認めるならば、本遺跡資料は向原第 2 遺跡資料よりも古い段階の可能性も考えられる。（文責：加覧淳一）

## （2）集落変遷について

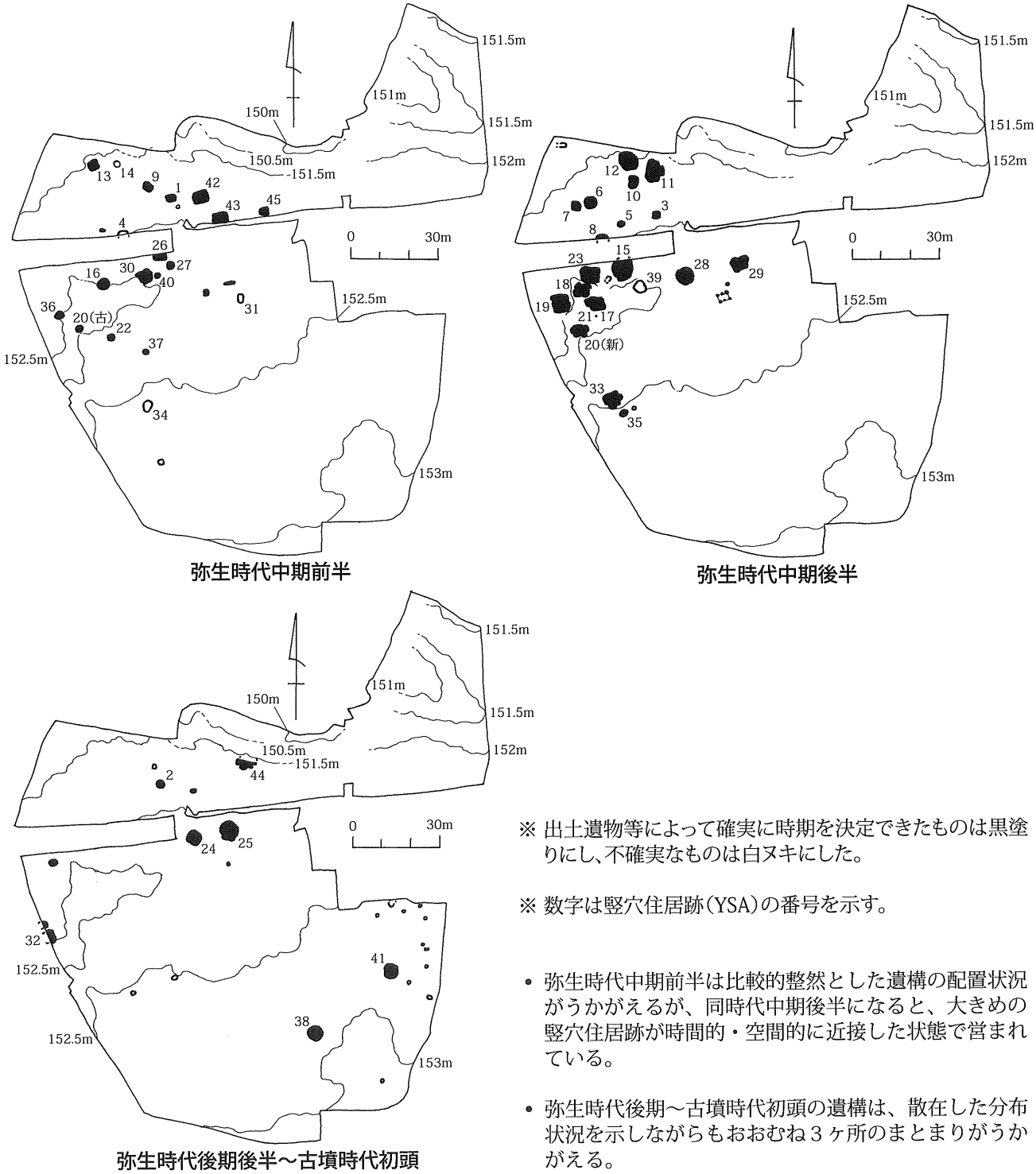
前項で述べたように、今回の調査で得られた遺構内出土の弥生土器は、大きく 2 つの時期に分けることができた。一つが弥生時代中期であり、もう一つが弥生時代後期後半～古墳時代初頭の時期である。さらに、弥生時代中期は、中期前半（入来Ⅱ式併行期）と中期後半（中溝式期もしくは山ノ口Ⅱ式併行期）に細分できる。ただし、包含層出土の土器を見ると、弥生時代前期（板付Ⅱ式併行期）の資料も散見されている。明確な遺構は検出されなかったが、この付近に当該期にさかのぼる集落跡があった可能性もある。横市川の対岸にある肱穴遺跡で確認された弥生時代前期の住居跡はピットが環状に配置されるものであり、竪穴状の落ち込みは確認されていない。このような事例を考慮すると、中世の掘立柱建物跡をはじめとする後世の遺構が著しく重なり合っている加治屋Ｂ遺跡では、その痕跡が後の撹乱で失われた可能性もある。

弥生時代中期の遺構は、調査区域の北西部を中心として検出された。この地点は、霧島御池軽石（8 層）上位に堆積する 7 層上面の等高線で判断すると、南側背後の低位段丘 3 面からしだいに下がってきた地形がいったん緩やかになり、比較的平坦な場所となっている。ここからさらに北へは急傾斜して、低位段丘 1 面へ下がっている。出土遺物がないものもあるため、すべての遺構の時期を明確にすることはできなかったが、竪穴住居跡をはじめとする遺構の床面やピット内出土土器を参考にして、各遺構の時期を判断し、遺構群の変遷を示したのが図 131 である。

中期前半の遺構の中で、まず目を引くのは、床面積が約 20㎡程度の大きめの竪穴住居跡である **YSA42・43** とやや小規模の **YSA45**（床面積約 6.6㎡）という、合わせて 3 軒の住居跡の整然とした配置状況である。屋内施設を見ると、いずれも住居壁際の南側中央に土坑があり、竪穴住居跡の東辺と西辺の中心に主柱穴があるという共通した構造をもっている（棟軸方向は異なるが、**YSA9・YSA13** も同じ構造である。）。主柱

穴によって復元される棟軸方向もほぼ同じである（N－82°～74°－E）。なお、**YSA42・43** は主柱穴内に甕形土器を埋納するという、住居の廃絶に際し共通した行為が認められる。このような東西方向の棟軸をもつ整然とした **YSA42、43、45** を除くと、さらに注目すべき配置状況が見えてくる。すなわち、床面積10㎡未満（3～9㎡）の小規模住居跡が、北ブロックでは、西から **YSA13、YSA9、YSA1** という具合に並び、南ブロックでは、西から **YSA36、YSA20、YSA22、YSA37** という具合に並んでいる。これらの住居跡は10m程度の間隔で配置され、2つの住居ラインに囲まれた空間の中央に床面積約25㎡の **YSA30** や10㎡を超えるとみられる **YSA16、YSA26** などがひとつのまとまりを形成しているのである。

続く、中期後半の集落跡は、出土土器から判断すると、中期前半の集落跡とは若干の断絶があるものと考えられ、そのタイムラグが遺構の配置状況の違いに表れていると推察される。中期後半は、床面積15




※ 出土遺物等によって確実に時期を決定できたものは黒塗りにし、不確実なものは白ヌキにした。

※ 数字は竪穴住居跡（YSA）の番号を示す。

- 弥生時代中期前半は比較的整然とした遺構の配置状況がうかがえるが、同時代中期後半になると、大きめの竪穴住居跡が時間的・空間的に近接した状態で営まれている。
- 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は、散在した分布状況を示しながらもおおむね3ヶ所のまとまりがうかがえる。

**図131　弥生時代～古墳時代初頭の遺構変遷**

～30㎡の比較的大きめの竪穴住居跡が時間的・空間的に近接した状態で営まれており、おおむね同じ場所で何回も竪穴住居が構築され続けたという状況をうかがうことができる。また、同時期と断定することはできないが、竪穴住居跡群から少し離れた位置に掘立柱建物跡（**YSB1**）が構築されたものと考えられる。

以上のような中期の集落跡の様相は、間仕切り土壁がほぼ等間隔で住居の壁面から延びて、整った円形プランを呈する花弁状住居跡がないこと、周溝状遺構が検出されなかったことなど、同じ横市川流域の平田遺跡で把握されるような、都城盆地において認められる一般的な中期の集落跡とは様相が異なっている。

後期後半から古墳時代初頭の遺構群は、中期の遺構群と比較すると、竪穴住居跡が散在しており閑散とした印象を受ける。住居跡は次のようにおおむね３ヶ所のまとまりが看取される。北側グループがいわゆる花弁状住居である**YSA25**と**YSA44**、そして、**YSA24**、**YSA2**であり、西側グループが**YSA32**、東側グループが**YSA38**、**YSA41**である。**YSA38**と**YSA41**は床面付近から赤色顔料塊が出土している。南ブロックの中央部はほとんど遺構を確認することはできなかったが、完形に近い比較的大きな甕や壷などの土器片が出土した。また、Q－12区５層からは管玉が出土しており、掘り込み等は検出できなかったが、なんらかの特殊な遺構に伴っていた可能性がある。実際、検出面からの深さが非常に浅い土坑である**YSC13**には手づくね土器が埋納されていた。さらに、**YSA41**の東側には小規模な土坑群がまとまって検出された。その中の一つである**YSC22**は土坑上面から土製品が出土していることから、これらの土坑群は日常的な生活空間における遺構とは異なる特殊な性格が想定される。　（文責：桒畑光博）

**【注】**

1．入来Ⅱ式～山之口Ⅱ式、中溝式の時間情報については中園聡氏（1997）や桒畑光博（2000）らによってまとめられており、筆者も両者の時間認識のもとに稿を進めていることを断っておく。

2．桒畑光博により、中溝式甕と多く共伴する傾向が指摘され、注意が喚起されている（桒畑 2000）。

**【引用・参考文献】**


石川悦雄　1984「宮崎平野における弥生土器編年試案―素描―（Ｍｋ．2）」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会

桒畑光博　2000「中溝式系土器の検討―宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて―」『古文化談叢』第45集　九州古文化研究会

武末純一　1987「須玖式土器」『弥生文化の研究』4　雄山閣

中園　聡　1996「弥生時代中期土器様式の併行関係　須玖Ⅱ式期の九州・瀬戸内」『史淵』133　九州大学文学部

中園　聡　1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第９号　人類史研究会

西谷　彰　2002「弥生時代後半期における土器編年の併行関係―西日本を中心に―」『古文化談叢』第48集　九州古文化研究会

東　憲章　1998「山の弥生土器」『宮崎考古学会　第36回例会　発表要旨』

松永幸寿　2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号　宮崎考古学会

都城市史編纂委員会（編）　2006『都城市史　資料編　考古』都城市

**―報告書―**

上村俊雄ほか　1985「中町馬場遺跡」『鹿大考古』第３号　鹿児島大学法文学部考古学研究室

河口貞徳　1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18　九州考古学会

桒畑光博　1990『向原第１・２遺跡』都城市文化財調査報告書第11集　都城市教育委員会

桒畑光博　1991『牟田ノ上遺跡』都城市文化財調査報告書第13集　都城市教育委員会

桒畑光博　2000『池ノ友遺跡』都城市文化財調査報告書第49集　都城市教育委員会

桒畑光博（編）　2006『坂元Ａ遺跡　坂元Ｂ遺跡』都城市文化財調査報告書第71集　都城市教育委員会

重永卓爾（編）　1991『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書第14集　都城市教育委員会

東　憲章　1996「本池遺跡の調査」『丸谷地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第34集　都城市教育委員会

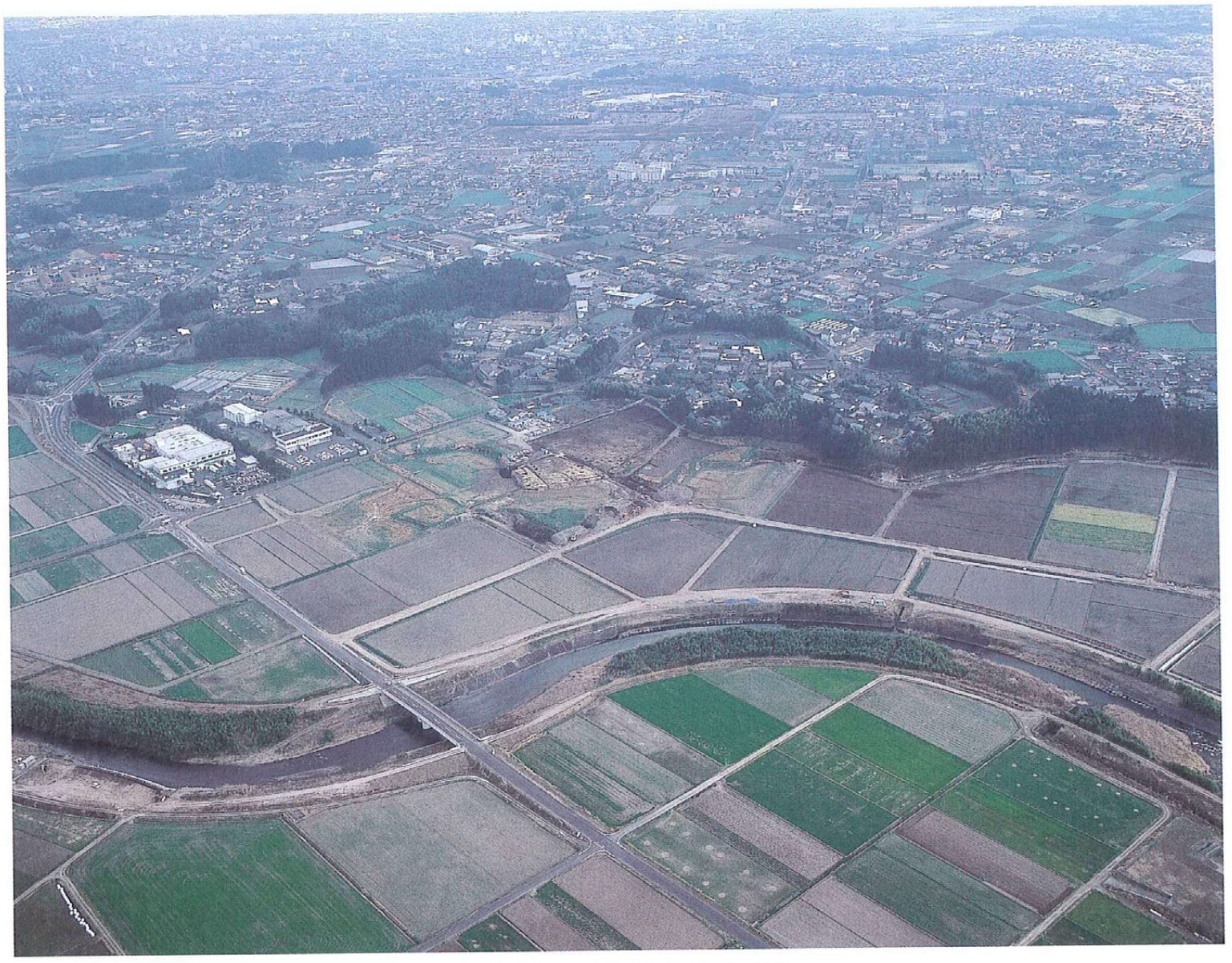
中村直子ほか　1998『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』12　鹿児島大学埋蔵文化財調査室

横山哲英　2000「肱穴遺跡（1）」『横市地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第50集　都城市教育委員会

米澤英昭　1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書第37集　都城市教育委員会

米澤英昭　2005『高田遺跡』都城市文化財調査報告書第70集　都城市教育委員会

## 写真１　遺跡遠景



遺跡遠景（北側上空から）

遺跡遠景（南側上空から）

## 写真２　遺跡土層

調査区北東部鬼界アカホヤ火山灰下土層

調査区北東部土層

調査区北東部鬼界アカホヤ火山灰下土層

調査区北東部鬼界アカホヤ火山灰下土層

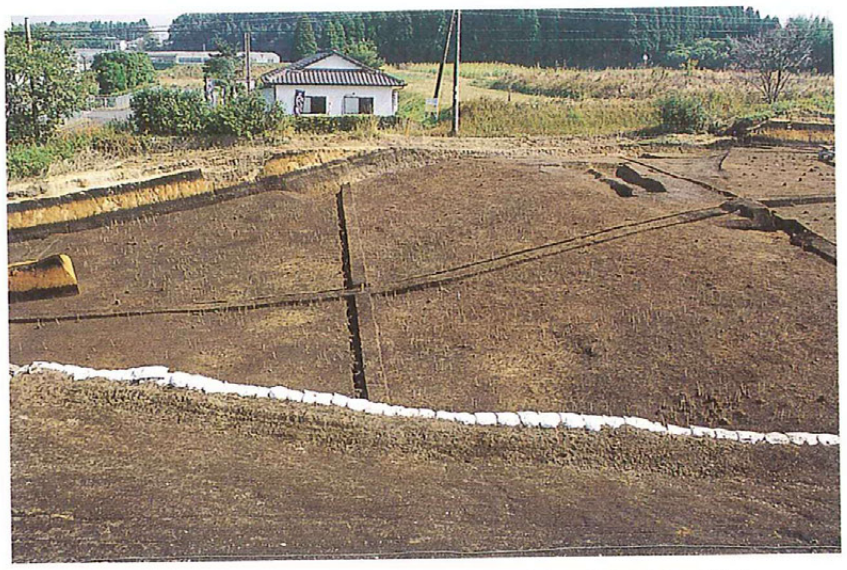
調査区北東部深掘トレンチ土層

調査区北東部深掘トレンチ内桜島薩摩テフラ

北トレンチ霧島御池軽石下の土層堆積状況

縄文時代早期面調査風景

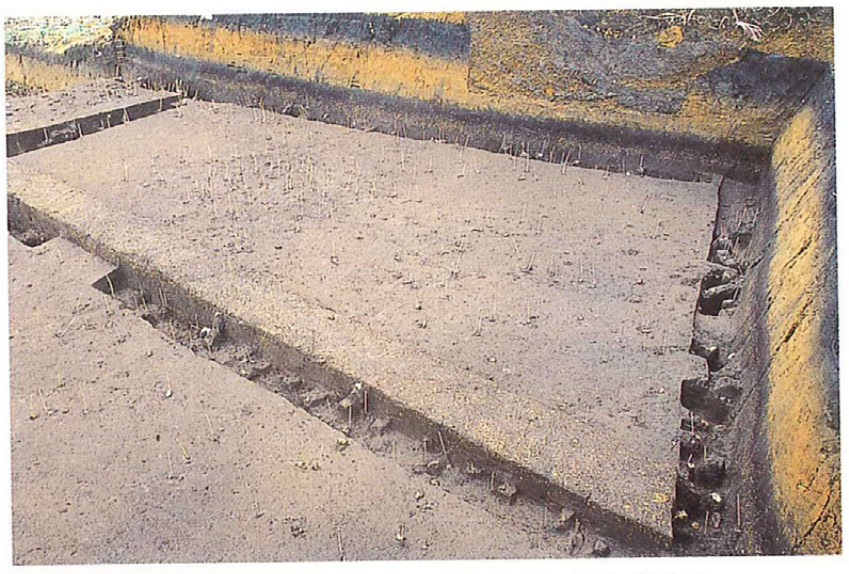
## 写真３　縄文時代早期遺物出土状況



調査区北東部12層下位の地形傾斜状況

Ｆ－17区15層遺物出土状況

Ｅ－15区16層上面遺物出土状況



Ｆ－17区16層上面遺物出土状況

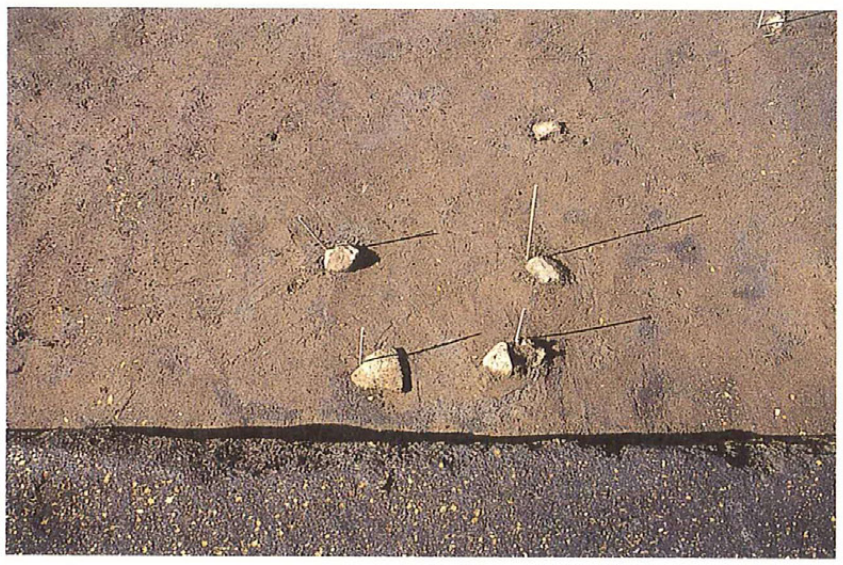
Ｅ－17区16層遺物出土状況

Ｅ－15区16層下部遺物出土状況

Ｅ－16区16層下部遺物出土状況

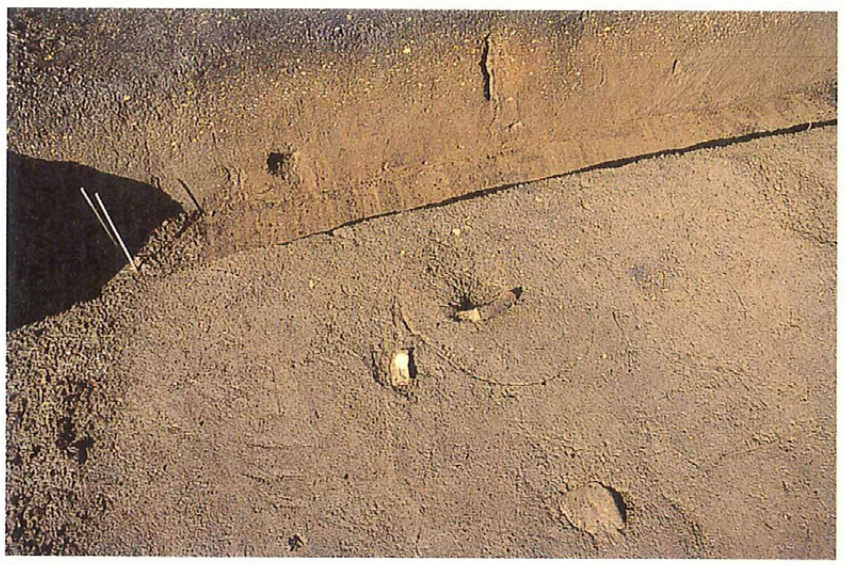
Ｆ－16区16層下部遺物出土状況

## 写真４　縄文時代早期遺物出土状況



Ｅ－15区16層土器出土状況

Ｅ－15 区15層上面土器出土状況

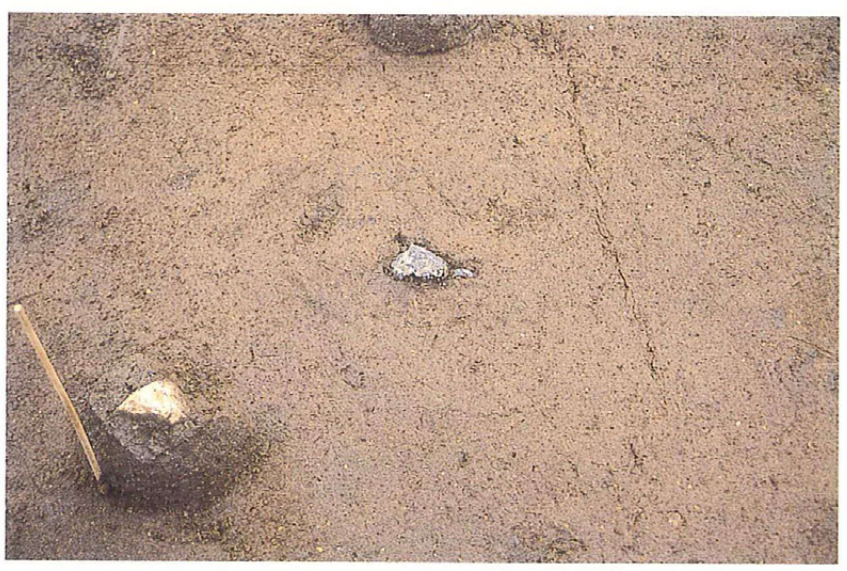


Ｅ－16区16層土器出土状況

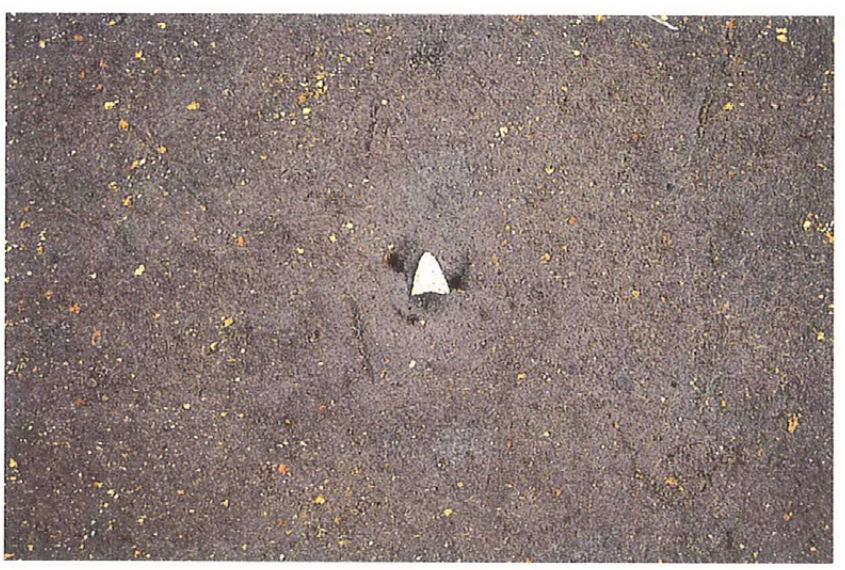
Ｅ－16 区16層土器出土状況

Ｅ－16区16層下部土器出土状況

Ｆ－16区16層土器出土状況



Ｆ－16区16層下部黒曜石出土状況

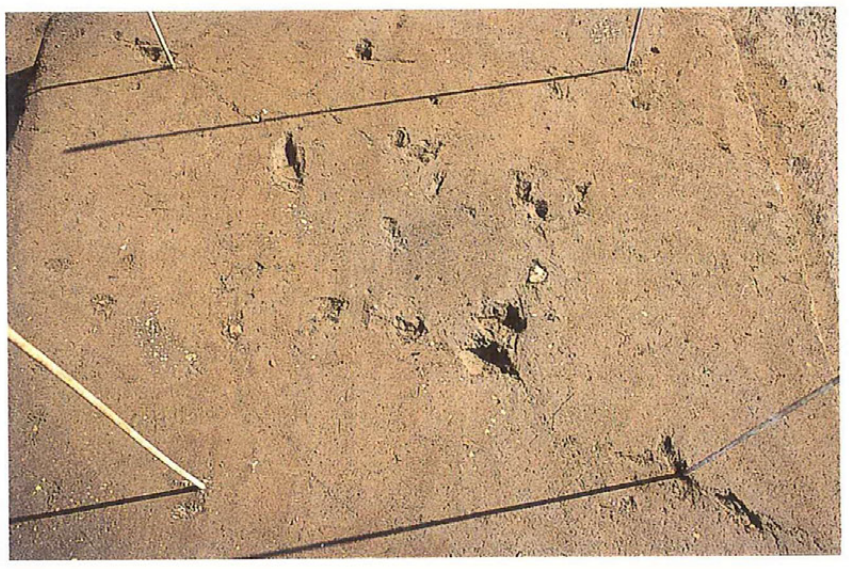


Ｂ－16区15層打製石鏃出土状況

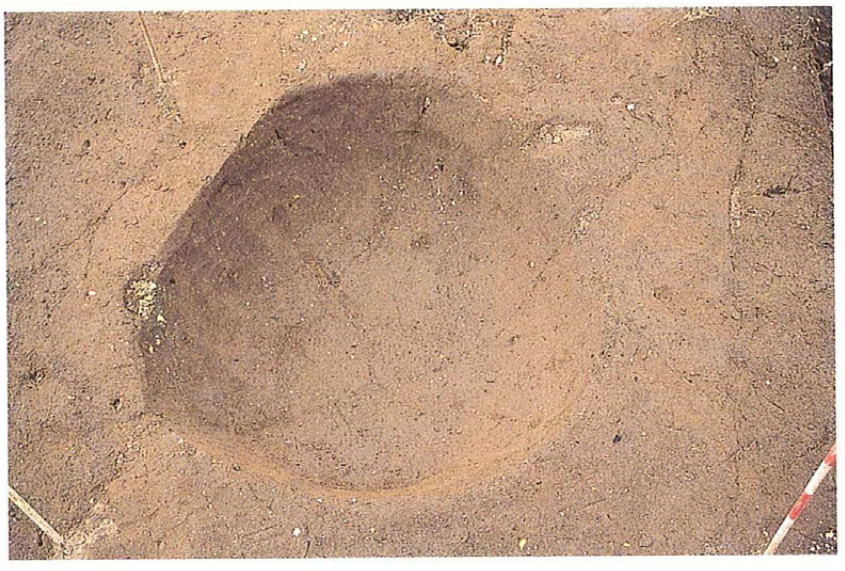
## 写真５　縄文時代早期遺構

集石遺構（JSS1）

集石遺構（JSS2）



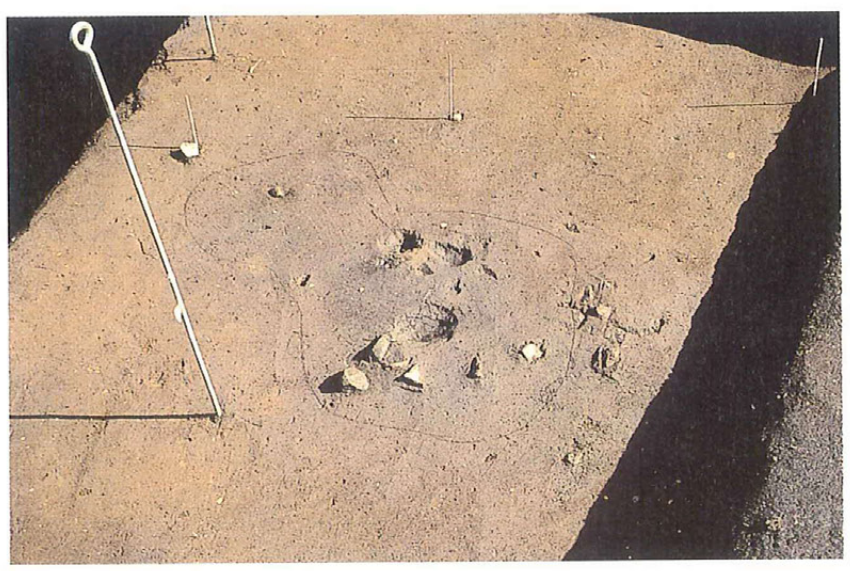
集石遺構（JSS2）掘り込み検出状況



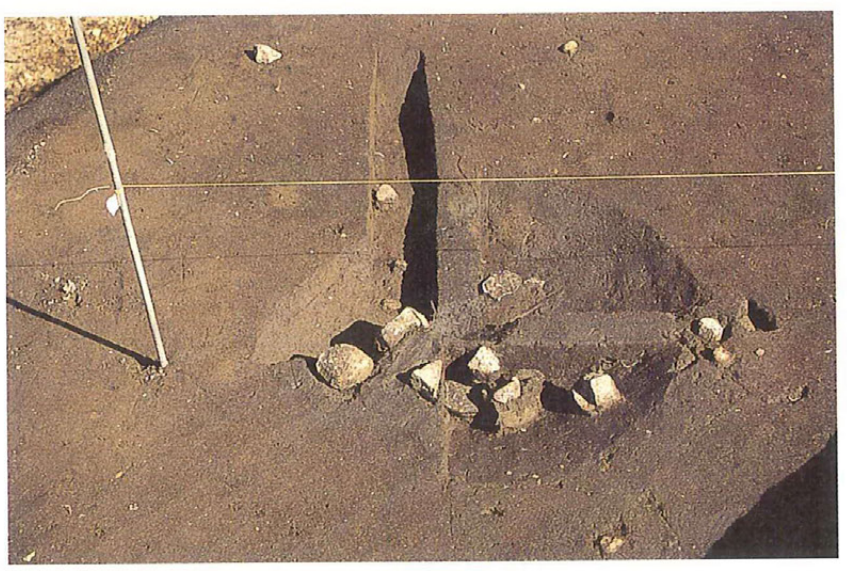
集石遺構（JSS2）掘り込み

集石遺構（JSS3・4）

集石遺構（JSS4 a・b）

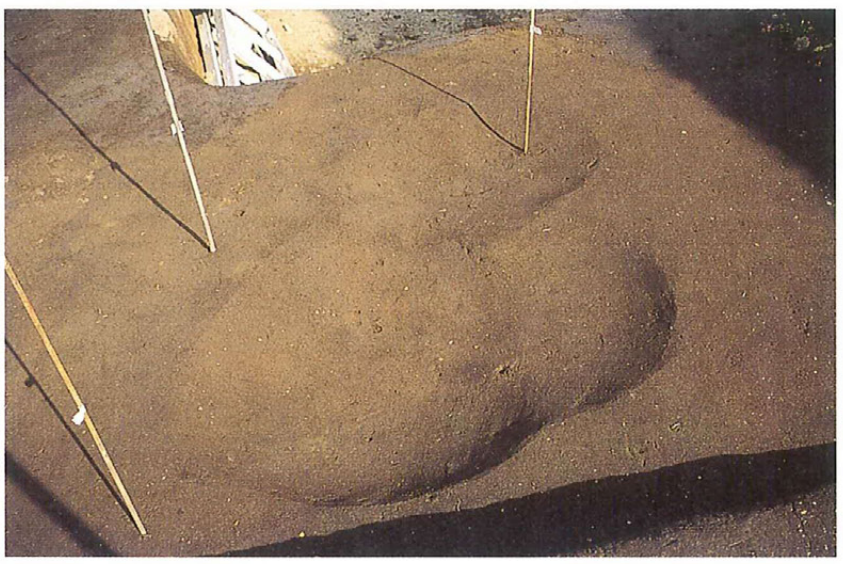


集石遺構（JSS4）掘り込み検出状況



集石遺構（JSS4）掘り込み断面

## 写真６　縄文時代早期遺構

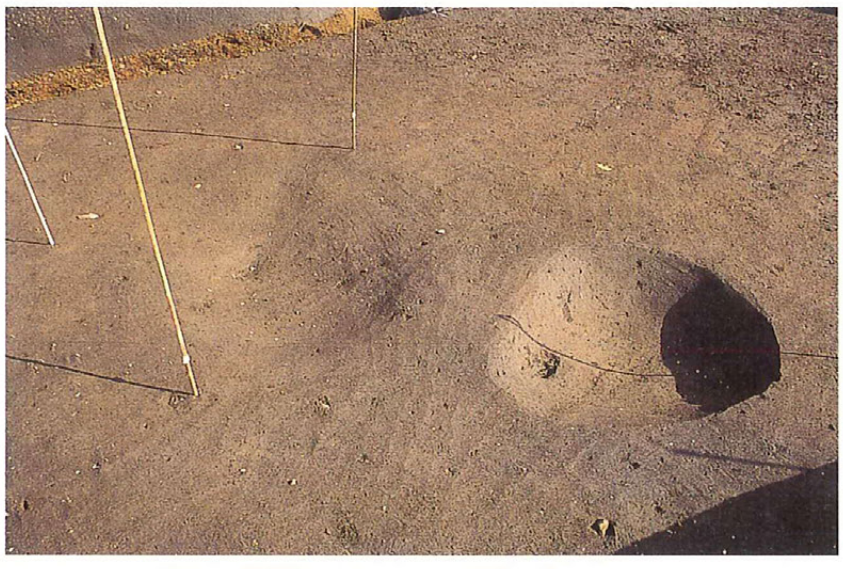


集石遺構（JSS4）掘り込み

集石遺構（JSS5）

集石遺構（JSS6・18）

集石遺構（JSS6・18）掘り込み検出状況



集石遺構（JSS6・18）掘り込み

集石遺構（JSS7）

集石遺構（JSS7）掘り込み検出状況

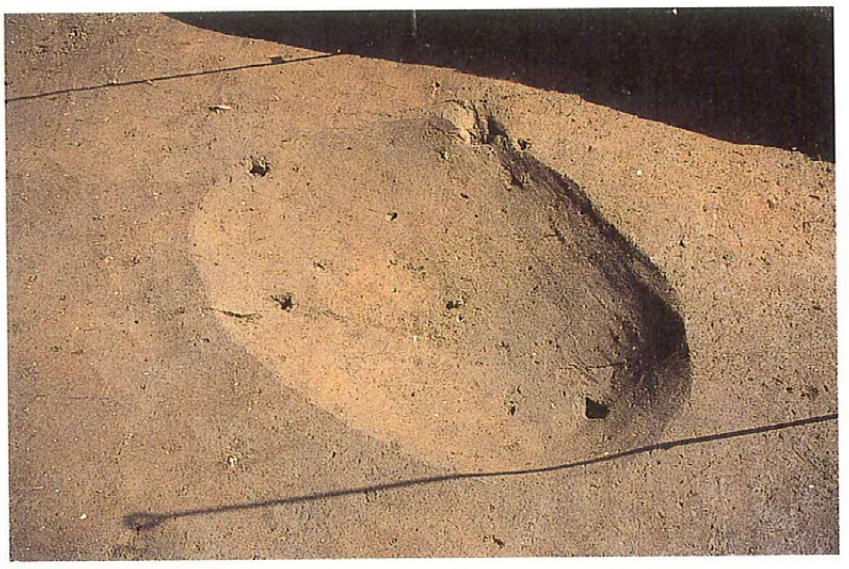
集石遺構遺構（JSS7）掘り込み断面

## 写真７　縄文時代早期遺構

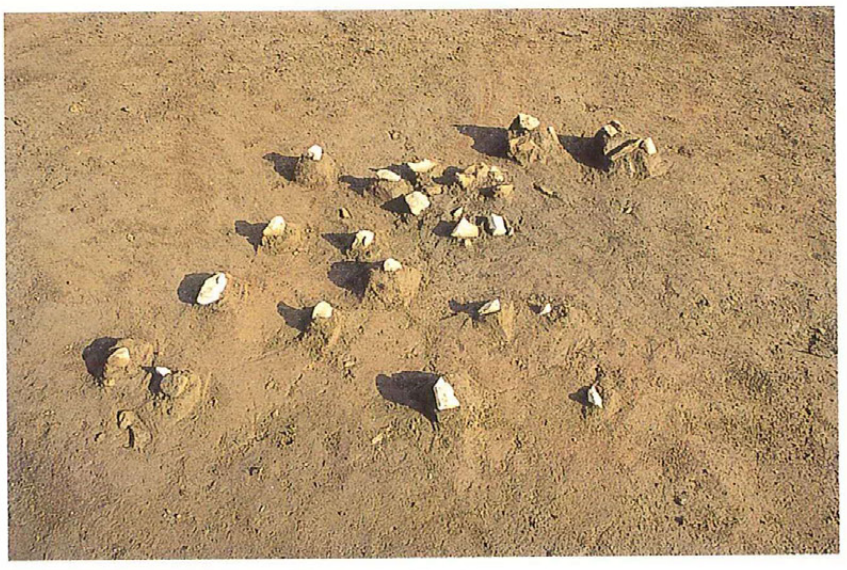
集石遺構（JSS7）掘り込み

集石遺構（JSS8）検出状況

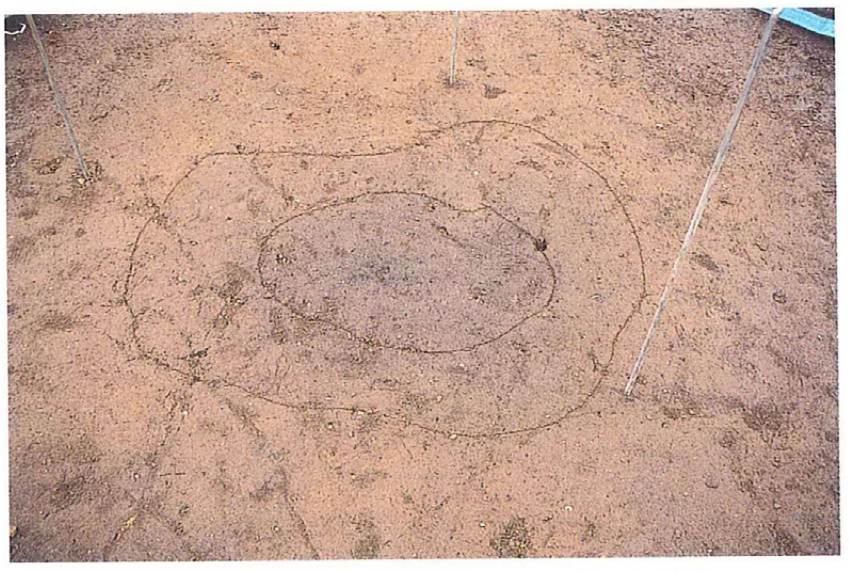
集石遺構（JSS8）



集石遺構（JSS8）掘り込み

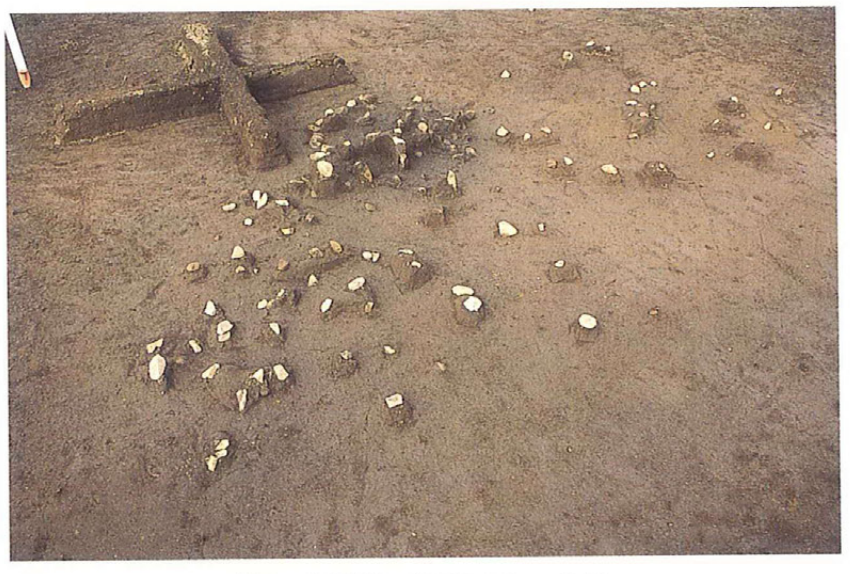


集石遺構（JSS9）



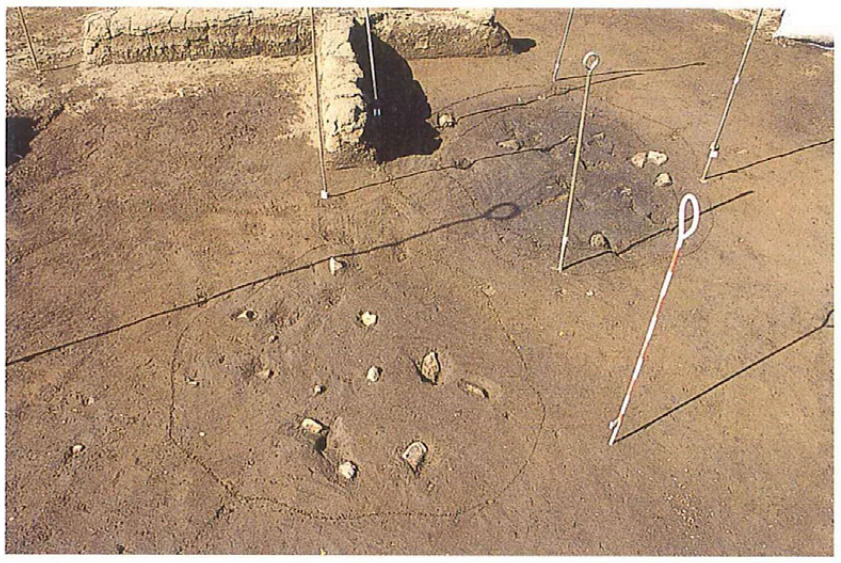
集石遺構（JSS9）掘り込み検出状況

集石遺構（JSS9）掘り込み

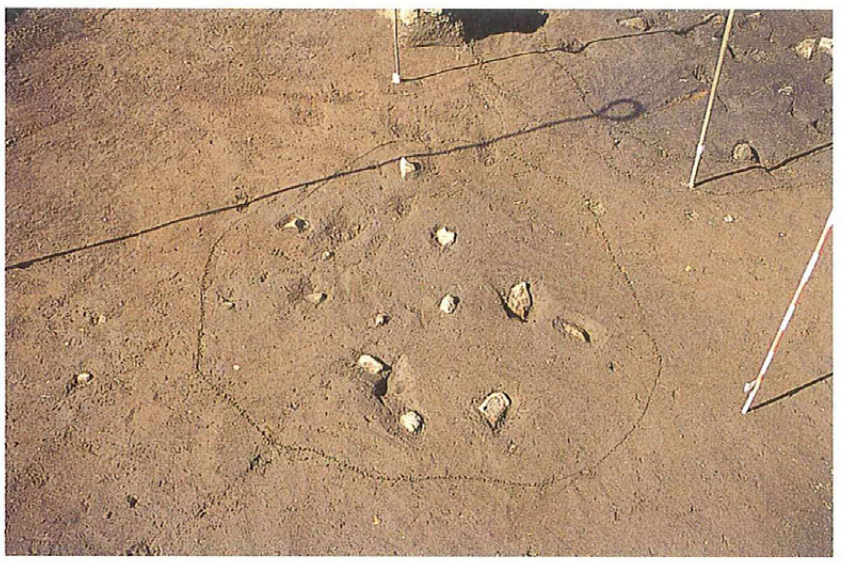


集石遺構（JSS10・11）

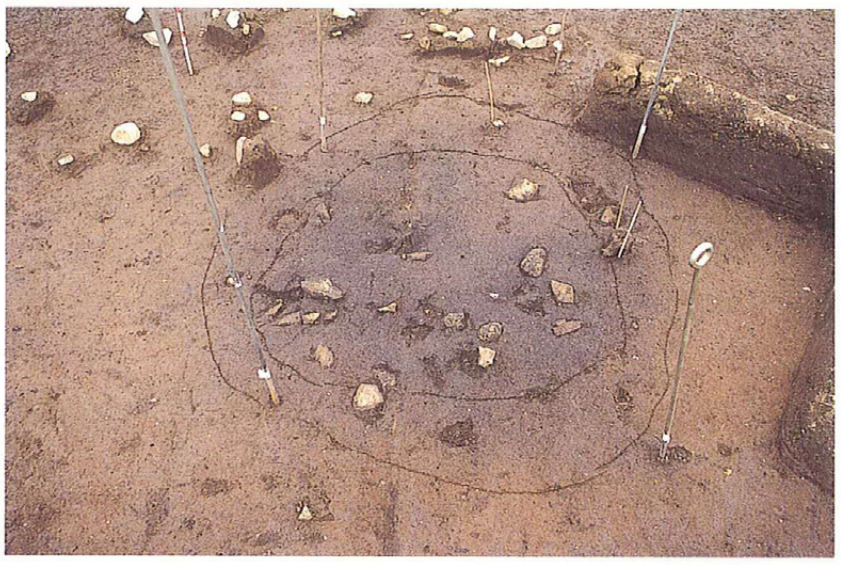
## 写真８　縄文時代早期遺構



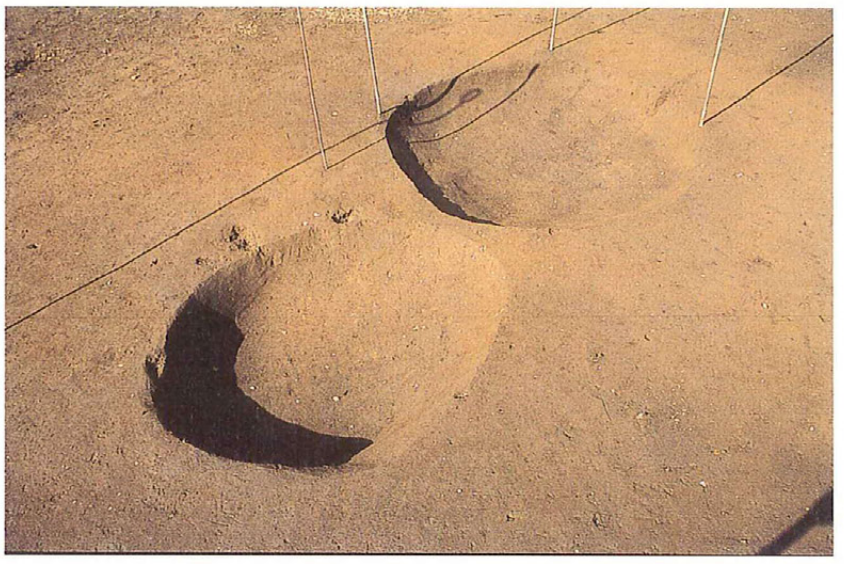
集石遺構（JSS10・11）掘り込み検出状況



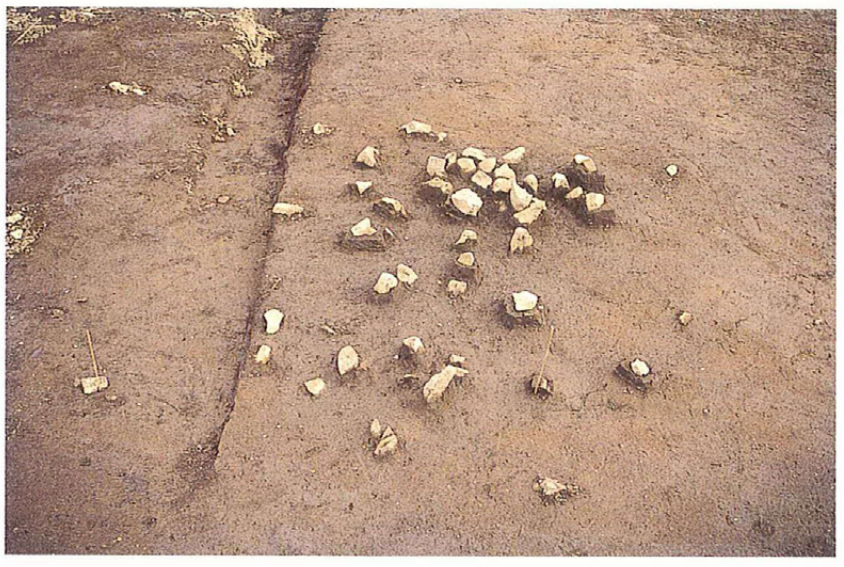
集石遺構（JSS10）掘り込み検出状況



集石遺構（JSS11）掘り込み検出状況

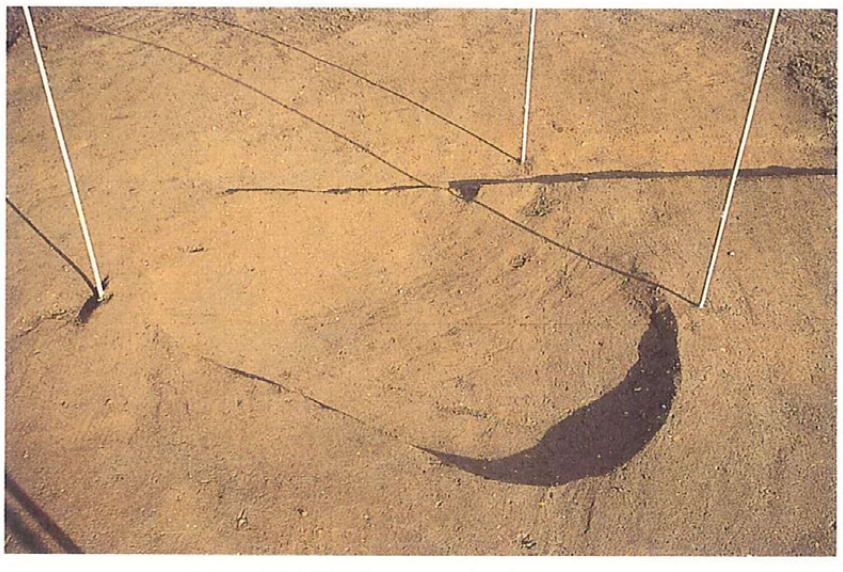


集石遺構（JSS10）掘り込み

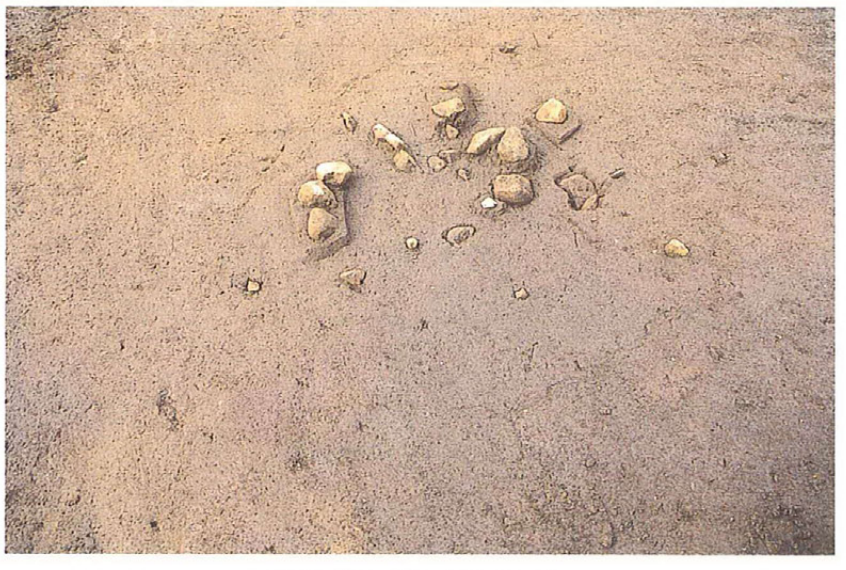


集石遺構（JSS12）

集石遺構（JSS12）掘り込み検出状況

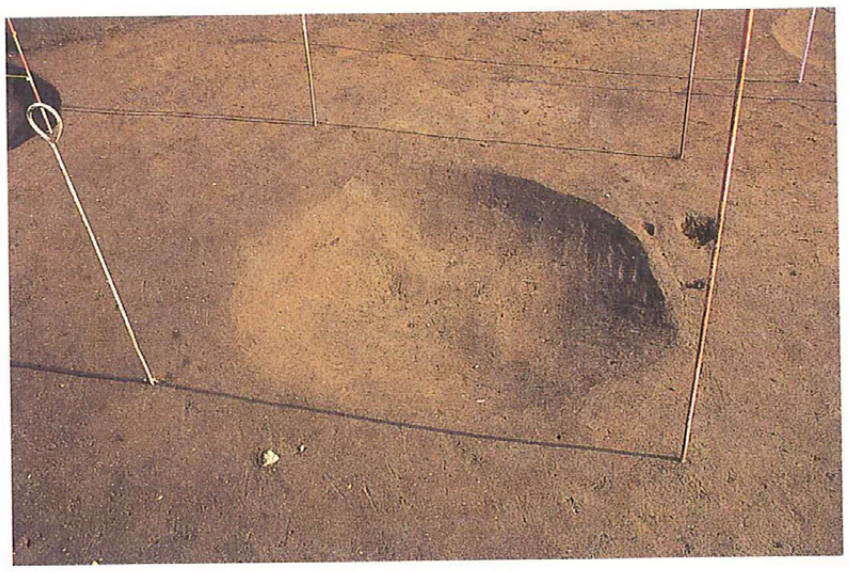


集石遺構（JSS12）掘り込み

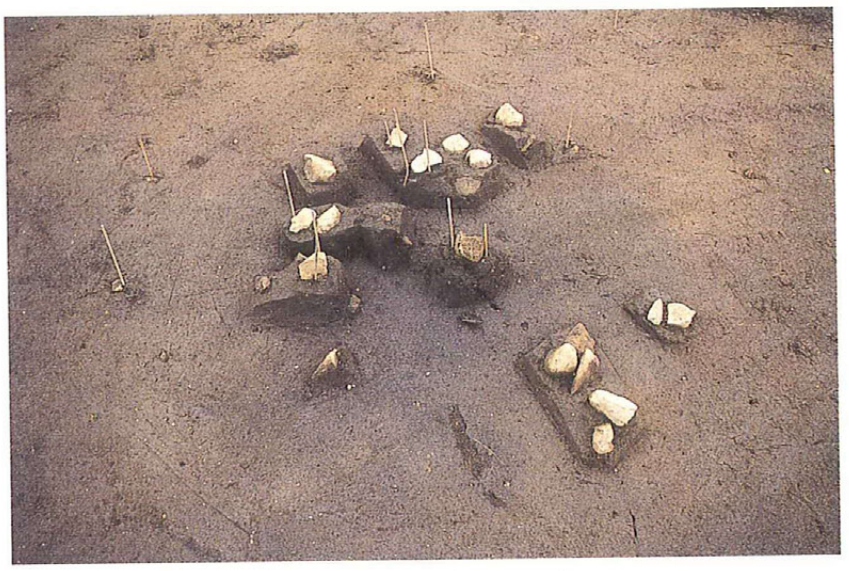


集石遺構（JSS13）

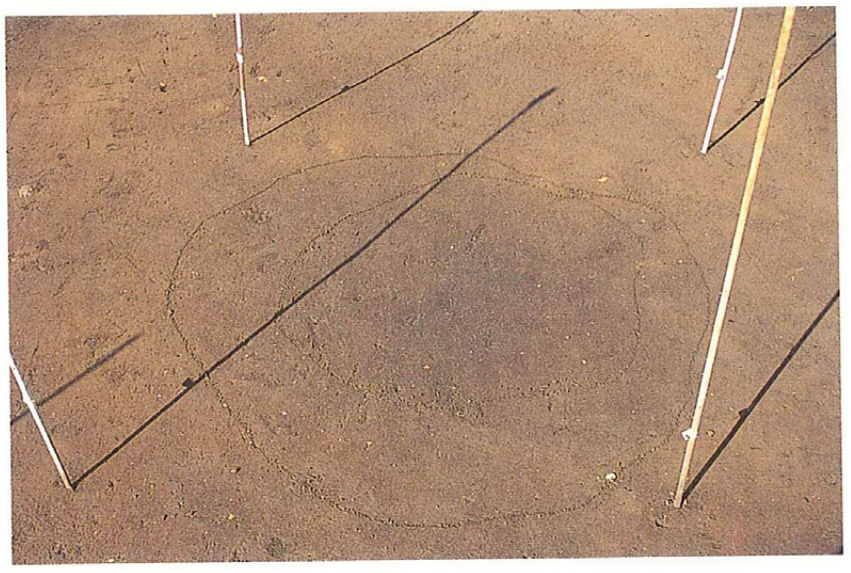
## 写真９　縄文時代早期遺構



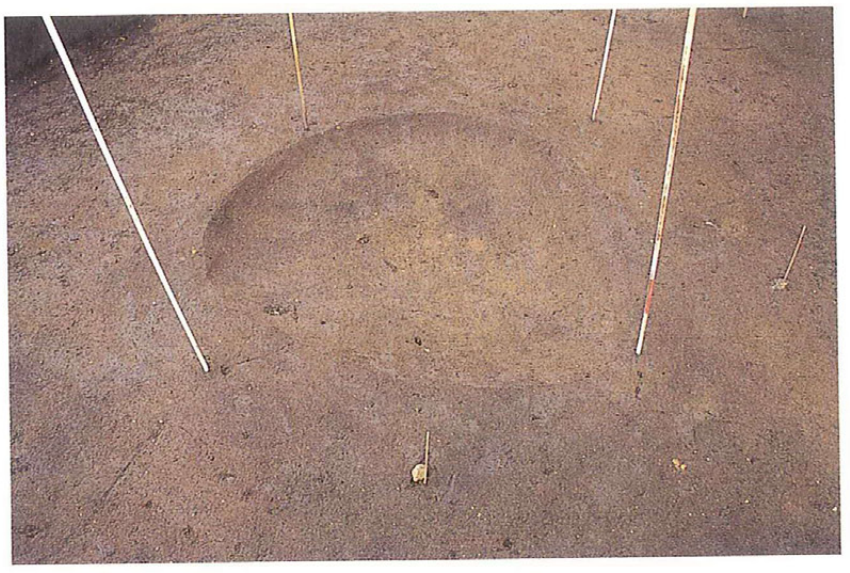
集石遺構（JSS13）掘り込み



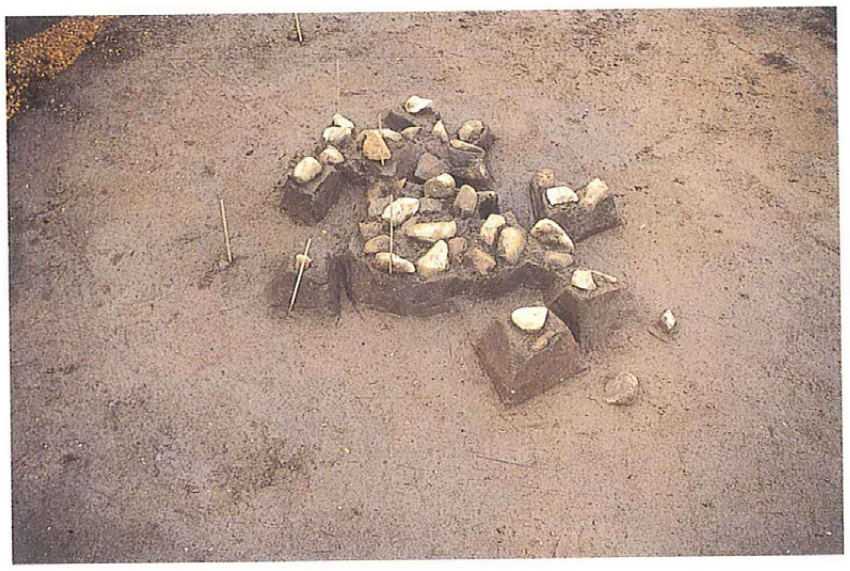
集石遺構（JSS14）



集石遺構（JSS14）掘り込み検出状況



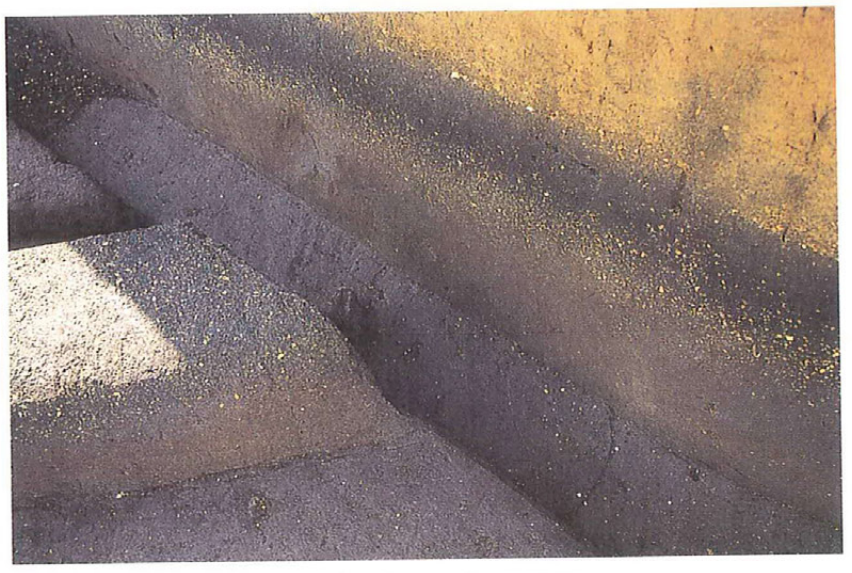
集石遺構（JSS14）掘り込み



集石遺構（JSS15）

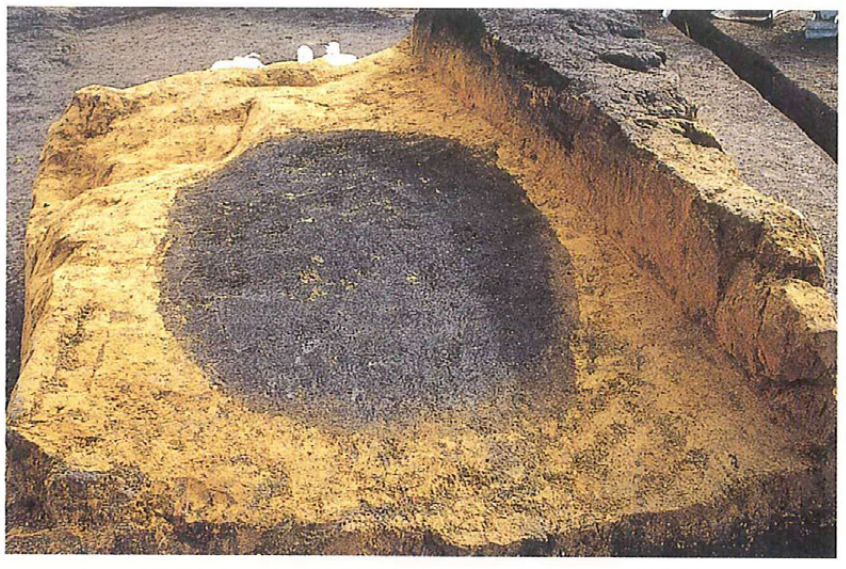
集石遺構（JSS15）掘り込み

集石遺構（JSS17）掘り込み



土坑（JSC6）断面

## 写真10　縄文時代前・中期遺構



落とし穴状遺構（JSC5）検出状況

落とし穴状遺構（JSC5）断ち割り

落とし穴状遺構（JSC5）断ち割り

落とし穴状遺構（JSC5）小ピット

落とし穴状遺構（JSC5）小ピット

落とし穴状遺構（JSC5）断ち割り

落とし穴状遺構（JSC5）小ピット

落とし穴状遺構（JSC5）小ピット

## 写真11　縄文時代後・晩期遺構

調査区北東部霧島御池軽石上位の土層堆積状況

竪穴状遺構（JSC1）検出状況

竪穴状遺構（JSC1）調査風景

竪穴状遺構（JSC1）完掘状況

竪穴状遺構（JSC4）調査風景

土坑（JSC3）断面

土坑（JSC3）

土坑（JSC2）断面

## 写真12　弥生時代の調査

第１次調査弥生時代遺構全景（真上から）

第１次調査弥生時代遺構群（北側）

第１次調査弥生時代遺構群（南側）

## 写真13　弥生時代の調査

第１次調査弥生時代遺構群（真上から）

第２次調査弥生時代遺構群（真上から）

## 写真14　弥生時代中期遺構

竪穴住居跡（YSA1）断面

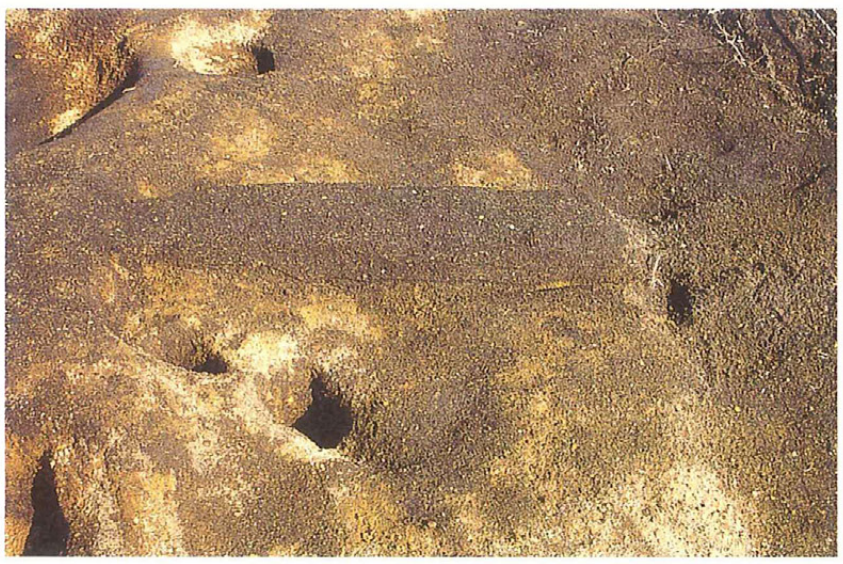
竪穴住居跡（YSA1）貼床断面

竪穴住居跡（YSA1）

竪穴住居跡（YSA3）断面

竪穴住居跡（YSA3）遺物出土状況

竪穴住居跡（YSA3）



竪穴住居跡（YSA4）断面

竪穴住居跡（YSA4）